

秋田県文化財調査報告書第354集

物 見 坂 遺 跡

- 国道282号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2 0 0 3 ・ 3

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂 しろざか 遺跡
出土の「岩偶」です。

縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

もの 見 坂 遺 跡
物 見 坂 遺 跡

- 国道282号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2003・3

秋田県教育委員会



物見坂Ⅲ遺跡近景（西から）



SK327土杭墓出土遺物

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田をめざす開発事業の根幹を成すものであります。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、国道282号改築工事に先立って、平成13年度に鹿角市十和田毛馬内地区で実施した物見坂 遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、縄文時代前期の土坑墓群、平安時代の竪穴住居跡などが見つかри、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県鹿角建設事務所、鹿角市、鹿角市教育委員会など関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

秋田県教育委員会

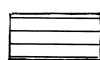
教育長 小野 寺 清

例 言

- 1 本報告書は、国道282号国道道路改築事業に係る秋田県鹿角市十和田錦木字下野2 - 2外に所在する物見坂遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査等については、すでに平成12年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料・秋田県埋蔵文化財センター年報20(平成13年度)・物見坂遺跡発掘調査資料として一部を公表したが、本報告書の記載内容がすべてに優先する。
- 2 第5章の自然科学分析には、パレオ・ラボ株式会社に業務委託した分析報告書を編集し収載した。
- 3 遺跡航空写真は、株式会社シン技術コンサルに業務委託した空中写真を使用した。
- 4 本報告書挿図中に使用した土層表記法は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1989年版』を使用した。
- 5 本報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行25,000分の1「花輪」「小坂」・50,000分の1「花輪」「小坂」、および秋田県鹿角建設事務所提供の工事図面である。
- 6 本遺跡の調査ならびに報告書刊行にあたり、付記内容を御指導、御教示いただいた(敬称略)。
高島成侑(八戸工業大学建築工学科教授、掘立柱建物跡にみる時代考証について)
長尾正義(三沢市教育委員会主査、縄文時代早期から前期の尖底土器について)
女鹿潤哉(岩手県立博物館学芸員、岩手県内各地の縄文時代早期から前期の遺物について)
- 7 本書の草稿執筆と編集は、藤澤一史が行った。

凡 例

- 1 遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号、検出順に通し番号を付し、精査の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。
遺構 S A・・・柱列 S B・・・掘立柱建物跡 S D・・・溝跡
 S I・・・竪穴住居跡 S K・・・土坑(土坑墓) S K F・・・フラスコ状土坑
 S K T・・・陥し穴 S K P・・・柱穴様ピット S W・・・炭焼遺構
遺物 R P・・・土器 R Q・・・石製品 R S(S)・・・石
- 2 遺跡基本層位の土層注記にはローマ数字を用いた。
- 3 挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず通し番号を付し、図版中の番号と対応する。また、挿図中の出土地点は、遺構番号の他にグリッドと調査区(E=東区・W=西区・S=南区)の略号を用いて記載した。
- 4 基本的に遺構実測図は1/40及び1/20、遺物実測図は1/2及び1/3の縮尺で掲載した。しかし挿図割付の関係上、さらに若干の縮小を施した挿図がある。各頁に付したスケールを参照されたい。



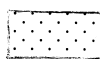
地山



炭化物



焼土



白色粘土



すり

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

目次

挿図・表・図版目次

第1章	はじめに.....	1
第1節	調査に至る経過.....	1
第2節	調査要項.....	1
第2章	遺跡の位置と立地.....	3
第1節	遺跡の立地.....	3
第2節	地理的環境.....	3
第3節	歴史的環境.....	4
第3章	調査の概要.....	8
第1節	遺跡の概観.....	8
第2節	基本層序.....	8
第3節	調査の方法.....	14
第4節	発掘調査の経過.....	16
第4章	調査の記録.....	17
第1節	検出遺構と出土遺物.....	17
1	縄文時代.....	17
2	古代～中世.....	35
第2節	遺構外出土遺物.....	53
1	土器.....	53
2	石器.....	57
第5章	自然科学分析.....	75
第1節	放射性炭素年代測定.....	75
第2節	炭化材の樹種同定.....	76
第3節	火山灰分析.....	77
第4節	植物珪酸体分析.....	79
第5節	花粉化石群集.....	80
第6節	炭化種実.....	81
第6章	まとめ.....	87

報告書抄録

挿図・表・図版目次

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	周辺遺跡地図	6
第3図	遺構配置図(略図)及び地形図	9
第4図	東区・西区遺構配置図(詳細)	10
第5図	南区遺構配置図(詳細)	11
第6図	基本土層ベルト位置図	12
第7図	基本土層	13
第8図	グリッド配置図	15
第9図	検出遺構 SK304 SK305 SK307 SK327	24
第10図	検出遺構 SK320 SK325 SK328 SK341 SK101 SK102	25
第11図	遺構内出土土器(1~9)	26
第12図	遺構内出土土器・石器(10~13)	27
第13図	遺構内出土土器(14~16)	28
第14図	検出遺構 SKT105 SKT107 SKT201	29
第15図	検出遺構 SKT203 SKT204 SKT205	30
第16図	検出遺構 SKT206 SKT308	31
第17図	検出遺構 SKT331 遺構内出土土器・石器(17~23)	32
第18図	検出遺構 SKF106 SKF309 SKF343 SKF344	33
第19図	遺構内出土土器(24~28)	34
第20図	検出遺構 SI303	39
第21図	検出遺構 SI303カマド	40
第22図	遺構内出土土器(29~36)	41
第23図	遺構内出土土器(37~44)	42
第24図	遺構内出土土器(45~48)	43
第25図	検出遺構 SI310 SW202 SW207 SW301	44
第26図	遺構内出土土器・石器(49~56)	45
第27図	遺構内出土土器(57~63)	46
第28図	検出遺構SD103 SKT104 遺構内出土土器(64)	47
第29図	検出遺構SB001 SB002	48
第30図	検出遺構SB003 SB004	49
第31図	検出遺構SB005 SA006 SK316	50
第32図	遺構外検出土器(65~77)	59
第33図	遺構外検出土器(78~87)	60
第34図	遺構外検出土器(88~95)	61
第35図	遺構外検出土器(96~103)	62
第36図	遺構外検出土器(104~113)	63
第37図	遺構外検出土器(114~127)	64
第38図	遺構外検出土器(128~133)	65
第39図	遺構外検出土器(134~146)石鏃・尖頭器・石匙	66

第40図	遺構外検出土器(147~155)石鏃	67
第41図	遺構外検出土器(156~164)スクレイパー	68
第42図	遺構外検出土器(165~172)スクレイパー	69
第43図	遺構外検出土器(173~177)石錘・石核・磨製石斧	70
第44図	遺構外検出土器(178~181)石錘	71
第45図	遺構外検出土器(182~185)石錘・環状石製品・ 凹石・すり石	72
第46図	遺構外検出土器(186~190)すり石	73
第47図	遺構外検出土器(191~194)すり石	74

表目次

第1表	周辺遺跡一覧	7
第2表	物見坂 遺跡調査工程	16
第3表	掘立柱建物跡観察表	51
第4表	柱穴観察表	52
第5表	放射性年代測定および暦年代較正の結果	83
第6表	炭化材樹種同定結果	83
第7表	火山ガラスの形態区分	84
第8表	堆積物の鉱物分析結果一覧	84
第9表	堆積物中の鉱物組成	85
第10表	火山ガラスの屈折率測定結果	85
第11表	試料1g当たりの植物珪酸体個数	86
第12表	植物珪酸体分布図	86
第13表	花粉化石一覧表	86

図版目次

図版1	調査区近景 遺構集中区 SK327遺物出土状況
図版2	土坑墓
図版3	陥し穴 フラスコ状土坑 竪穴住居跡 炭焼遺構 溝跡
図版4	遺構内出土土器
図版5	遺構内出土土器・石器
図版6	SI303遺構内出土土器
図版7	SI310遺構内出土土器
図版8	遺構外出土土器
図版9	遺構外出土土器
図版10	遺構外出土土器
図版11	遺構外出土土器
図版12	遺構外出土土器
図版13	遺構外出土土器
図版14	自然科学分析

第1章 はじめに

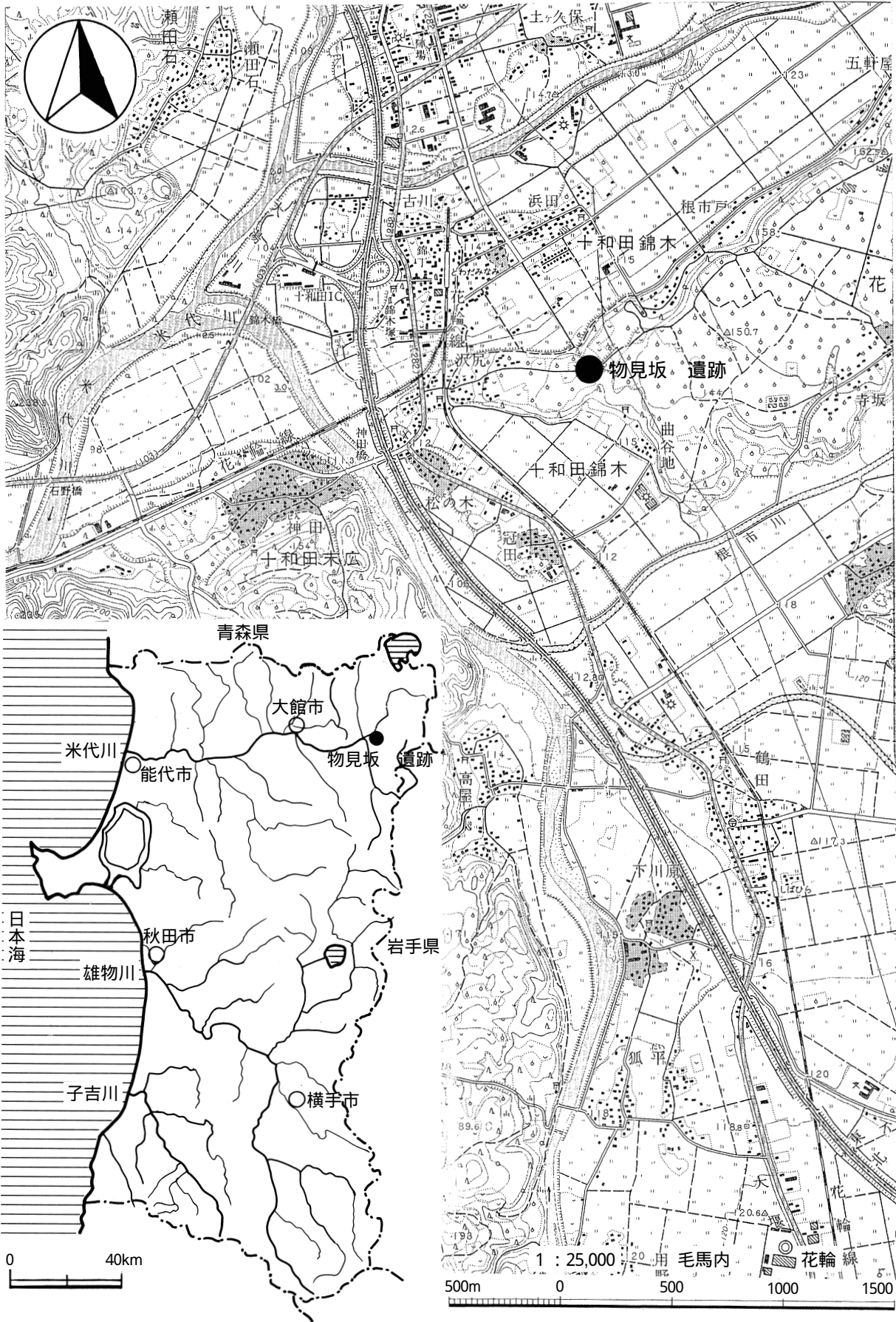
第1節 調査に至る経過

秋田県建設交通部により鹿角市十和田における国道282号の改築事業が計画された。国道282号は、岩手県盛岡市を起点とし、秋田県鹿角市、青森県碓ヶ関村を結ぶ幹線道路で、十和田八幡平国立公園を中心とした観光拠点を連結する観光道路として機能を有するとともに各生活圏を連結する生活道路でもある。改築事業は毛馬内地区での現道の狭隘と、JR花輪線来満踏切りなど交通のネックを解消し、安全かつ円滑な交通の流れの確保することを目的としている。

本地区に埋蔵文化財包蔵地の存在する可能性があることは、市教育委員会の事前調査で明らかにされていたが、秋田県鹿角建設事務所は文化財保護法に基づき、この事実確認と今後の対応について県教育委員会に調査を依頼した。平成11年度に、県教育委員会が県建設交通部に事業紹介した際、鹿角市十和田毛馬内錦木地区で国道282号改築事業を予定していることが判明した。当該地域には、鹿角市教育委員会の調査で埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性があるとしており、平成12年4月に鹿角建設事務所長から県教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼があった。同年5月、遺跡分布調査を実施した結果、計画路線に隣接する物見坂 遺跡の範囲が、周知の範囲より大きく西側へ広がり、計画路線内に及んでいる可能性があることを確認した。このため、同年9～10月に確認調査を実施し、発掘調査が必要であるとの結論に達した。県建設交通部と県教育委員会が協議を行い、当該地域の記録保存の措置をとることとなった。秋田県教育委員会は、物見坂 遺跡の発掘調査を平成13年5月から実施するに至った。

第2節 調査要項

遺跡名称	物見坂 遺跡（ものみざかさんいせき）	遺跡略号	1 MMZ
所在地	秋田県鹿角市十和田錦木字下野2 - 2外		
調査期間	平成13年5月17日～10月26日		
調査面積	6,500㎡		
調査主体者	秋田県教育委員会		
調査担当者	秋田県埋蔵文化財センター		
	小林 芳行（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事）（平成14年3月転出）		
	藤澤 一史（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事）		
総務担当者	佐藤 悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課 課長）		
	高橋 修（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任）		
	佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事）（平成14年3月転出）		
	成田 誠（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事）		
調査協力機関	秋田県鹿角建設事務所 鹿角市教育委員会 秋田県立十和田高等学校		



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と立地

第1節 遺跡の立地

遺跡の位置する秋田県鹿角市は県の北東部、米代川上流域の花輪盆地を中心とした都市である。北は小坂町、南は仙北郡田沢湖町、西は大館市と北秋田郡比内町、東は岩手県と境を接する。面積は707.34 km²、人口39,910人(2002年1月現在)である。

市域の南北を国道282号が縦走し、JR花輪線は東大館から十和田南駅・花輪駅を通り好摩までを結んでいる。また東北自動車道は市の中心部を通り盛岡方面と弘前方面を結んでおり、市内中央に鹿角八幡平インター、市内北部に十和田インターを擁し、陸路交通の要所となっている。

鹿角市は、十和田八幡平国立公園の拠点とし大湯温泉郷や八幡平温泉郷、湯瀬温泉郷等の自然観光資源に恵まれ、合わせて日本三大ばやしの花輪ばやしや秋田県三大盆踊りの一つ毛馬内盆踊り、国の重要無形民俗文化財に指定されている大日堂舞楽といった古くからの伝統を引き継ぐ民俗芸能も多い。また、国特別史跡大湯環状列石の整備を進め周辺部の観光地との連携を図り、歴史的観光資源保存活用整備にも力を入れている。鹿角市を大きく分けると、北から大湯地区・毛馬内地区、花輪地区、尾去沢地区、八幡平地区がある。どの地区をとっても共通して言えるのが米代川とその支流である小河川があり、河岸段丘や舌状台地を形成している点があげられる。したがって、川の恵みとともに人々の暮らしが古くから営まれていたことが推察できる。

物見坂 遺跡は、鹿角市花輪地区より北に約3.8km、鹿角市十和田毛馬内地区からは南に約1.0kmの位置にあり、通称風張台地の先端部に位置する。その台地の裾は南側を根市川、北を大湯川が西流し、ともに本流米代川に本遺跡の西約3kmの地点で合流している。

第2節 地理的環境

鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地よりなる。山地は、東側が標高800m～1,100mの満壮年期の険しい地形を示し、特に南部の皮投岳(1,122m)、五の宮嶽(1,115m)等、起伏の大きい山塊が連なる。地質は主として新第三紀、中新世の火山砕屑岩類から成るが、それらを貫いて石英安山岩や安山岩も分布している。また、谷内付近や湯瀬南方には粘板岩を主とする古生層が露出している。

一方、西側の山地は標高400～600mで、山容も東側ほどの険しさは見られない。地質は東側山地同様新第三紀中新世の火山砕屑岩を主とするが、大葛層、大滝層などで砂岩、泥岩など砕屑岩が発達している。

盆地内の段丘地形は4段に識別される。最高位の面は浦志内川や歌内川等が盆地に注ぐ付近に扇状地状に見られる面で、標高270～330mと傾斜がやや顕著であり、かなり解析されている。主として河成の垂角礫～角礫からなり、風化が著しい。

次の第2段目は、標高180～250mで、南部で扇状地様の形状を残すものの、大里以北では厚い火砕

流堆積物に覆われ、火砕流台地としての形状を示している。関上面あるいは鳥越面と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。

3段目は標高180m～250mで、主として米代川左岸に沿い尾去沢から松館、荒町にかけて分布している。松館面と呼ばれ、夜明島川、黒沢川等による扇状地の解析された面と考えられる。

4段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で、大里面と呼ばれている。標高150～155mと低平であり、上部は砂礫層を主としている。葛岡西方の段丘崖の下部から中部にかけては、固結度のよい成層した円磨礫を含む砂礫、粘土層が見られるが、これは段丘基盤の更新統の一部である可能性が強い。

沖積低地は標高100～120mで、主として砂礫層から成る。

東西における山地の起伏量、山容の違い、段丘の非対称的分布等は、米代川沿いに北上する花輪断層に起因しており、東側山地を含む断層の東部地塊が第四紀を通して上昇傾向が強かったことを物語っている。

第四紀の十和田火山起源の火山砕屑物層については、内藤(1966、1970)等により、古い方から高市軽石質火山灰層(25,850±1,360)、鳥越軽石質火山灰層(12,000±250)、申ヶ野軽石質火山灰層(8,600±250)、大湯軽石火山礫層(3,680±130)、毛馬内軽石質火山灰層(1,280±90)に区分されていたが、近年大湯軽石質火山礫層と毛馬内軽石質火山灰については、青森県一帯に分布する十和田降下火山灰と一連のものであり、約1,000年前の降下堆積物であると考えられている。また、高屋地域において、大湯軽石質火山礫層上より、朝鮮半島の白頭山を起源とする苦小牧火山灰が確認されている。

第3節 歴史的環境

第2図は、物見坂遺跡と周辺の遺跡の分布図である。図から、米代川流域に形成された河岸段丘上に遺跡が多く分布していることがわかる。特に、花輪盆地東側に遺跡が集中していることがわかる。これは、東北縦貫自動車道建設に伴い調査された遺跡が多いことにもよるが、段丘地形が発達していることが主因と考えられる。

鹿角市では、縄文時代の遺跡数は50を超える。縄文時代草創期の遺跡として、中の崎遺跡から爪形土器が出土している。前期末葉の集落跡としては清水向遺跡があり、県内で最も早く縄文時代の住居跡が見つかった遺跡として知られる。この他にも数多くの縄文時代の遺跡が確認されているが、中でも代表的なものとして花輪市街地に程近い天戸森遺跡が知られている。前期から晩期にかけての遺物が出土し、中期中葉から末葉にかけての竪穴住居跡が140軒検出されており、この時期の遺跡としては、県内最大である。この他、早期～晩期に位置づけられる猿ヶ平遺跡、後期のものでは、「ストーンサークル」で知られる国特別史跡大湯環状列石があげられる。物見坂遺跡はこの大湯環状列石の所在する舌状台地(通称風張台地)より南西に約3kmの先端部に位置している。大湯環状列石は、広く周知されているとおり、配石を伴った遺構などが検出されており、祭祀的意味合いが強い遺跡と言える。昭和63年に調査された玉内遺跡からは配石墓や後期末から晩期前半の土坑墓、土器棺墓が検出されている。

弥生時代・続縄文時代については、単一の遺跡は発見されておらず、他の時代との複合遺跡として

確認されているだけである。出土する遺物は、主として小坂 X 式に比定される土器であるが、散発的でまとまった資料はない。物見坂 遺跡でも、小坂 X 式土器片が数点出土している。

この地方に顕著に見られる大湯浮石層は、十和田火山の噴火による火山灰で十和田 a 降下火山灰という広域火山灰名があるが、近年これとは異なる火山灰も検出されている。それは、朝鮮民主主義人民共和国と中華人民共和国との国境にある白頭山の噴火による降下火山灰である。太田谷地館跡の調査では、平安時代の竪穴住居跡の埋土下部から検出され、竪穴住居跡の営まれた時期を特定するにあたり、大きな役割を果たした。物見坂 遺跡でもほぼ全域から火山灰が検出された。科学分析により十和田 a 降下火山灰であると同定され、遺構の時代決定に大きな役割を果たした。平安時代に営まれた太田谷地館跡では、竪穴住居跡56軒、空掘3条、土坑89基等が検出され、平安時代末葉に位置づけられる「集落保塞的」館である。また、堪忍沢遺跡では、製鉄操業に関連する遺構13基、竪穴住居跡6軒等が確認され、10世紀中葉から末葉のものと考えられている。この他にも、竪穴住居跡が49軒検出された歌内遺跡、同じく33軒検出された妻の神 遺跡が代表的なものとして挙げられる。

中世の遺跡では、館跡の多いことが特徴である。それは鹿角四十二館あるいは鹿角四十八館などという呼び方に表されている。鹿角市史によれば、鹿角の館は郷村を単位とする一村一館の形態をとり、領主館的な権力の象徴というよりは、その郭内に集落を内包した日常生活的機能をもつとされる。高屋館跡や高瀬館跡、小枝指館跡も近世初頭に成立したと見られる『鹿角由来記』に記載されている四十二館に含まれている。この中で高瀬館跡や小枝指館跡などの発掘調査が行われており、船載陶磁や貨幣等が出土している。昭和33年東京大学が調査主体となり、その成果をまとめた『館址』では、その出土遺物等から、鹿角の中世館の大半は戦国、織豊期まで使用されていたとされている。このような歴史的風土の中で生まれ今に伝わる「だんぶり長者伝説」や「錦木塚伝説」、「芦名沢の観音様伝説」などの民話はたいへん興味深い。

引用・参考文献

- 鹿角市 『鹿角市史 第1巻』 1982(昭和57年)
- 鹿角市教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 鹿角市文化財調査資料39 1990(平成2年)
- 鹿角市教育委員会 『特別史跡 大湯環状列石』発掘調査報告書(15)』 鹿角市文化財調査資料62 1993(平成5年)
- 鹿角市教育委員会 『特別史跡 大湯環状列石』発掘調査報告書(17)』 鹿角市文化財調査資料68 2001(平成13年)
- 秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 太田谷地館跡 - 』
秋田県文化財調査報告書第172集 1988(昭和63年)
- 秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 用野目川向 遺跡 - 』
秋田県文化財調査報告書第182集 1989(平成元年)
- 秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 太田谷地館跡第2次調査 - 』
秋田県文化財調査報告書第183集 1989(平成元年)
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(鹿角版)』 2001(平成13年)



第2図 周辺遺跡地図

NO	番号	遺跡名	所在地	種別	備考
1	9 168	物見坂	鹿角市十和田錦木字物見坂5	遺物包含地	縄文土器(晩期)・土師器・石器
2	9 64	大坊館	鹿角市十和田毛馬内字大坊館	館跡	郭・空堀・土塁
3	9 65	母谷下館	鹿角市十和田毛馬内字母谷下	館跡	郭・空堀
4	9 66	門ノ沢A	鹿角市十和田瀬田石字門ノ沢12	配石遺構	配石遺構
5	9 72	瀬田石A	鹿角市十和田瀬田石字八幡平45 - 81	集落跡	竪穴住居跡・縄文土器(前期)
6	9 71	中野平	鹿角市十和田瀬田石字中野平8 - 1	遺物包含地	竪穴住居跡・縄文土器(前期)・石器
7	9 73	瀬田石B	鹿角市十和田瀬田石字上野平4	遺物包含地	土師器
8	9 75	当麻館	鹿角市十和田毛馬内字古館	館跡	掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・郭
9	9 76	坂ノ上	鹿角市十和田山根字坂ノ上3	遺物包含地	弥生土器
10	9 77	湯坂	鹿角市十和田毛馬内字湯坂39 - 1	遺物包含地	土師器
11	9 81	冷水	鹿角市十和田毛馬内字冷水24	遺物包含地	縄文土器・石器
12	9 86	寺の上	鹿角市十和田毛馬内字寺ノ上6	遺物包含地	縄文土器(後期)・弥生土器・石器
13	9 89	柏野	鹿角市十和田毛馬内字柏野12	遺物包含地	石製品
14	9 84	柏崎館	鹿角市十和田毛馬内字柏崎	館跡	郭・空堀・土坑・縄文土器(後~晩期)
15	9 39	土手ノ上	鹿角市十和田山根字土手ノ上55	遺物包含地	土師器
16	9 45	中ノ平	鹿角市十和田山根字中ノ平15	遺物包含地	土師器
17	9 90	大道	鹿角市十和田岡田字大道17	遺物包含地	縄文土器
18	9 91	竹林	鹿角市十和田岡田字竹林11 - 1	遺物包含地	縄文土器(後期)
19	9 92	蟹沢	鹿角市十和田岡田字蟹沢4	遺物包含地	縄文土器・弥生土器・土師器
20	9 93	松ノ下	鹿角市十和田大湯字松ノ下3	遺物包含地	縄文土器
21	9 94	関上	鹿角市十和田大湯字関上28 - 1	遺物包含地	土師器
22	9 96	上屋布	鹿角市十和田大湯字上屋布50	遺物包含地	縄文土器(中期)・石器
23	9 123	大湯環状列石	鹿角市十和田大湯字万座・野中堂	環状列石	配石遺構群・竪穴住居跡・掘立柱建物跡
24	9 154	野中平	鹿角市十和田錦木字野中平15	遺物包含地	土師器
25	9 157	申ヶ野	鹿角市十和田錦木字申ヶ野23 - 1	遺物包含地	縄文土器(後期)
26	9 162	下屋布	鹿角市十和田錦木字下屋布43	遺物包含地	土師器・須恵器
27	9 163	稻荷平	鹿角市十和田錦木字稻荷平145	遺物包含地	土師器
28	9 164	大畑	鹿角市十和田錦木字大畑1	遺物包含地	縄文土器・土師器
29	9 165	上ノ平	鹿角市十和田錦木字上ノ平19	遺物包含地	土師器・須恵器
30	9 166	物見坂	鹿角市十和田錦木字物見坂20	遺物包含地	土師器
31	9 167	物見坂	鹿角市十和田錦木字物見坂7	遺物包含地	縄文土器(晩期)・土師器・石器
32	9 169	物見坂	鹿角市十和田錦木字物見坂12 - 1	遺物包含地	土師器
33	9 170	物見坂	鹿角市十和田錦木字物見坂14 - 2	遺物包含地	弥生土器・土師器・須恵器
34	9 171	物見坂	鹿角市十和田錦木字物見坂1 - 2	遺物包含地	土師器
35	9 172	下夕野	鹿角市十和田錦木字下夕野21	遺物包含地	縄文土器(前期)・石器
36	9 173	室田	鹿角市十和田錦木字室田16 - 2	遺物包含地	
37	9 174	泉森	鹿角市十和田錦木字泉森4 - 2	遺物包含地	土師器・石器
38	9 179	鹿角沢	鹿角市花輪字鹿角沢53 - 2	遺物包含地	土師器・須恵器
39	9 183	笹花	鹿角市花輪字坂下夕30 - 2	遺物包含地	縄文土器
40	9 182	坂下夕	鹿角市花輪字坂下夕12 - 4	遺物包含地	竪穴住居跡
41	9 177	枯草坂	鹿角市十和田錦木字枯草坂5 - 2	古墳	土師器・勾玉・ガラス玉
42	9 184	鉄砲平	鹿角市花輪字鉄砲平14 - 8	遺物包含地	土師器・須恵器
43	9 145	丸館表	鹿角市十和田草木字丸館表131 - 1	遺物包含地	土師器
44	9 139	丸館	鹿角市十和田草木字丸館24 - 1	遺物包含地	土師器
45	9 143	丸館下	鹿角市十和田草木字丸館ノ下夕38 - 1	遺物包含地	縄文土器(前期)
46	9 227	一ツ森	鹿角市花輪字一ツ森10 - 1	遺物包含地	土師器
47	9 228	一ツ森館	鹿角市花輪字一ツ森	遺物包含地	空堀
48	9 229	土木	鹿角市花輪字土木7 - 2	遺物包含地	土師器
49	9 230	小坂野	鹿角市花輪字小坂野3 - 178	遺物包含地	縄文土器・土師器・須恵器
50	9 232	小枝指館	鹿角市花輪字平元古館	館跡	空堀・竪穴住居跡・土師器・青磁・鉄製品
51	9 233	鳥野	鹿角市花輪字鳥野83 - 1	集落跡	竪穴住居跡・竪穴状遺構・土師器
52	9 234	花輪四ツ谷	鹿角市花輪字四ツ谷28 - 1	遺物包含地	土師器・古銭
53	9 235	平元館	鹿角市花輪字源田平6 - 1	遺物包含地	縄文土器(後期)・土師器
54	9 236	源田平	鹿角市花輪字源田平22 - 1	遺物包含地	土師器
55	9 242	新斗米館	鹿角市花輪字新斗米	館跡	空堀・竪穴住居跡・土坑・土師器・陶磁器
56	9 244	小平館	鹿角市花輪字下毛館	館跡	空堀
57	9 246	八幡平	鹿角市花輪字八幡平37	遺物包含地	縄文土器・土師器・須恵器
58	9 248	大坊沢	鹿角市花輪字大坊沢28	遺物包含地	縄文土器
59	9 249	平元向平	鹿角市花輪字平元向平16 - 4	遺物包含地	土師器
60	9 250	高市向館	鹿角市花輪字高市向	館跡	竪穴住居跡・竪穴状遺構・土師器・須恵器
61	9 255	高市向	鹿角市花輪字高市向5 - 8	遺物包含地	縄文土器・土師器・須恵器
62	9 262	高沢	鹿角市花輪字高沢24 - 1	遺物包含地	縄文土器・土師器
63	9 261	高市館	鹿角市花輪字高沢	館跡	空堀・土師器
64	9 270	餅野	鹿角市花輪字赤根1 - 32	遺物包含地	弥生土器・土師器・須恵器
65	9 189	碁石館	鹿角市十和田末広字神田沢	館跡	郭・空堀
66	9 190	板橋	鹿角市十和田末広字板橋27 - 29	遺物包含地	竪穴住居跡
67	9 192	上ノ野	鹿角市十和田末広字上野2 - 7	遺物包含地	弥生土器・石器
68	9 200	戸羽ノ沢	鹿角市十和田末広字戸羽ノ沢63 - 7	遺物包含地	縄文土器
69	9 201	高屋	鹿角市花輪字伊坂1 - 15	遺物包含地	縄文土器・弥生土器・石器
70	9 202	三ツ権元	鹿角市花輪字三ツ権元43	遺物包含地	縄文土器・土師器・石器
71	9 204	中畑	鹿角市花輪字中畑9 - 2	遺物包含地	縄文土器
72	9 205	太田谷地館	鹿角市花輪字中畑	集落跡	竪穴住居跡・土坑・製鉄炉・空堀
73	9 206	高屋館	鹿角市花輪字館ノ沢	館跡	配石遺構・掘立柱建物跡・土坑
74	9 207	花輪茶臼館	鹿角市花輪字茶臼館	館跡	空堀・土塁・郭
75	9 208	女平	鹿角市花輪字女平55	遺物包含地	縄文土器(中期)・石器
76	9 210	前平	鹿角市花輪字前平43 - 2	遺物包含地	縄文土器

第1表 周辺遺跡一覧

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の概観

物見坂 遺跡は、火山性シラス台地を米代川の支流根市川、大湯川が削るように形成した舌状を呈する通称風張台地先端部に位置する。水はけの良い台地と近接する川の恵みを受けるなど、生活に欠かせない条件が重なった場所である。

調査の結果、縄文時代の遺構を24基検出した。その内訳は、土坑墓8基、土坑2基、陥し穴10基、フラスコ状土坑4基である。古代から中世にかけての遺構は、竪穴式住居跡2軒と5棟の掘立柱建物跡、柱列1条、溝跡1条、土坑1基、炭焼遺構が3基である。

調査区ごとにみると、東区からは陥し穴3基、土坑2基、フラスコ状土坑1基、溝跡1条が検出された。遺物は希薄であるが、縄文時代後期に属する土器片が出土した。

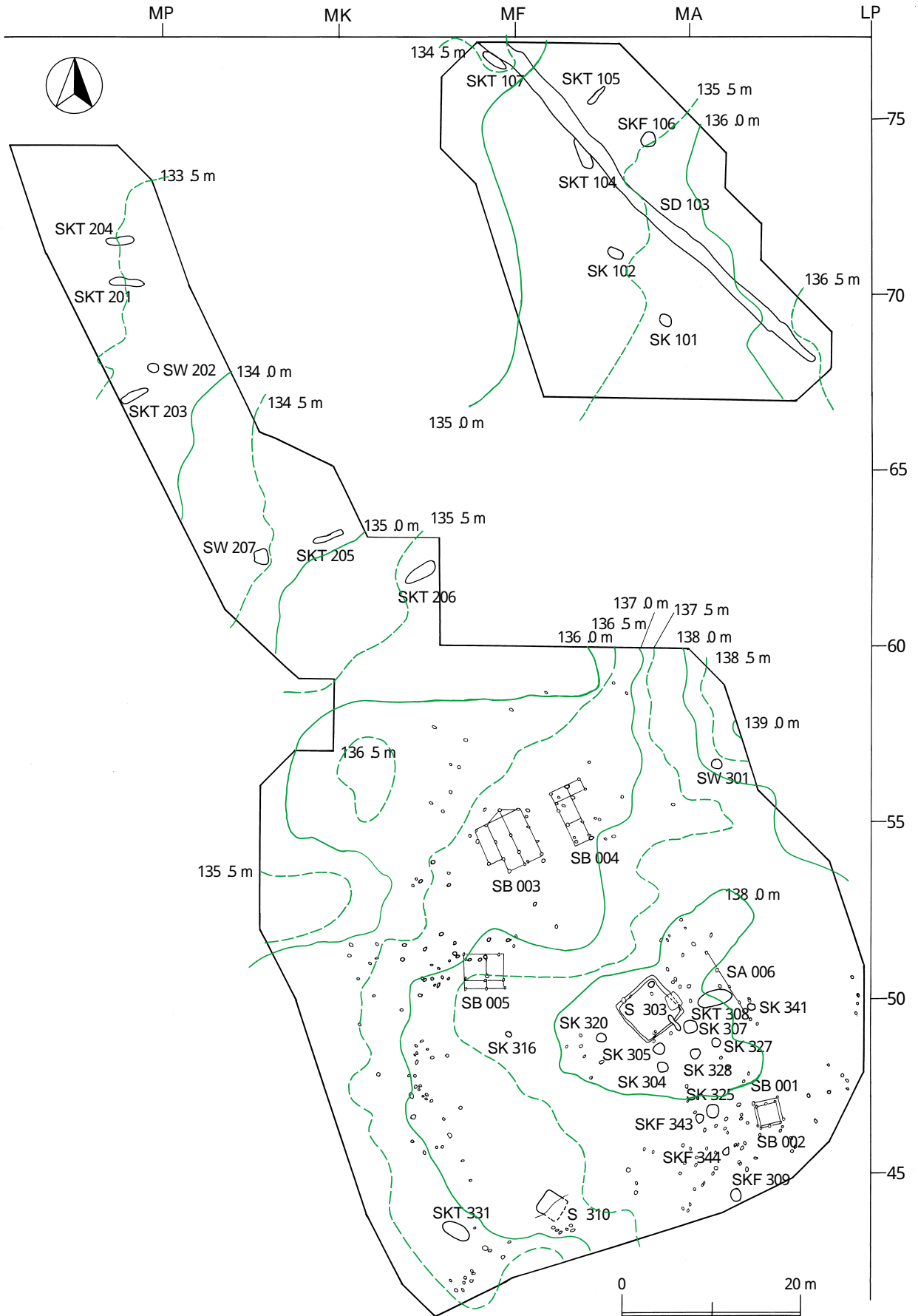
西区からは陥し穴を5基、炭焼遺構を2基検出した。陥し穴の形状とその配置を見ると、ほぼ同規模でありその配置は、等高線に沿って東西に長軸がくるようになっていた。炭焼遺構は科学分析の結果、10世紀に使用されたものであることが分かった。

南区からは土坑群が見つかった。遺物の鑑定結果やその状態から、縄文時代前期初頭の土坑墓であることが分かった。土坑群全8基の内、4基の底部からは溝が検出された。1本の溝であったり「二」の字や、「十」の字であったりとその目的は興味深い。また、南区からも陥し穴2基が見つかり、東区・西区同様、当時狩猟場として利用された場所であることが分かった。陥し穴の一つからは、堆積土の上層より縄文時代中期に属する土器片が発見された。古代の遺構としては、竪穴住居跡が2軒検出された。約2.7m×2.7mと小規模なもの1軒と5.6m×5.6mと平均的な竪穴住居跡であった。いずれも、堆積土には大湯浮石が混入していることから、AD915年以降の構築と判明した。

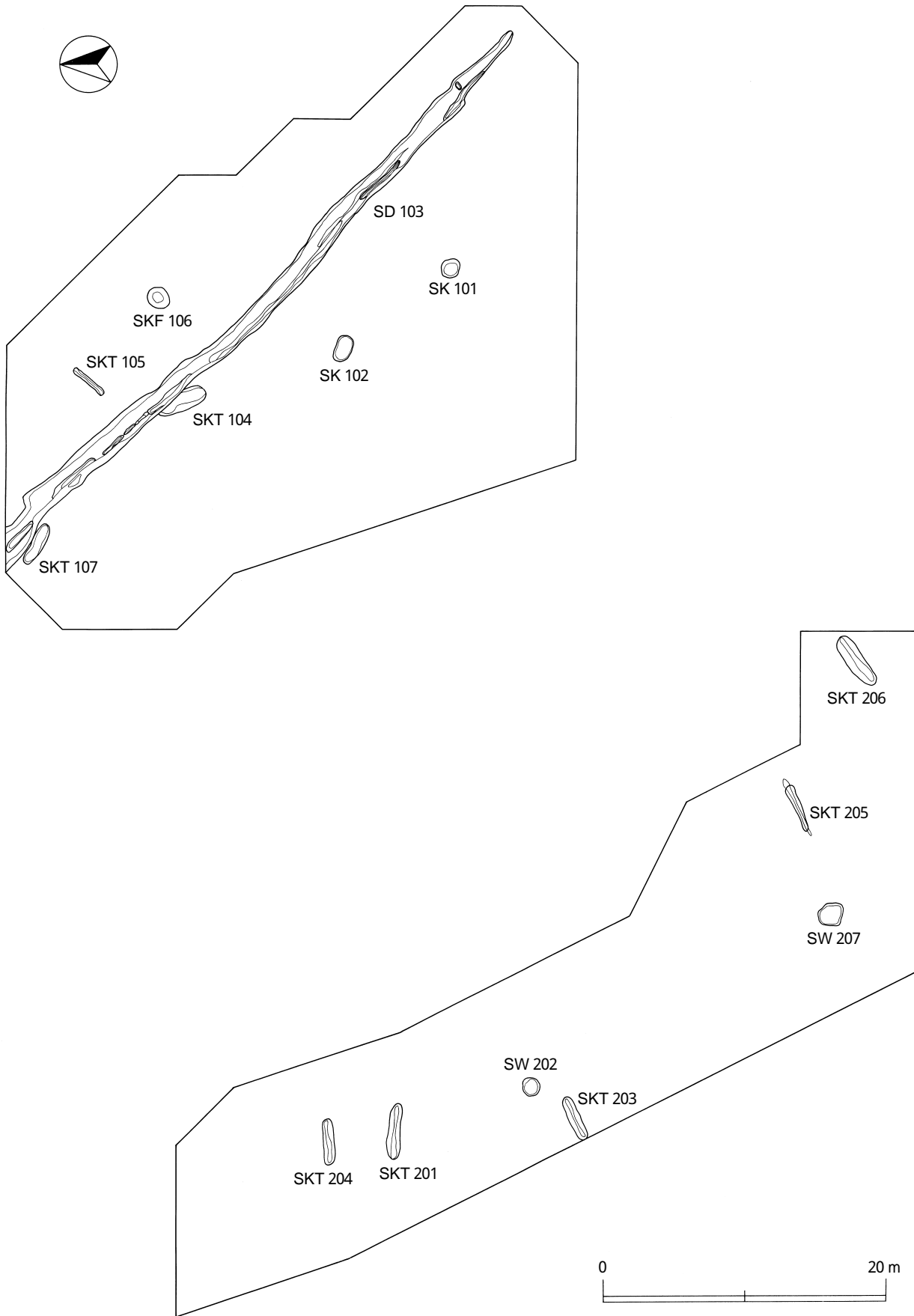
このようなことから、縄文時代前期初頭には眼下に広がる花輪盆地や周囲の山々が360度望めるこの場所を墓地として利用していたことが明らかになった。その後、この墓地が忘れ去られたころには、狩猟場として陥し穴が多数構築されたものと考えられる。長い時代を経て平安時代になると、竪穴住居が作られ、耕作や宅地造成のための整地が始まったものと考えられる。その後14世紀頃まで、人々がここで生活を営んでいたことが遺構・遺物の発見によって解明された。近世から現代にかけては、畑や果樹等の農地として活用されてきた。このように、周知の広がりを持つ物見坂 遺跡が同じような時代の変遷をたどってきたと想像できる。

第2節 基本層序

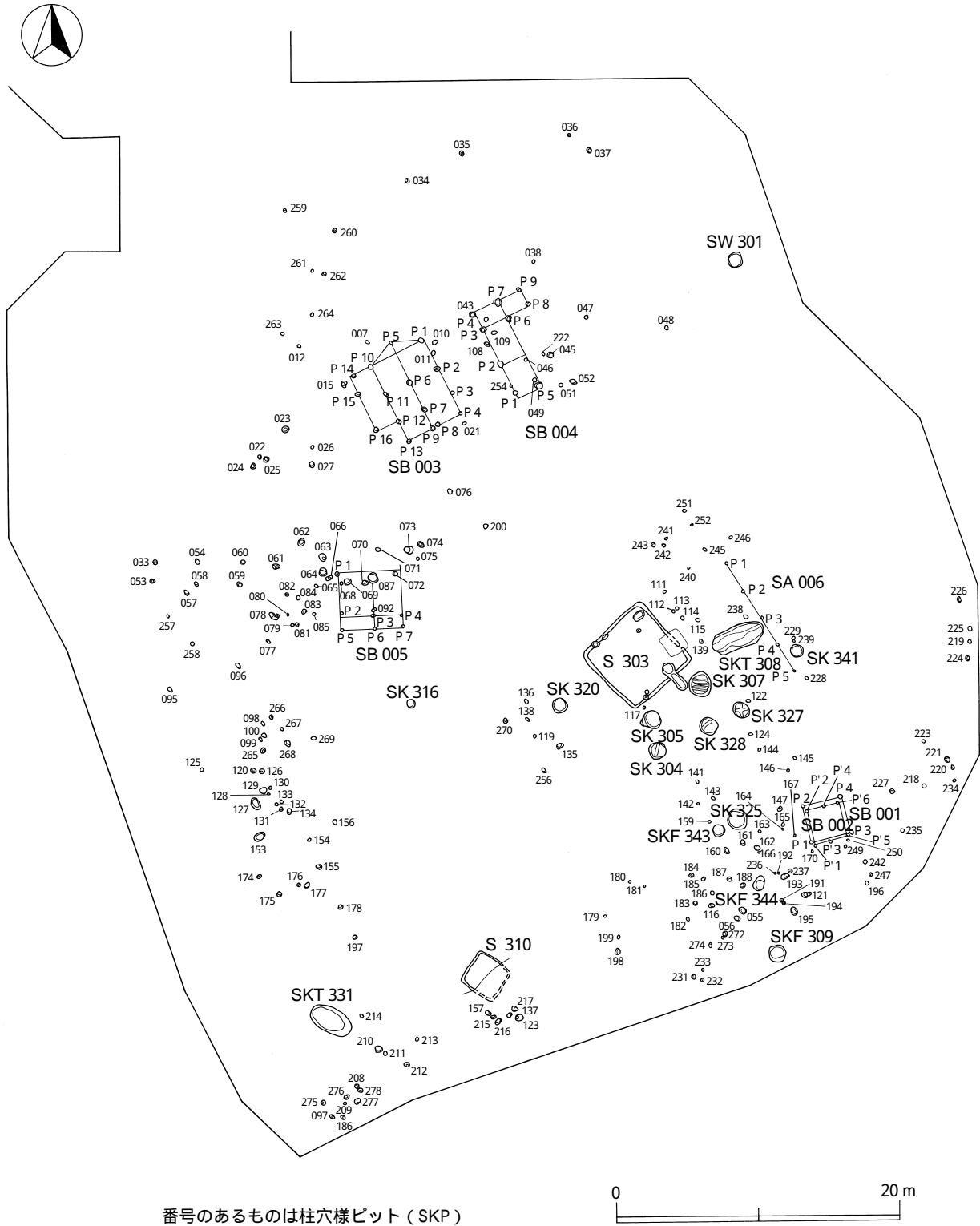
遺跡の基本層序は、比較的一定であるが、近年の土地改良等により、削平されたり盛土されていたため、堆積の仕方が多少異なっていた。調査区全域で十和田a火山灰が確認できるが、その堆積状況には斑がある。基本層位は、調査区ごとに東区、西区、南区それぞれ地形に沿ってセクションを設定し観察した。詳細は、第6図・第7図に示した通りである。



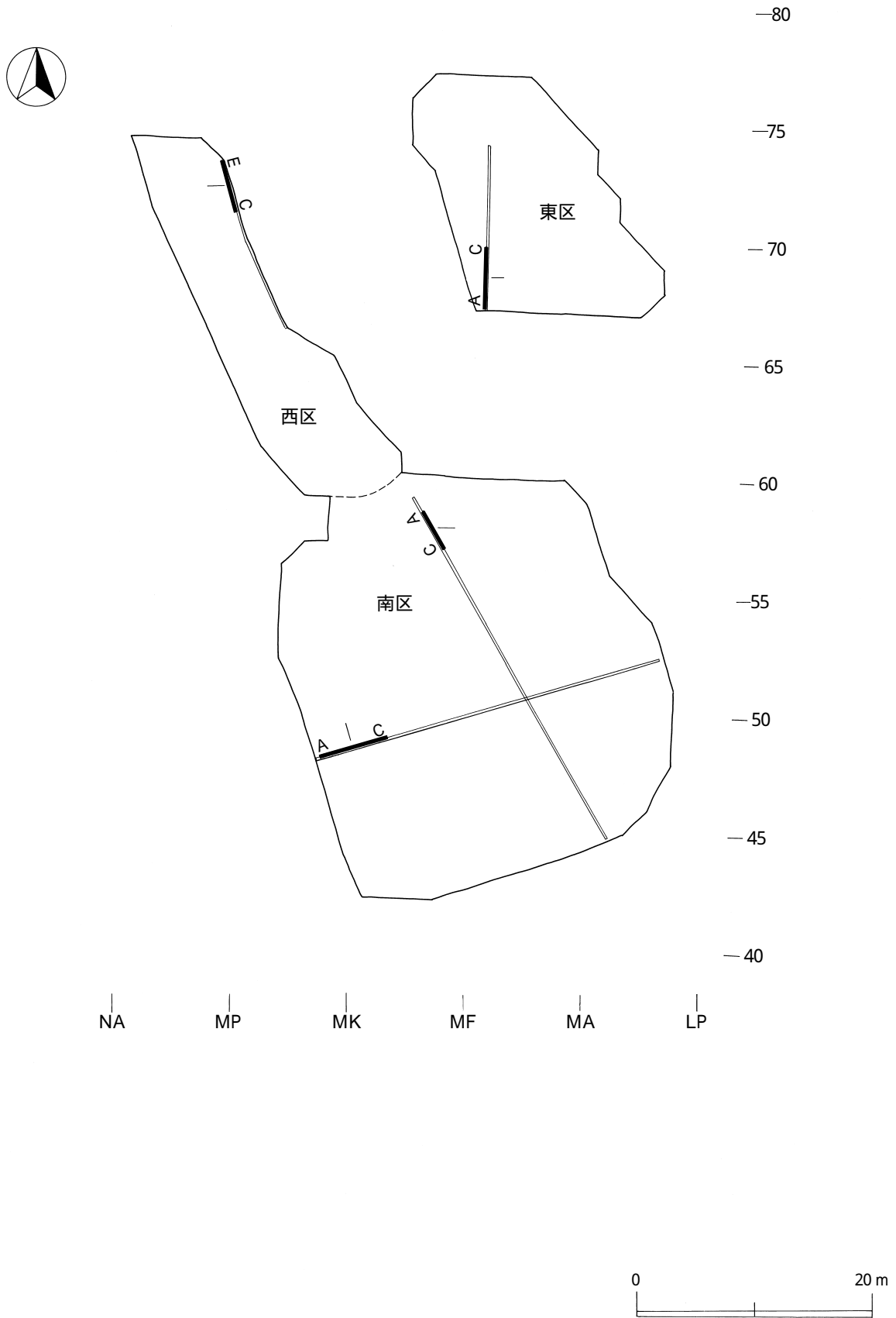
第3図 遺構配置図(略図)及び地形図



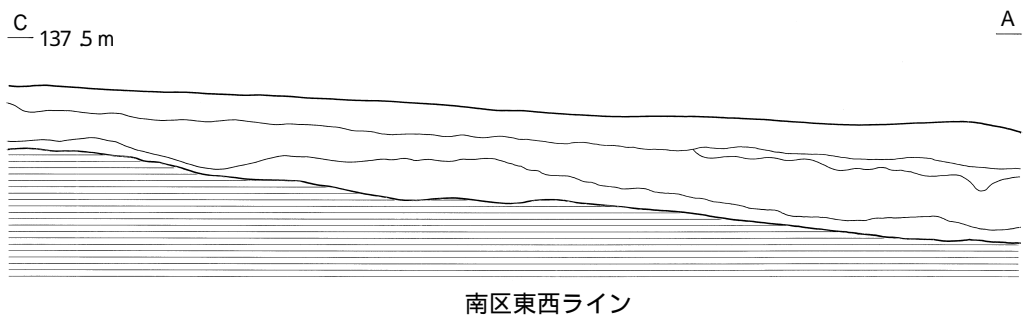
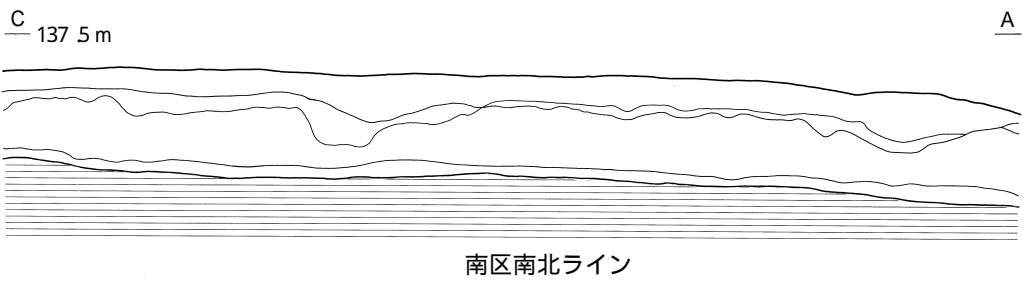
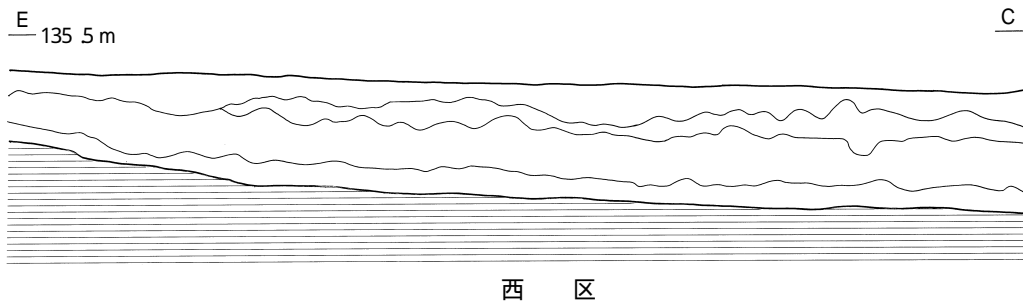
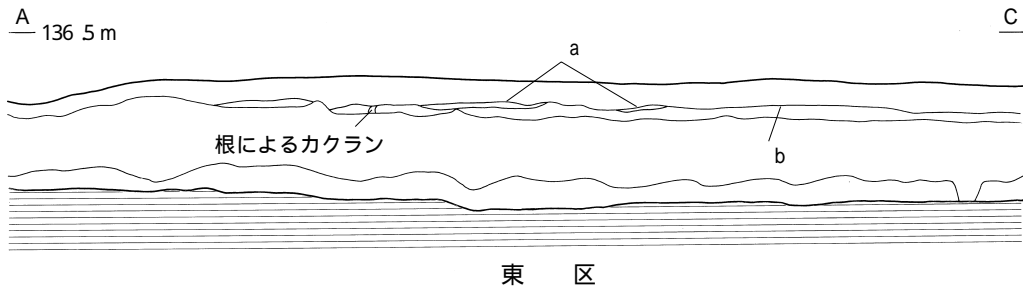
第4図 東区・西区遺構配置図(詳細)



第5図 南区遺構配置図 (詳細)



第6図 基本土層ベルト位置図



基本土層

- 黒褐色土 (10 YR 3/1) シルト質 大湯浮石粒微量 植物根多数
- 浅黄橙色土 (10 YR 8/4) 一部陶別作用により a 層と b 層に分層
- 大湯浮石堆積層
- 黒色土 (10 YR 2/1) シルト質 地山粒微量
- 暗褐色土 (10 YR 3/3) 粘土質 地山粒少量 地山漸移層
- 黄褐色土 (10 YR 5/6) 粘土質 地山



第7図 基本土層

第3節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の1点(国家座標系: X = 27578 5946 Y = - 4399 6776)を選定し、これを原点(MA 50)とした。この原点から座標北方向に基準線を設定し、この基準線に直交する4 m × 4 mのグリッドを設定した。また、数ヶ所の杭を水準測量して水準原点とした。グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す...LS・LT・MA・MB・MC...というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す...48・49・50・51・52...の2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4 m × 4 mの方眼杭の南東端をグリッドの名称とした。

調査区は、6,500m²を東区(1,600m²)・西区(1,000m²)・南区(3,900m²)と3つに分けて調査した。調査は概ね東区・西区・南区の順に行ったが南区に遺構が集中していた。さらに、十和田a降下火山灰を手がかりに火山灰をはさんで上層部がAD 915年以降、下層部がAD 915年以前と捉えた。第一段階として表土から十和田a降下火山灰までの掘り下げを行い、火山灰降下後構築された遺構の確認作業を行った。しかし、近現代の耕地整理や耕作を受けていて、その火山灰もまばらであり不明瞭であったことからその作業は難航し、遺構は確認できなかった。第二段階として十和田a火山灰降下以前の遺構検出のため地山面近くの漸移層までの掘り下げを行い、遺構を確認した。

遺構は確認した順に番号を割り当て、精査の結果、遺構でないと判断された場合はその番号を欠番扱いとした。遺構プランは埋土堆積状態観察・実測用ベルトを設定して掘り下げ、土層断面の分層時に野帳に堆積状態をスケッチして土色・土性等を記入した。

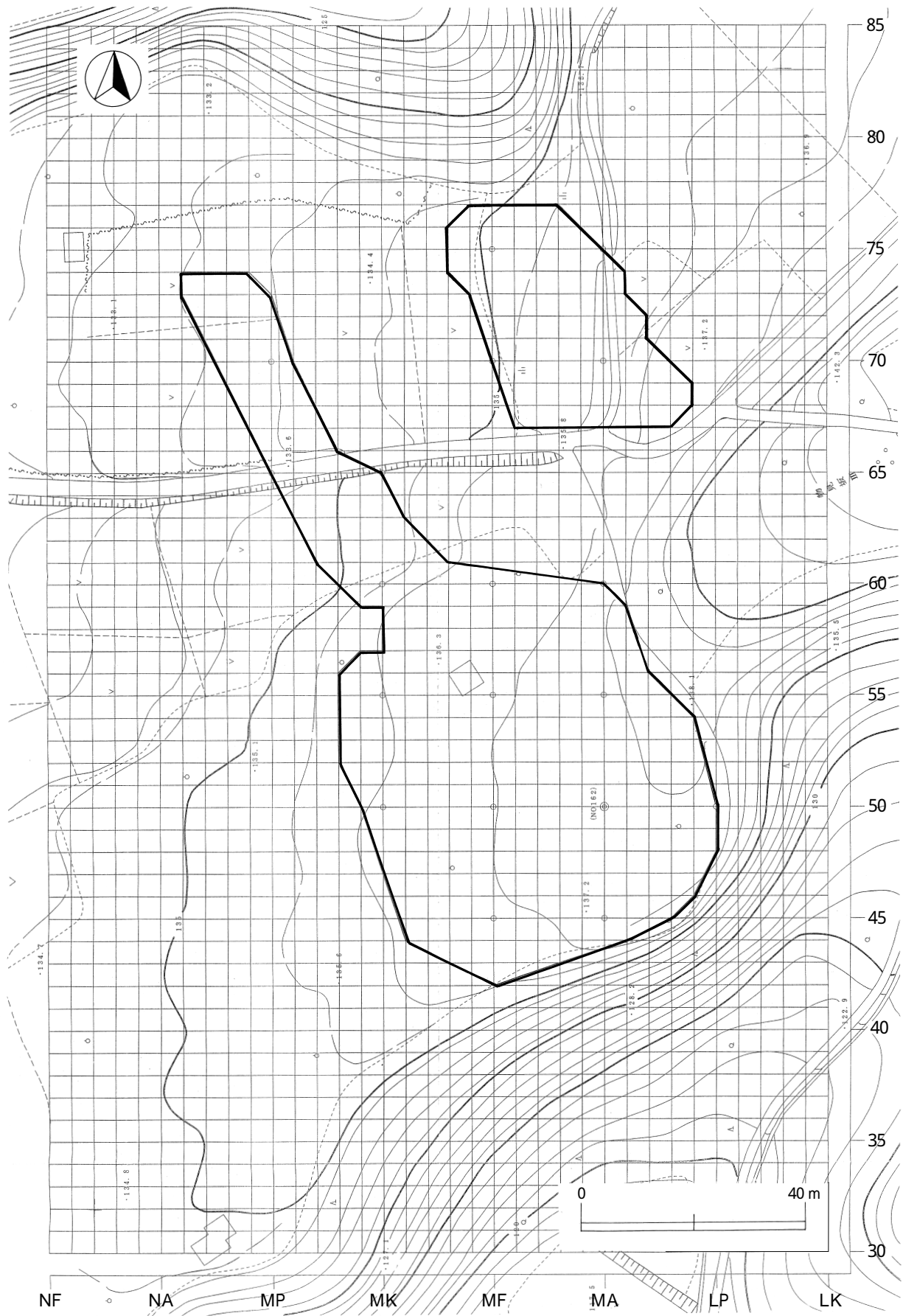
柱穴様の小ピットの多くについては、他の遺構とは別にピット番号を付し、精査の結果遺構ではないと判断した場合にはその番号を欠番扱いとした。径の小さな遺構・柱穴と小ピットについては、整理作業を進めながら一括して再検討した。

遺物は、グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺物の記載は、メジャーおよび自動レベルを使用して人手で行った。

調査の記録は、平面図・断面図および写真を用いた。平面図・断面図は縮尺1/20を原則としたが、微細な遺構図面を必要とする際には1/10で記録した。

写真撮影は35mmおよび×45mmのモノクロおよびリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理では、遺構は現場図面を検討して第2原図を作成し、トレースして挿図を作成した。遺物は洗浄・注記の後に接合および実測図の作成、写真撮影を行った。



第8図 グリッド配置図

第3章 調査の概要

第4節 発掘調査の経過

発掘調査は平成13年5月17日から10月26日まで（全24週）行われた。調査期間の主な内容は以下のとおりである。なお、安全衛生面に配慮し、週末には調査区内の点検・清掃を行った。

	調査期間	経過日数 (実質)	調査区			調査の概要	主な検出遺構	特記事項
			東区	西区	南区			
第1週	5/17～18	2(2)				発掘機材搬入・現場設営		
2	5/21～25	7(6.5)				表土除去作業・遺構プラン確認作業	溝跡1条 土坑4基	
3	5/28～6/1	12(11.5)				表土除去作業完了・遺構プラン確認作業・ヘルメットコンベアー設置	土坑3基 30日 佐々木久管理指導員、安全衛生指導のため来跡。	
4	6/4～8	17(16.5)				遺構プラン検出面でのジョレンがけ 基本土層断面写真撮影・実測	陥し穴3基 4日 グリッド打設開始 6日グリッド打設終了	
5	6/11～14	21(20.5)				基本土層断面実測	フラスコ状土坑1基	
6	6/18～22	26(23.5)				陥し穴・フラスコ状土坑精査		
7	6/25～29	31(28.5)				陥し穴・土坑等精査		
8	7/2～6	36(33.5)				西区地形測量完了・陥し穴等精査	陥し穴3基 3日 作業員集団健康診断実施	
9	7/9～13	41(38.5)				陥し穴等精査	陥し穴2基	
10	7/16～20	45(42.5)				南区遺構プラン確認作業に着手 東区溝跡の掘り込み面を確認 陥し穴等精査	柱穴様ビット多数	
11	7/23～27	50(47.5)				東区東端部地山面までの掘り下げ完了 陥し穴等精査	炭焼き遺構1基	
12	7/30～8/3	55(52.5)				SD 103断面精査 SW 207精査等	柱穴様ビット多数 2日 鹿角建設事務所内藤主査排土状況視察のため来跡	
13	8/6～10	60(56.5)				東区精査終了 西区 SKT 206精査 南区遺構プラン確認作業 陥し穴等精査	柱穴様ビット多数 10日 お盆休みを前に現場の安全対策・点検を行った。	
14	8/13～17	65(56.5)				お盆休み（現場作業停止）		
15	8/20～24	70(59.5)				南区遺構プラン確認作業	柱穴様ビット多数 22～23日台風接近に伴い現場作業を休止した。	
16	8/27～31	75(64)				西区精査終了 確認調査で検出済みの住居跡2基のうち1基精査	掘立柱建物跡1棟	
17	9/3～7	80(69)				十和田 a 降下火山灰直上での遺構プラン確認作業 検出済み住居跡2基目精査	土坑10基	
18	9/10～14	85(73)				土坑精査 住居跡精査	土坑3基 13日 鹿角市教育委員会生涯学習課秋元課長補佐並びに同市議会教育民生委員計15名視察のため来跡 14日 鹿角建設事務所内藤主査調査状況視察のため来跡	
19	9/17～20	89(77)				土坑精査 住居跡精査	土坑7基 掘立柱建物跡3棟	
20	9/25～28	93(81)				土坑精査 住居跡精査 掘立柱建物跡精査 フラスコ状土坑精査	土坑15基 フラスコ状土坑2基 25日 鹿角建設事務所内藤主査調査状況視察のため来跡	
21	10/1～5	98(85)				土坑精査 住居跡精査 掘立柱建物跡精査 フラスコ状土坑精査	フラスコ状土坑1基 4日 東北大学学生田中倫久氏火山灰サンプル採取のため来跡	
22	10/9～12	102(89)				土坑精査 住居跡精査 フラスコ状土坑精査	鈴木学芸主事（9～11日）、遠藤、田村非常勤職員（9～26日）応援として調査に参加。 10日 東北大学学生田中氏火山灰採取研究のため来跡	
23	10/15～19	107(94)				土坑精査 住居跡精査 フラスコ状土坑精査	16日 地元郷土史家柳沢允衛氏調査状況を見学のため来跡	
24	10/22～26	111(99)				空中写真撮影 地形測量 撤収作業	22日 現場引渡しに伴う現地立会い（鹿角建設事務所内藤主査・文化財保護室泉田学芸主事・南調査課柴田班長が参加） 25日 空中写真撮影 26日 埋蔵文化財センター芳賀所長、調査終了にあたって発掘作業員に対して慰労と謝意を表すため来跡。	

第2表 物見坂 遺跡調査工程

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と出土遺物

発掘調査では、部分的に粗密があるものの、ほぼ全域から縄文時代の遺構、南区からは古代の遺構が検出され、遺物が出土した。検出された遺構の種類と数は、土坑11基、陥し穴10基、フラスコ状土坑4基、竪穴住居跡2軒、簡易な炭焼き遺構3基、溝跡1条、掘立柱建物跡5棟、柱列1条、他200余りの柱穴様ピットである。遺物は、縄文時代早期の貝殻文土器、前期初頭の押し文尖底土器や同時期の石器類、中期の特徴を有する土器片、小坂式に相当する土器片、古代の土師器などが出土した。

1 縄文時代

縄文時代の遺構の検出は、土坑10基、陥し穴10基、フラスコ状土坑4基の計24基である。

(1) 土坑墓及び土坑(SK)

土坑は調査区南端部に集中して8基、東区では2基見つかった。

10基の土坑のうち、規模や形状、副葬品と考えられる遺物が出土したり、堆積土の分析などから明らかに墓と断定できる土坑が8基あった。これに対し、土坑の規模や堆積土の状況などから、墓とする根拠に極めて乏しいものが2基あった。このように規模、形状、出土遺物等を比較検討し前者を土坑墓とし、後者を土坑とした。

土坑墓

SK 304土坑墓(第9図、図版2)

〔位置と確認〕南区 MA 47・48グリッドの第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.10m、短径1.06m、深さは0.40mで円形である。

〔底面〕底面の径は1.00mである。土坑底部ほぼ中央に「一」の字に溝が1条ある。溝の幅は約0.15m、深さは土坑底面から約0.12mである。

〔堆積土〕上層部から下層部にかけて木の根が入り込み、特に上層部は本来の堆積状態を示しているか疑問な点もあるが、概ね人為堆積と考えられる。堆積層には濃淡はあるものの地山粒が混ざり、固くしまっている。

〔出土遺物〕確認面で半分に破断した(自然か人為的か不明)台石(第13図15)1点、確認面直下から底面にかけてすり石(第13図14)1点、剥片5点、底面で波状口縁深鉢形土器片(口縁部)(第11図1)1点が出土した。

〔時期〕出土遺物、堆積土から縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

SK 305土坑墓(第9図、図版2)

〔位置と確認〕南区 MA 48グリッド第 層で確認した。確認面では明確な重複関係は見られなかったが、土層断面の観察から重複が考えられる。

〔規模と形態〕長径1.43m、短径1.25m、深さ0.54mの不整楕円形である。

〔底面〕長径1.15m、短径0.90mでほぼ平坦である。

〔堆積土〕確認面では、明確な重複関係が見られなかったが、土層断面の観察から重複が考えられる。地山粒大小、濃淡等から4層に分層し、遺物の混入状態等から人為堆積と判断した。第1層は木の根による攪乱を若干受け、ややもろい。第2層以下は固くしまっている。

第1層は攪乱のためか、ややもろい。第2層以下は固くしまっている。

〔出土遺物〕確認面から底面近くにかけて、押し引き沈線紋が施された波状口縁深鉢形土器片(第11図2～4)5点と剥片19点がまとまりなく出土した。また、地山面から3～5cm上から、半分に破断した(自然か人為的か不明)台石1点が置かれたかのように出土した。さらに、底面近くからは礫数点も出土している。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

SK 307土坑墓(第9図、図版2)

〔位置と確認〕南区 LT 49グリッドの第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.62m、短径1.56m、深さ0.52mでほぼ円形である。

〔底面〕長径1.43m、短径1.25mで、SK 304土坑墓に類似し底面には壁面に向かって平行する2本の溝が掘られている。2本とも同規模であり、幅は約0.25m、深さ約0.14mであった。

〔堆積土〕土層断面中位には、左右の壁面から中心部に紐状に伸びる地山粒を全く含まない黒色土がある。比較的固くしまっておりその起因は、わからなかった。

〔出土遺物〕円筒下層式土器片(第11図5)と波状口縁深鉢形土器片(第11図6・7)6点と半分に破断した(自然か人為的か不明)台石1点、スクレイパー(第12図11・12)2点、剥片7点が確認面直下からやや中央にかけてまばらに出土した。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

SK 320土坑墓(第10図、図版2)

〔位置と確認〕南区 ME・MF 48・49グリッドの第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径0.99m、短径0.96mでほぼ円形、深さは0.45mであった。

〔底面〕長径0.90m短径0.85mで緩やかな傾斜があり、平面図には現わしていないが、底面西壁際約4分の1に溝らしい痕跡があった。

〔堆積土〕全体に地山粒が混入しており、埋め戻しによる人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕剥片1点、多数の礫の出土があった。

〔時期〕他の土坑墓に比べ規模がやや小さく、出土遺物も近隣の土坑墓とは様相が違うが、堆積土及び他の土坑墓との位置関係から、概ね縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

SK 325土坑墓(第10図、図版2)

〔位置と確認〕南区 LT 46・47第 層で確認した。中から礫と土器片が出土した。

〔規模と形態〕長径1.40m短径1.31mのほぼ円形であり、深さは0.37mであった。

〔底面〕底径は1.17mの円形であった。底面は緩やかなボール状になっていた。

〔堆積土〕地山粒の混入度から4層に分層した。地山粒の濃淡はあるが概ね人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕円筒下層式に属する撚糸文の施された土器片1点、同じく不整撚糸文の施された土器片

1点、押引き沈線文の施された土器片1点、すり石(第12図13)1点、他土器小破片2点、剥片1点が、確認面直下からまばらに出土した。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

SK 327土坑墓(第9図、巻頭図版、図版1・2)

〔位置と確認〕南区 LT 48第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.18m、短径1.04mでほぼ円形であり、深さは0.45mであった。

〔底面〕やや凹凸があり、底径は1.02mの円形であった。底面に幅約0.20m・深さは約0.10mの十字状の溝が掘られていた。

〔堆積土〕黒色土の中に地山粒がほぼ全体に含まれる。埋め戻しによる人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土坑底部のほぼ真ん中、最も底面に近いところから尖底土器底部(第11図9)、その直上には波状口縁深鉢形土器(口縁から胴部)(第11図8)、その上には台石1つ(完形でベンガラが付着したもの)(第13図16)が折り重なるように出土した。また、確認面直下でも台石1つ(一部破損したもの)が出土した。

〔時期〕土坑の形態、出土遺物から縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

SK 328土坑墓(第10図、図版2)

〔位置と確認〕南区 LT 48グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.20m、短径1.18m、深さは0.48mで円形である。

〔底面〕長径1.15m、短径1.00mのほぼ円形で、底面には幅約0.13m、深さは約0.16m不整な弧状の溝が掘られていた。

〔堆積土〕2層に分層したが、第1層は木の根による攪乱の可能性がある。地山ブロックの混入状態などから埋め戻しによる人為堆積と判断した。

〔出土遺物〕剥片1点が出土した。

〔時期〕底部の溝がSK 304土坑に類似していることや、形状、他の土坑墓との位置関係などから縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

SK 341土坑墓(第10図)

〔位置と確認〕南区 LS 41グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径0.97m、短径0.85m、深さは0.30mで円形であった。

〔底面〕長径0.87m、短径0.80mであり、凹凸はほとんどなく平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックの混入割合が他の土坑(墓)に比べるとやや多い。埋め戻しによる人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は剥片が2点出土した。

〔時期〕剥片の出土や確認位置、堆積土の状況から、縄文時代前期初頭に属する土坑墓と判断した。

土 坑

SK 101土坑(第10図)

〔位置と確認〕東区 MA 69グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.30、短径1.28、深さは0.14mで円形である。

〔底面〕長径1.03m、短径0.86mの楕円形であった。掘り込み面および壁面が明確でないため、自然な窪地にも見えるが、その性格ははっきりしない。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕第 層で確認したが、時期は不明である。

SK 102土坑(第10図)

〔位置と確認〕東区 MB・MA 70・71グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.90m、短径1.15m、深さは0.24mで楕円形であった。

〔底面〕長径1.71m、短径1.00mの楕円形になっており、やや丸みを帯びた窪地状である。

〔堆積土〕緩やかな壁面であり、自然にできた窪地とも捉えることができるが、少なくとも堆積土には地山粒が混入していることから、人為堆積と判断した。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕第 層で確認したが、時期は不明である。

(2) 陥し穴(SKT)

陥し穴は、調査区全域から見つかった。確認面での形状はほとんどが溝状であるが、開口部の大きいものは楕円形に近いものもあった。東区で3基、西区で5基、南区で2基、計10基である。ほとんどの長軸が等高線に平行し、西区の陥し穴全5基はほぼ長軸が東西方向になるように配置されている。

SKT 104(第28図)

〔位置と確認〕東区 MC・MD 73・74グリッド第 層で確認した。開口部はSD 103によって切られている。

〔規模と形態〕開口部は切り合いが認められるため正確な数値を示すことはできないが、長さ約3.63m、幅1.37mの長楕円形で深さは1.56mである。長軸方向両壁面は袋状になっている。中端での最大幅は4.40mであった。

〔底面〕長さは3.52m、幅0.78mあり、底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕本遺構壁面の地山崩落土(腐植土に崩落土混入など)を含む自然堆積である。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕同規模であるSKT 308と同時期の構築とすれば縄文時代前期中頃から中期と考えられるが、時期は明確ではない。

SKT 105(第14図)

〔位置と確認〕東区 MC 75グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ2.70m、幅0.33m、深さ0.80mで溝形である。壁面は中位で狭まり、開口部に向かって少し広がる。

〔底面〕長さ2.64m、幅0.23mで、開口部とほぼ同規模である。底面は比較的平坦である。

〔堆積土〕土層の観察から、徐々に堆積した状況が読み取れることから自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕石器剥片1点が出土した。

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKT 107(第14図)

〔位置と確認〕東区 MF 76グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ3.12m、幅0.90m、深さ1.06mである。壁は、底部から開口部に向かって開くように立ち上がる。

〔底面〕長さ2.90m、幅0.54mである。ほとんどの陥し穴が底部に近いほど先細りしていく中で、本遺構は構築半ばで放棄したように平坦である。

〔堆積土〕壁面の地山の崩落により構成された堆積層が多いことから、自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕底部に近い場所ほど大小礫の出土も多く、人為的に投げ込まれたか自然にあったかはつきりしない。

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKT 201(第14図)

〔位置と確認〕西区 MF 76グリッド 第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ3.88m、幅0.80m、深さは1.76mである。壁は底部から開口部に向かってV字状に開くように立ち上がる。長軸西側方向壁際は袋状である。

〔底面〕長さ2.67m、幅2.00mである。底部はやや丸みを帯びていた。

〔堆積土〕地山ブロックの混入率が高く、壁面より崩落したものと思われる。自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKT 203(第15図)

〔位置と確認〕西区 MP 66・67グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ3.28m、幅0.83m、深さ1.50mである。壁は底部から開口部に向かってV字状に立ち上がる。

〔底面〕長さ2.94m、幅0.18mで、先細りしている。

〔堆積土〕地山ブロックの混入率が高く、壁面より崩落したと考えられる。概ね自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕形状と類例から縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKT 204(第15図)

〔位置と確認〕西区 MP・MQ 71グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ3.22m、幅0.73m、深さ1.54mである。壁は底部から開口部に向かってV字状に開くように立ち上がる。長軸西側方向壁際は袋状である。

〔底面〕長さ2.94m、幅0.23mで比較的平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックの混入率が高く、壁面より崩落したものと考えられる。自然堆積と判断する。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKT 205(第15図)

〔位置と確認〕西区 MJ・MK 62・63グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ3.35m、幅0.53mの溝形であり、深さは1.14mである。壁は底部から開口部に向

かってV字状に立ち上がる。長軸両端壁際は袋状である。

〔底面〕長さ4.49m、幅0.17mで、開口部より底部が長い。

〔堆積土〕地山ブロックの混入率が高く、壁面より崩落したものと考えられる。自然堆積と判断する。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKT 206(第16図)

〔位置と確認〕西区MH・MI61・62グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ4.10m、幅1.24m、深さ1.74mである。壁は底部から開口部に向かってV字状に開くように立ち上がる。長軸両端壁際は袋状である。中程の長径は4.98mあった。

〔底面〕長さ1.03m、幅0.45mであり、短軸方向南側にやや傾斜している。

〔堆積土〕堆積状況から自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕石器剥片1点が出土した。

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKT 308(第16図、図版3)

〔位置と確認〕南区LS・LT49・50グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ3.80m、幅1.50m、深さ1.90m不整楕円形である。壁は底部から開口部に向かって緩いU字状に近い形で開くように立ち上がる。底部にはもう一段溝が掘り込まれているようにも見える。長軸両端壁際は袋状である。

〔底面〕長さ3.85、幅0.20mである。壁面から底部にかけては不整形であるが、概ね丸みを帯びた溝状である。

〔堆積土〕4層に分層したが、自然堆積と判断した。第2層の褐色土は熱を受けた焼土であり、流れ込みと考えられる。この焼土中のAMS¹⁴C年代測定の結果は、BC3375~3335(縄文時代前期中頃)という結果である。

〔出土遺物〕第1層目から、縄文時代中期に属する土器片(第17図17~22)15点、二次加工のある剥片1点、剥片11点、スクレイパー(第17図23)1点、すり石1点の出土があった。

〔時期〕焼土の年代測定や出土した土器などから、縄文時代前期中頃から中期となるが、遺物の出土位置や焼土の堆積状況からそれ以前の構築と考えられる。

SKT 331(第17図、図版3)

〔位置と確認〕MG43グリッド調査区の南端部、第 層で確認した。

〔規模と形態〕長さ3.16m、幅1.72mの楕円形で、深さは2.12mである。長軸両端壁際は袋状であり、北西部の壁は開口部より0.20m~0.30m内側に入り込んでいる。

〔底面〕長さ2.50m、幅1.32m開口部を小さくしたような楕円形で、北西側から南東側にやや傾斜している。

〔堆積土〕壁面の崩壊によって堆積したと考えられる黄褐色土などが自然堆積している。

〔出土遺物〕石器剥片1点が出土した。

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

(3) フラスコ状土坑(SKF)

フラスコ状土坑は、東調査区の台地北側の縁に近い所で1基、南調査区の台地南側の縁に近いところで3基、計4基を確認した。SKF 344を除いて、遺構内から時期を特定できるような遺物は出土していないが、形態などから、いずれも縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。

SKF 106(第18図)

〔位置と確認〕東区 MA・MB 74グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕開口部長径0.88m、開口部短径0.60mで、平面形状は楕円形に近く、深さは0.74mである。

〔底面〕長径1.68m、短径1.50mのほぼ円形で、平坦である。

〔堆積土〕地山粒の混入が各層で見られ、埋め戻しによる人為堆積と判断した。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKF 309(第18図、図版3)

〔位置と確認〕南区 LT 44グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.25m、短径1.18mのほぼ円形で、深さは1.59mである。

〔底面〕長径1.68m、短径1.64mのほぼ円形で、凹凸はほとんどなく平坦であった。

〔堆積土〕壁面の崩落や草木の腐植土が交互に堆積した自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕縄文土器片(第17図24~27)4点と石器剥片6点が出土した。

〔時期〕出土した土器から、縄文時代後期に属するものと判断した。

SKF 343(第18図)

〔位置と確認〕南区 LS 45グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕開口部長径0.88m、開口部短径0.80mの円形で、深さは0.78mである。

〔底面〕長径1.05m、短径1.00mの円形で平坦であった。

〔堆積土〕地山粒の混入が各層で見られ、埋め戻しによる人為堆積と判断した。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕形状と類例から、縄文時代に帰属するものと考えられる。

SKF 344(第18図、図版3)

〔位置と確認〕南区 LS・LT 45グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕開口部長径1.04m、開口部短径0.74m、深さ1.26mである。本来、円形であったものが後世の耕作等により開口部の一部(北側)が攪乱を受け不整楕円形になったものと考えられる。

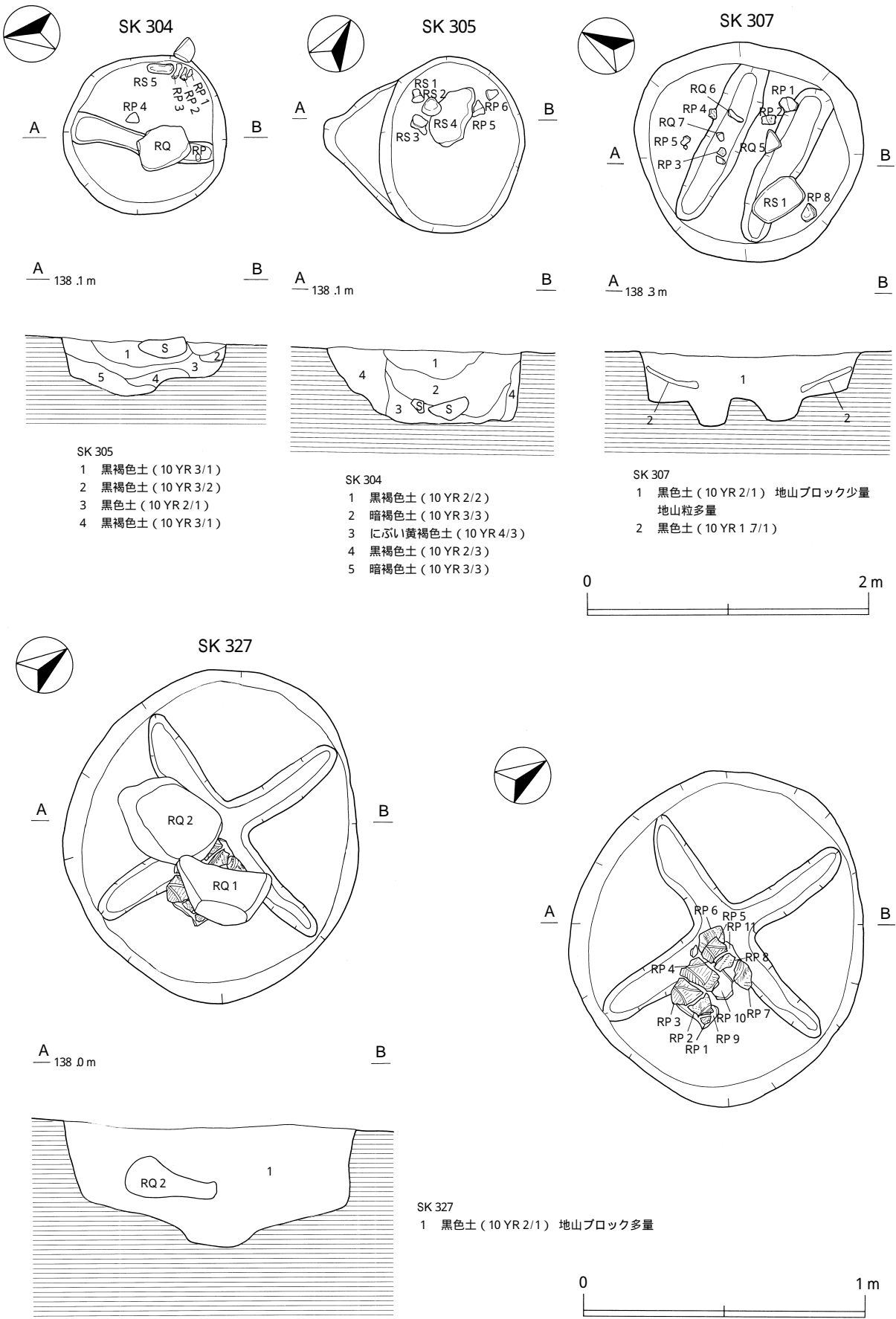
〔底面〕長径2.01m、短径1.75mでやや不整形な楕円形である。

〔堆積土〕人為的に大量の地山を埋め戻したようである。

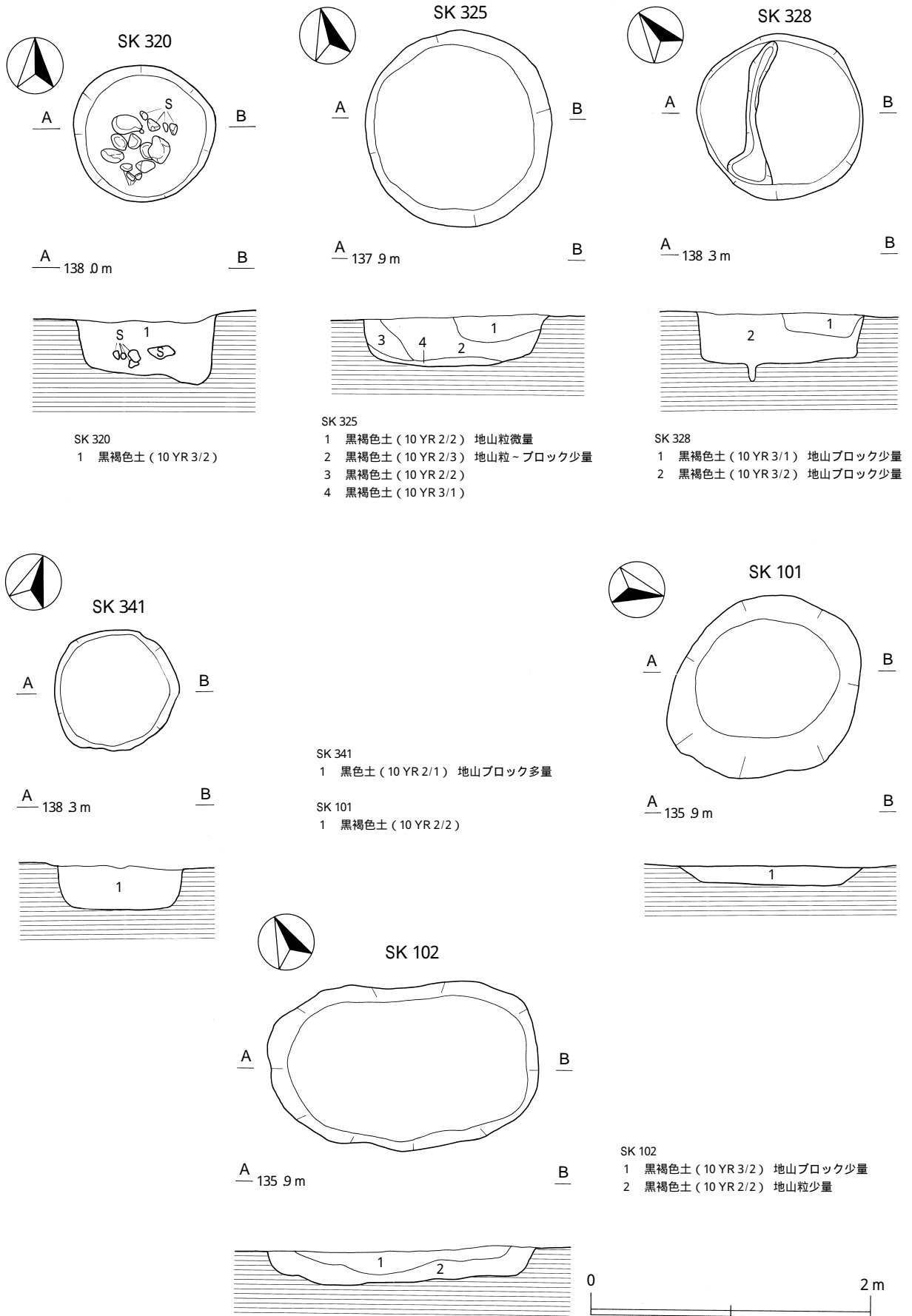
〔出土遺物〕底面に最も近い4層目から縄文土器片(第19図28)2点の出土があった。他に剥片2点が出土した。

〔時期〕出土した土器と土壌分析の結果から、縄文時代後期に属するものと判断した。

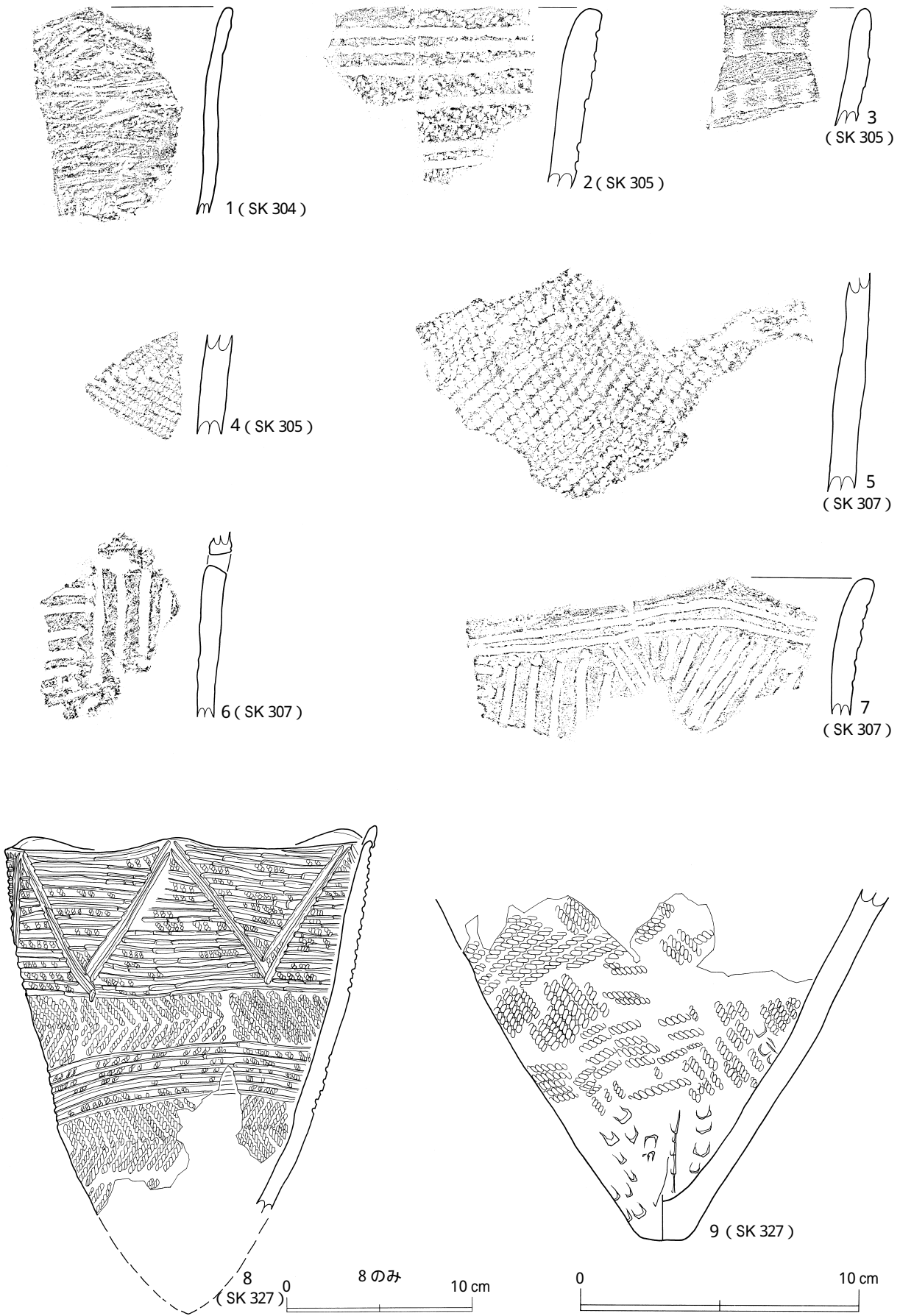
第4章 調査の記録



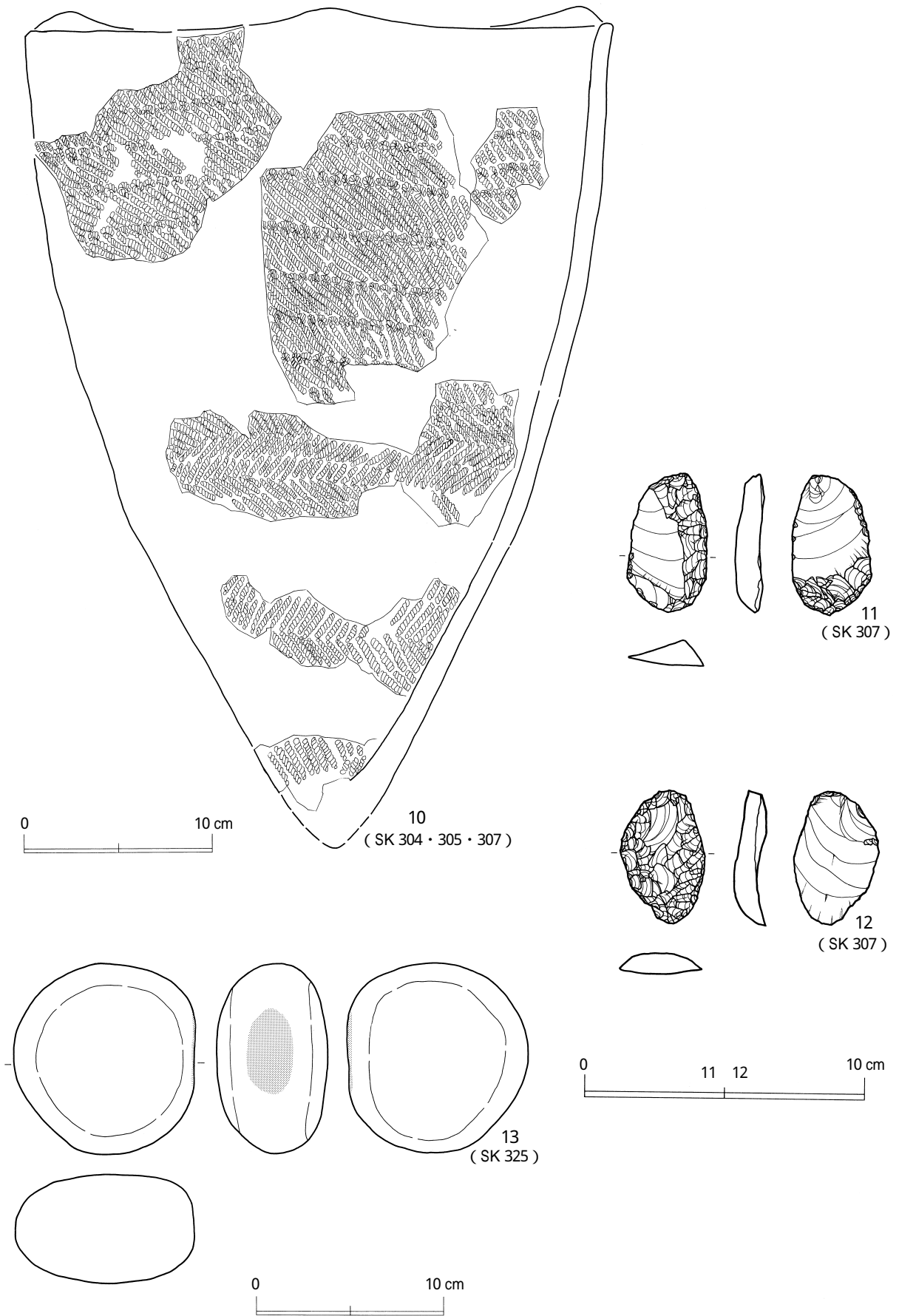
第9図 検出遺構 SK 304 SK 305 SK 307 SK 327



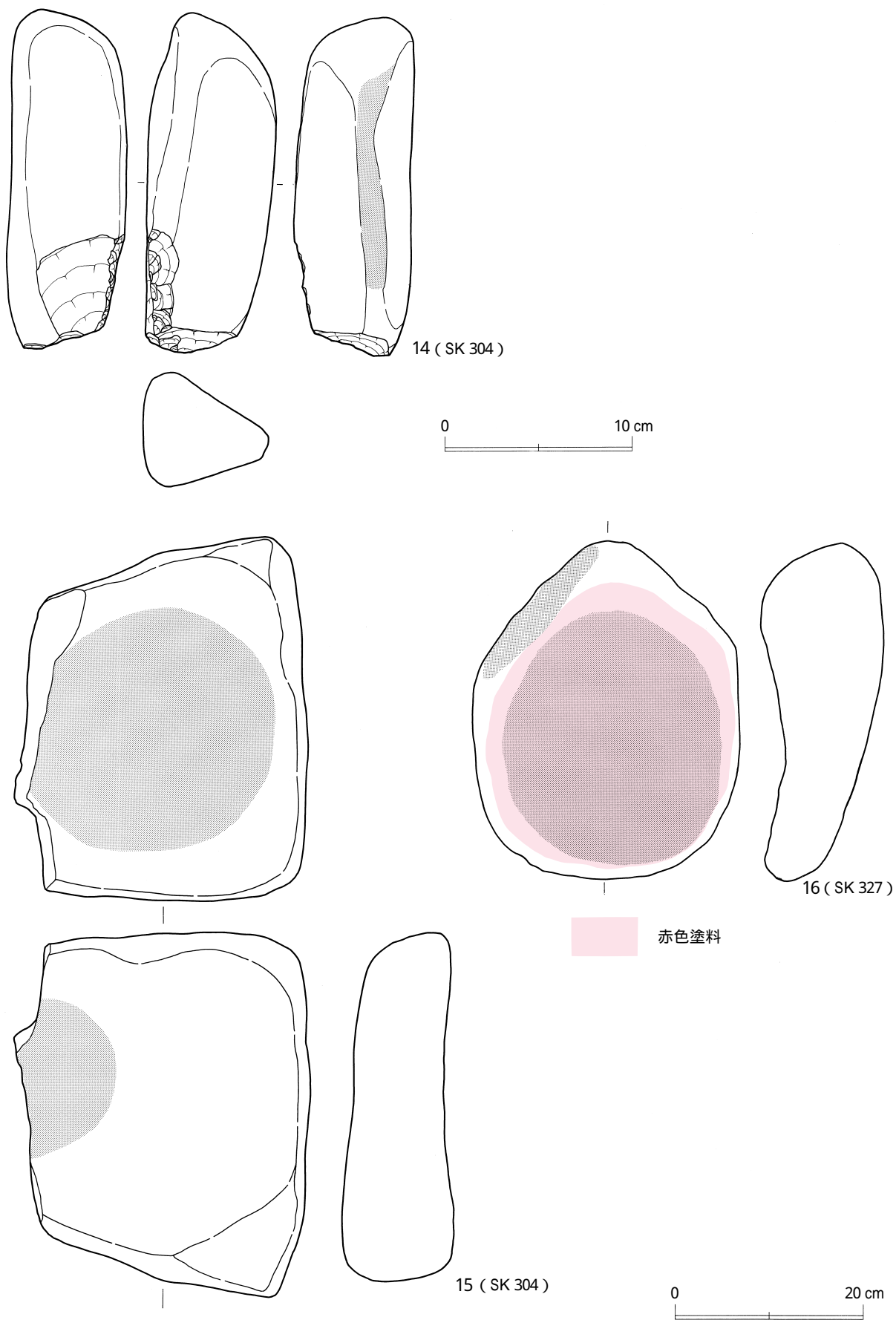
第10図 検出遺構 SK 320 SK 325 SK 328 SK 341 SK 101 SK 102



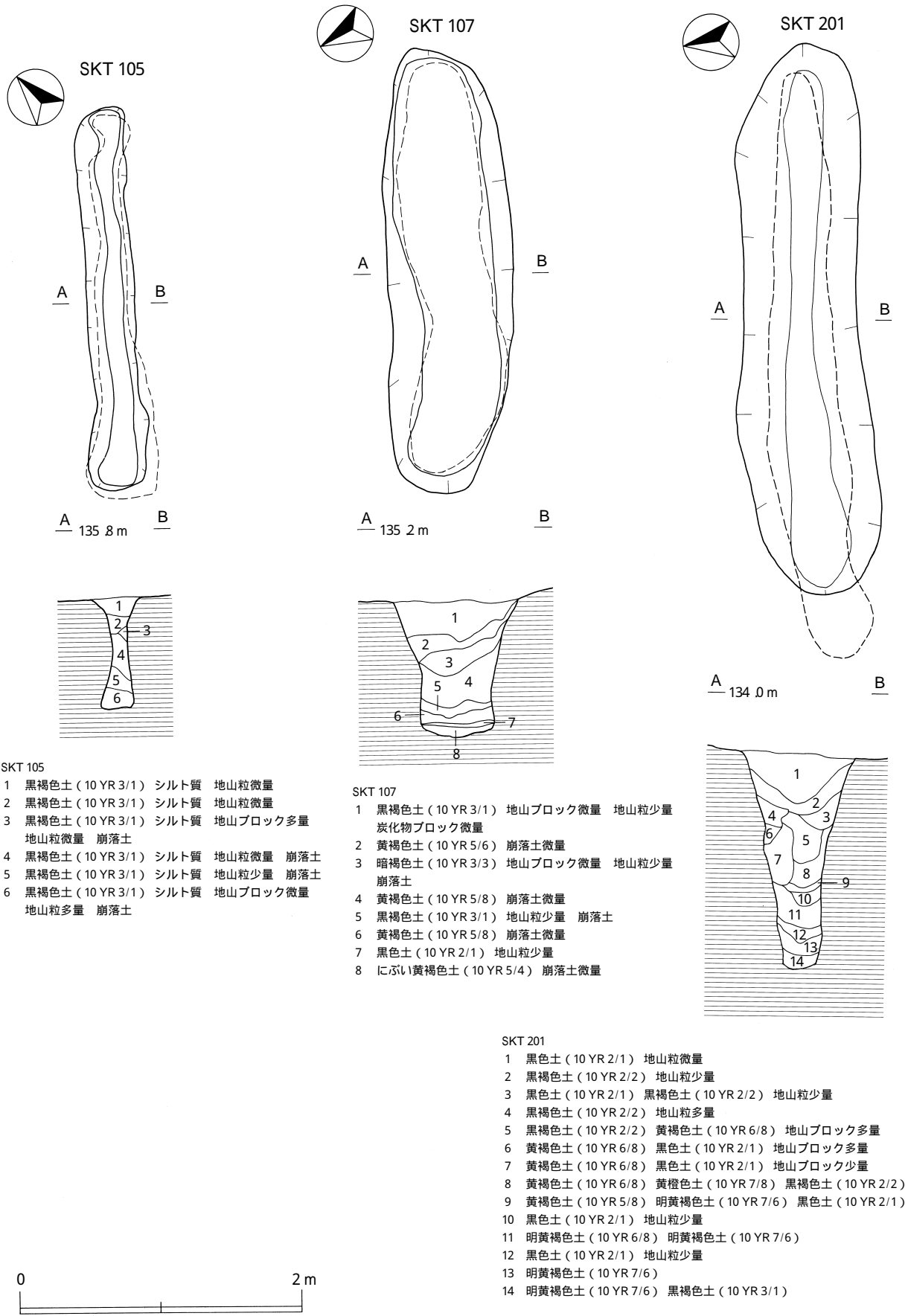
第11図 遺構内出土土器(1~9)



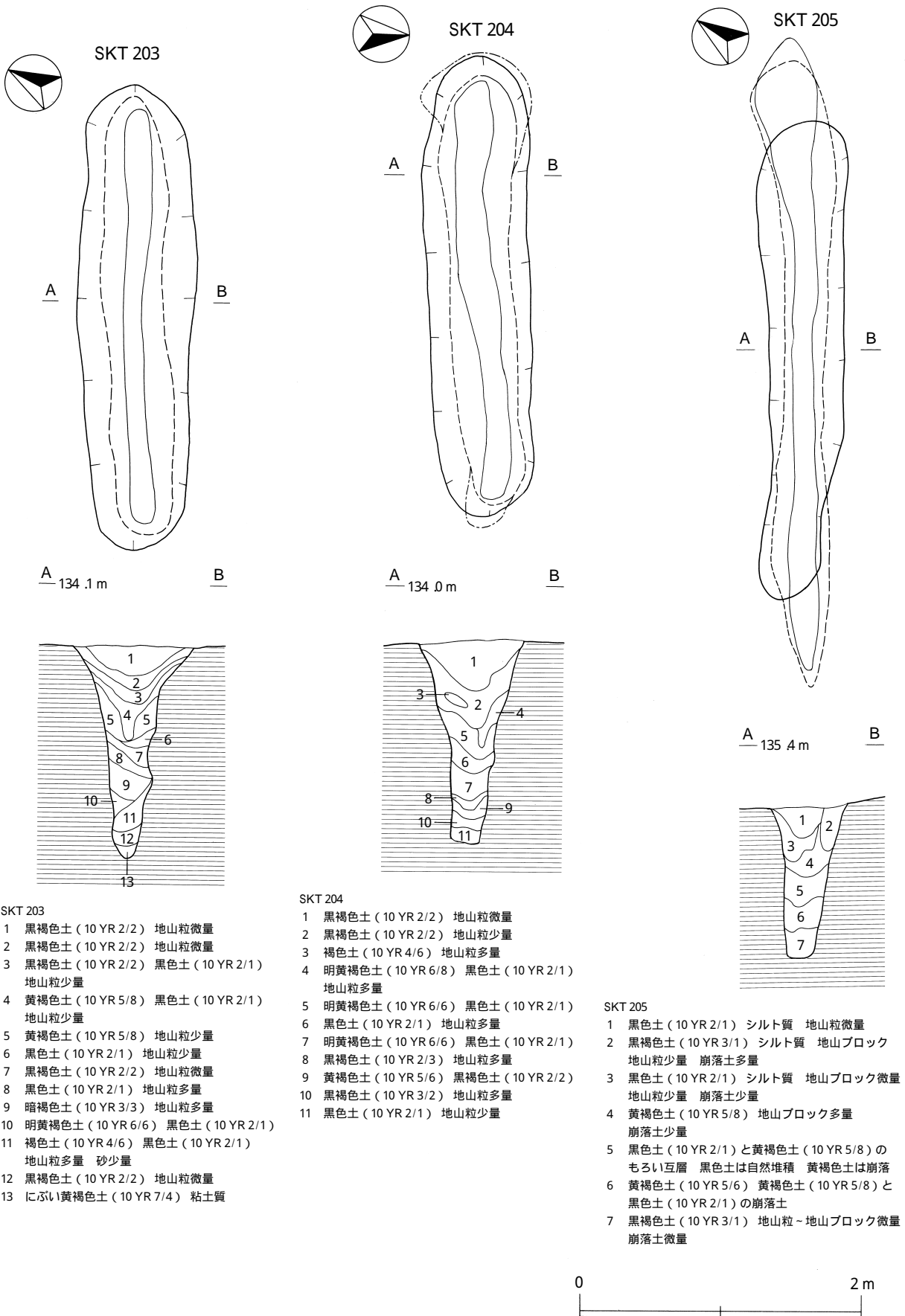
第12図 遺構内出土土器・石器(10~13)



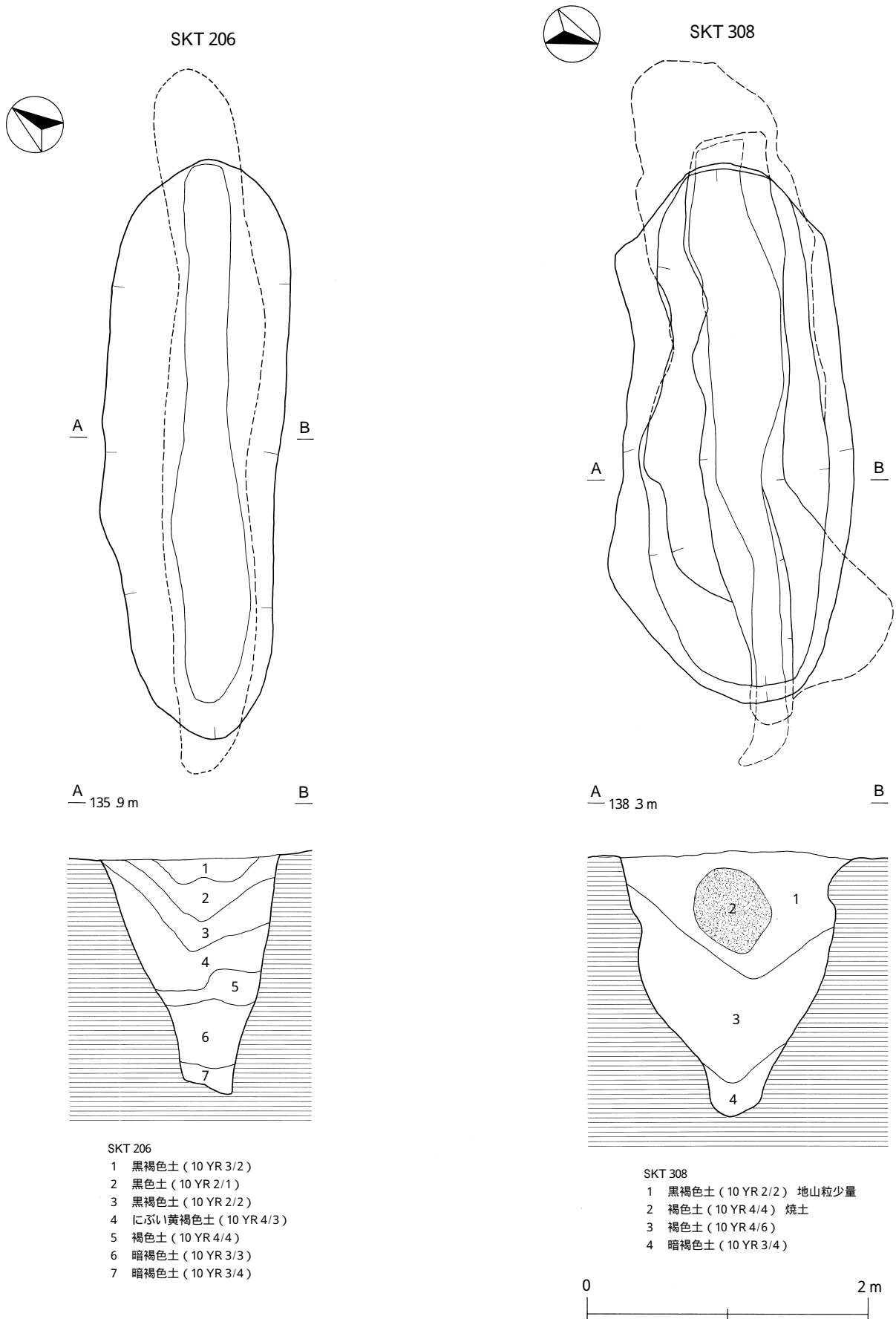
第13図 遺構内出土石器(14~16)



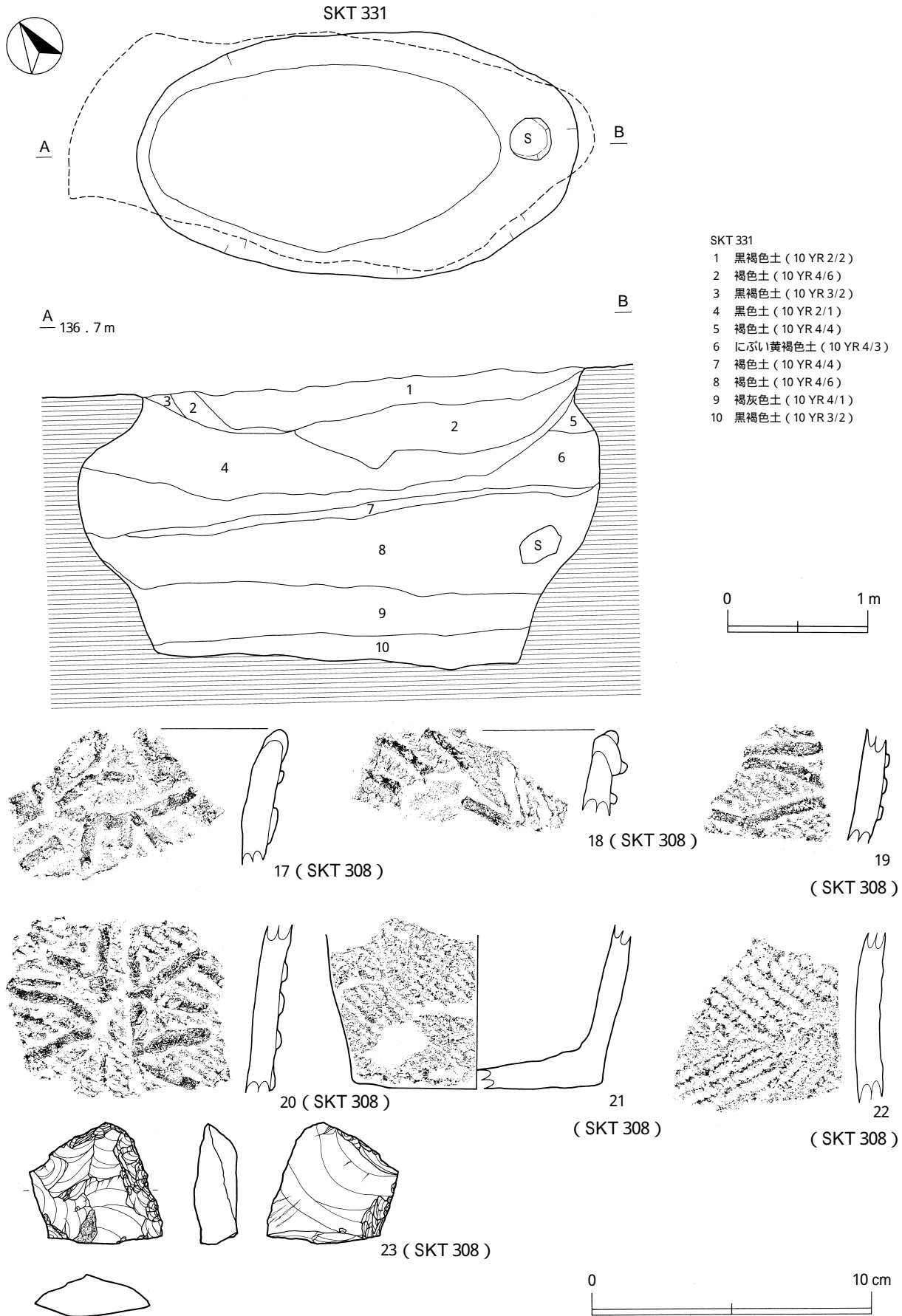
第14図 検出遺構 SKT 105 SKT 107 SKT 201



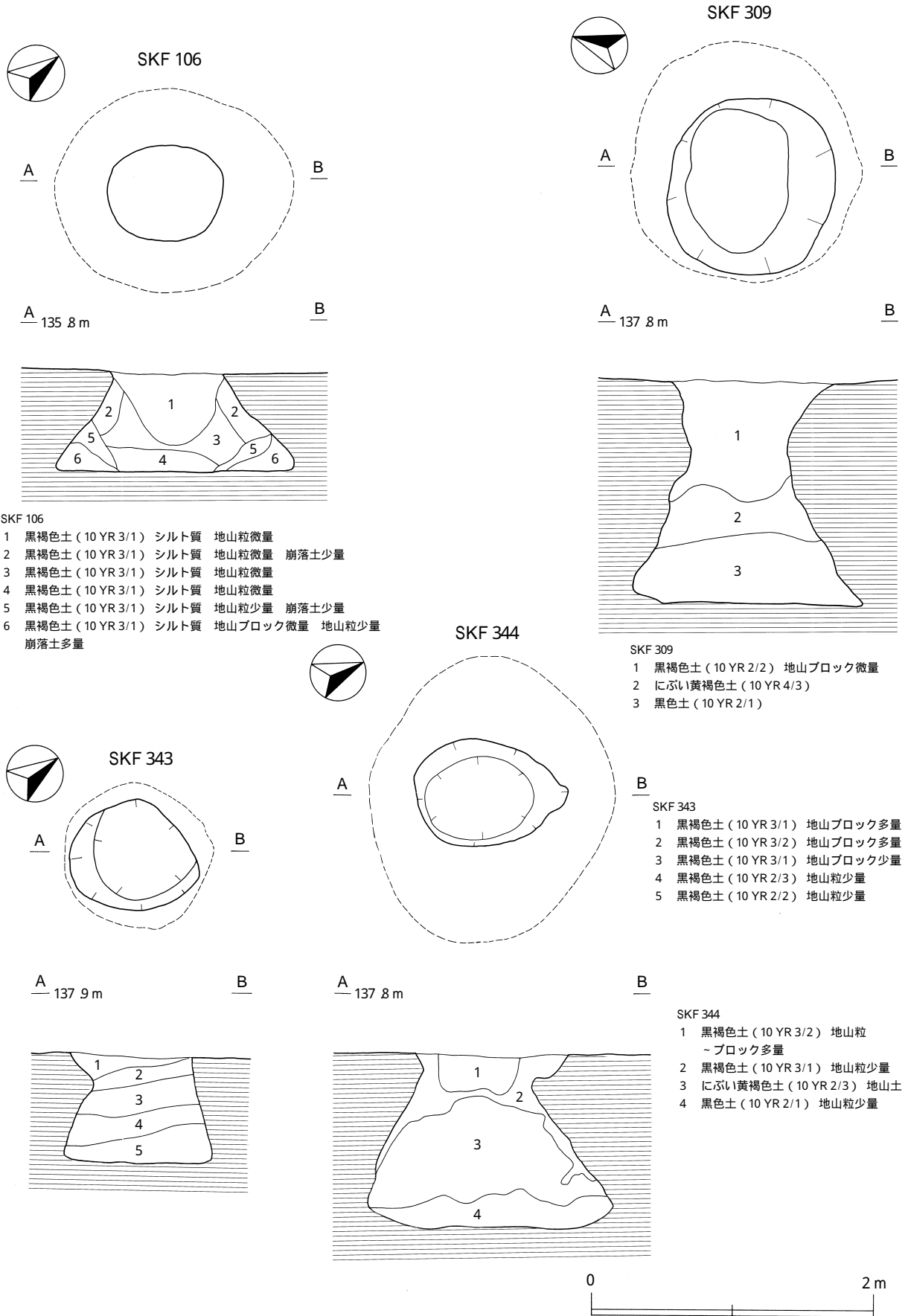
第15図 検出遺構 SKT 203 SKT 204 SKT 205



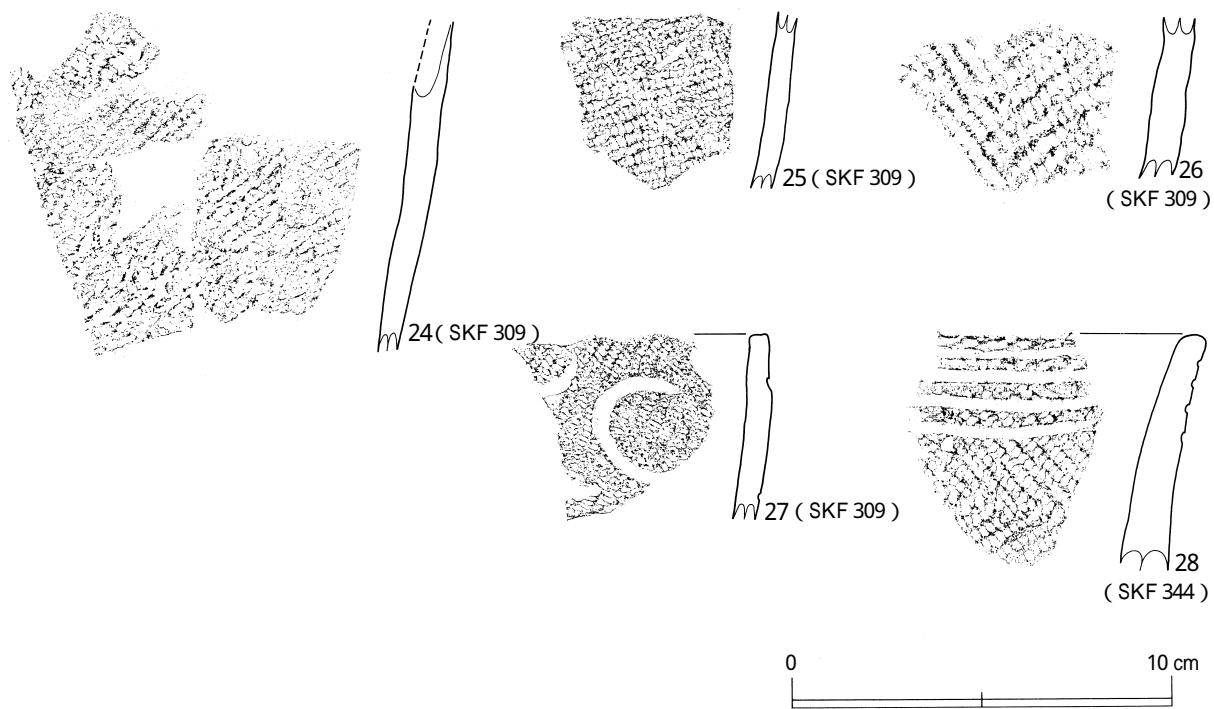
第16図 検出遺構 SKT 206 SKT 308



第17図 検出遺構 SKT 331 遺構内出土土器・石器(17~23)



第18図 検出遺構 SKF 106 SKF 309 SKF 343 SKF 344



第19図 遺構内出土土器(24~28)

2 古代～中世

(1) 竪穴住居跡(SI)

検出された2軒とも南区のもっとも平坦で水はけがよい場所に構築されていた。SI 303本体とカマドの保存状態は良かったが、SI 310は、確認調査時のトレンチと近年の耕作等によって、東側半分が失われていた。

S 303(第20図、図版3)

〔位置と確認〕南区 MA・MB 48～50グリッド第 層で確認した。調査区内でも比較的平坦な南区南端部に近い場所で確認した。この場所は、調査区内では最も標高が高く、水はけの良い場所といえる。竪穴の東側一部約0.80m×0.80mが攪乱を受けている。

〔規模と形態〕一辺約5.60mの正方形に近い方形である。深さは確認面から0.33mである。

〔堆積土〕大湯浮石が各層で確認できることから、廃絶後に人為的に埋められたものと考えられる。

〔床・壁〕第13層下面を床面としていたようであるが小さな凹凸があるが、部分的に薄い貼り床を施していた可能性がある。床面は非常に固くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〔壁溝・柱穴〕壁溝は周囲にほぼ均一な深さで廻るが、壁溝の底面に凹凸が多いのは、板等が打ち込まれた痕跡を示すものである。その幅は北西隅を除き、平均0.10～0.15mと狭く、壁溝の深さは床面から0.30～0.40mである。

〔カマド〕保存状態もよいカマド(第21図)が、南壁南東寄りに付設されていた。カマド煙道部分は一部石組みであるが、大半は粘土の貼り付け構造である。長軸約2.30m短軸0.50mである。

〔出土遺物〕土師器の坏(第22図29～31・33)や土師器の甕(第22図32・35・36)〔第23図37～44〕〔第24図46・48〕、土師器の甕(第24図45)などが出土した。土器片を分類すると口縁部破片14点、胴部破片39点、底部破片15点に及ぶ。他に流れ込みによるものと考えられる縄文土器片(第26図49)8点、石篋(第26図50)1点、剥片5点も出土した。

〔時期〕竪穴住居内から出土した炭化物は、AMS¹⁴C年代測定によるとAD780～875年であるが、堆積土各層に大湯浮石が混入していることから、少なくとも大湯浮石が噴出したとされるAD915年以降の構築と考えられる。

S 310(第25図)

〔位置と確認〕南区 MD・ME 43・44グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕確認調査時のトレンチによって、東側のほぼ半分が失われているが、一辺約2.70mの正方形に近い方形と考えられる。確認面から底面までの深さは約0.27mである。

〔堆積土〕大湯浮石が1～5層で確認できた。

〔床・壁〕6層下面が床面と考えられる。小さな凹凸が数多くあり、7層にあたる部分は貼り床として施していた可能性がある。竪穴住居内中央やや西側床面に炭化物(材)の広がりを確認した。また、東隅床面には赤く、硬くしまった焼土の広がりを確認した。

〔壁溝・柱穴〕いずれも確認できなかった。

〔カマド〕住居の東側半分が欠失しているため、ここにカマドがあったのか、カマドがなく地焼炉だった

たのか不明である。竪穴住居内(推定)東隅床面には、赤く硬くしまった焼土の広がりがある。しかし、周辺部の遺物出土状況を見ると、カマド煙道か袖を形成していたと考えられる固まった焼土が多数見つかっており、小規模なカマドがあった可能性がある。

〔出土遺物〕土師器の坏(第26図53・54)、土師器の甕(第24図47)〔第26図55・56〕〔第27図57~63〕など出土した。土器片を分類すると、口縁部8点、胴部17点、底部2点である。他に縄文土器片(第26図51)6点、石匙(第26図52)1点、剥片1点、すり石2点の出土があった。

〔時期〕大湯浮石堆積層下から採取した炭化材のAMS¹⁴C年代測定による分析では、試料No.2ではAD775~875年、試料No.3ではAD690~730年という結果が得られた。しかし、大湯浮石の堆積状況からやはりAD915年以降に構築された住居跡と考えられる。

(2) 炭焼遺構(SW)

SW 20〔第25図・図版3〕

〔位置と確認〕西区MP・MQ67グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.28m、短径1.25mのほぼ円形で深さは0.08mと浅い。

〔底面〕底部は、ほぼ全面が木の根によって壊されており大小の凹凸が確認された。底面東隅には径0.12m前後のピットがある。また、底面の半分は火熱を受け赤茶けており固くしまっていた。

〔堆積土〕黒褐色土単一層に炭化物及び焼土が混入している。表土から確認面まで0.30~0.40mと浅く、構築後、整地や耕作によって上部は攪乱されたものと考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕採取した炭化物を科学分析AMS¹⁴C年代測定の結果、AD685~720年という年代が得られた。また、同試料の樹種同定の結果はクルミであった。

SW 20〔第25図〕

〔位置と確認〕西区ML・MM62グリッド第 層で確認した。

〔規模と形態〕長径1.53m、短径1.25mの不整形な隅丸方形である。深さは0.44mで、壁面は急角度で立ち上がる。

〔底面〕概ね平坦であるが、中心部からやや北よりに径0.20mのピットが1つ確認された。

〔堆積土〕分層された1層~8層まで炭化物(材)及び大湯浮石と考えられる混入物が確認できた。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕採取した炭化物を科学分析AMS¹⁴C年代測定の結果、AD775~880年という年代が得られた。また、同試料の樹種同定の結果はクルミであった。

SW 30〔第25図〕

〔位置と確認〕南区LT56グリッド第 層で確認した。調査区内の丘陵部、やや傾斜した斜面に位置する。確認された場所は、現代の農道下にあたる。

〔規模と形態〕長径1.04m、短径0.90mの不整形な隅丸方形である。深さは0.24mで、壁面は緩やかに立ち上がる。

〔底面〕大小の凹凸がある。ほぼ全面固くしまっているが、特に底面の半分近くは火熱を受け赤茶けておりさらに固くしまっていた。

〔堆積土〕第1層は、構築後の整地や耕作による流れ込みと考えられる。また、2層目以下は当時の堆積状況そのままであり、人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕採取した炭化物を科学分析 AMS¹⁴C年代の結果、AD 775～875年という年代が得られた。また、同試料の樹種同定の結果はクルミであった。

(3) 溝 跡(SD)

東区で1条の溝跡を検出した。台地でも比較的高い南東部から北東部の崖に流れるような構造である。

SD 103(第28図、図版3)

〔位置と確認〕東区 LQ～MG 67～76グリッドに位置し、概ね第1層で確認した。一部農道付け替えのため後回しになっていた東区東端部の調査では2層目(大湯浮石層)を掘り込んでいることが確認できた。一部 SKT 104と重複がある。SKT 104を SD 103が切っている。

〔規模と形態〕大湯浮石堆積層を掘り込んでおり、最大幅は4.50m、最小幅3.00m、深さ0.80m前後であった。標高値は、南東方向が高く、北西方向が低い。

〔底面〕底面から壁面は、緩やかなV字又はU字の形状である。底面は大小の凹凸があり平坦とはいえない。部分的には2回にわたって掘り込んだとも考えられるような段差も確認できた。

〔堆積土〕一部自然堆積も見られるが、整地に伴い当初構築時に掘削された周囲の土による埋め戻しが行われている。したがって人為堆積と判断した。

〔出土遺物〕二次加工のあるスクレイパー(第28図64)1点。剥片3点の出土があった。底面に近いやや壁面寄り、地山面からの高さ約5cmから出土した。

〔時期〕出土遺物は流れ込みによるものであり、大湯浮石堆積層(第2層)を掘り込んでいることから、AD 915年以降の構築であることは明確である。

(4) 掘立柱建物跡(SB)・柱列(SA)

南区から5棟の掘立柱建物跡と1条の柱列を検出した。掘立柱建物跡における時代検証は八戸工業大学高島成侑氏に依頼し、結果、10～14世紀に帰属する建物跡であることがわかった。詳細は以下のとおりである。なお、文中における建物規模等に関する記述の中で長軸方向を「桁」・「桁行」、短軸方向を「梁」・「梁行」と呼称することとした。

SB 001(第29図)

LR 46・47 LS 47グリッド 層で確認した。南区の崖に程近い場所に位置する。1間×1間の掘立柱建物跡で桁行2.87m、梁行2.62mであった。SB 002と並行するように構築されていることから、建て替えの可能性がある。新旧関係は不明である。柱の間尺から、10世紀の構築であると考えられる。

SB 002(第29図)

LR 46・47 LS 47グリッド 層で確認した。南区の崖に程近い場所に位置する。1間×1間の掘立柱建物跡で桁行2.50m、梁行2.37mであった。SB 001と並行するように構築されていることから、建て

替えの可能性がある。新旧関係は不明である。柱の間尺から、SB 001同様10世紀初め頃の構築であると考えられる。

SB 003(第30図)

ME・MF 53～55グリッド 層から 層で確認した。南区の中央やや北寄りに位置する。4間×2間の掘立柱建物跡で中心桁の北に位置する柱は1本だけ張り出す形になっている。また、3間×1間の掘立柱が西側をなす桁から張り出すような構造になっている。桁行で6.75m、梁行は4.12mである。間尺から、10世紀頃の倉庫跡と考えられる。

SB 004(第30図)

MD・MC 54～56 層から 層で確認した。南区の中央やや北寄りに位置する。3間×1間の掘立柱建物跡で1間×1間が北側に張り出している。桁行6.25m、梁行2.00m、北側に張り出した掘立柱を含めると梁行総間は3.75mである。間尺から11世紀の構築であると考えられるが、SB 003と建物の軸線がほぼ平行することからSB 003との関係も考える必要がある。

SB 005(第31図)

MG・MF 50・51 グリッド 層から 層で確認した。南区の中央やや西寄りに位置する。本来2間×2間の構造であったとする見方ができるが、确实なところ1間×2間だけであり、桁行4.50m、梁行1.25mである。本来の大きさを推定した場合、桁行4.50m、梁行4.00mで、倉庫に見られる特徴がある。しかし、時期を特定することはできなかった。

SA 006(第31図)

LS・LT 49～51グリッド 層から 層で確認した。南区の東側に位置する。P 1～P 5までの長さが9.00mであった。柱間は平均2.25mである。柱間からは13～14世紀の構築であるいえるが、軸線はSI 301とほぼ平行であり、関連も考えられる。

(5) 土坑(SK)

SK 316土坑(第31図)

〔位置と確認〕南区 ME・MF 48・49グリッド第 層で確認した。土坑群からは西側にやや離れて位置する。

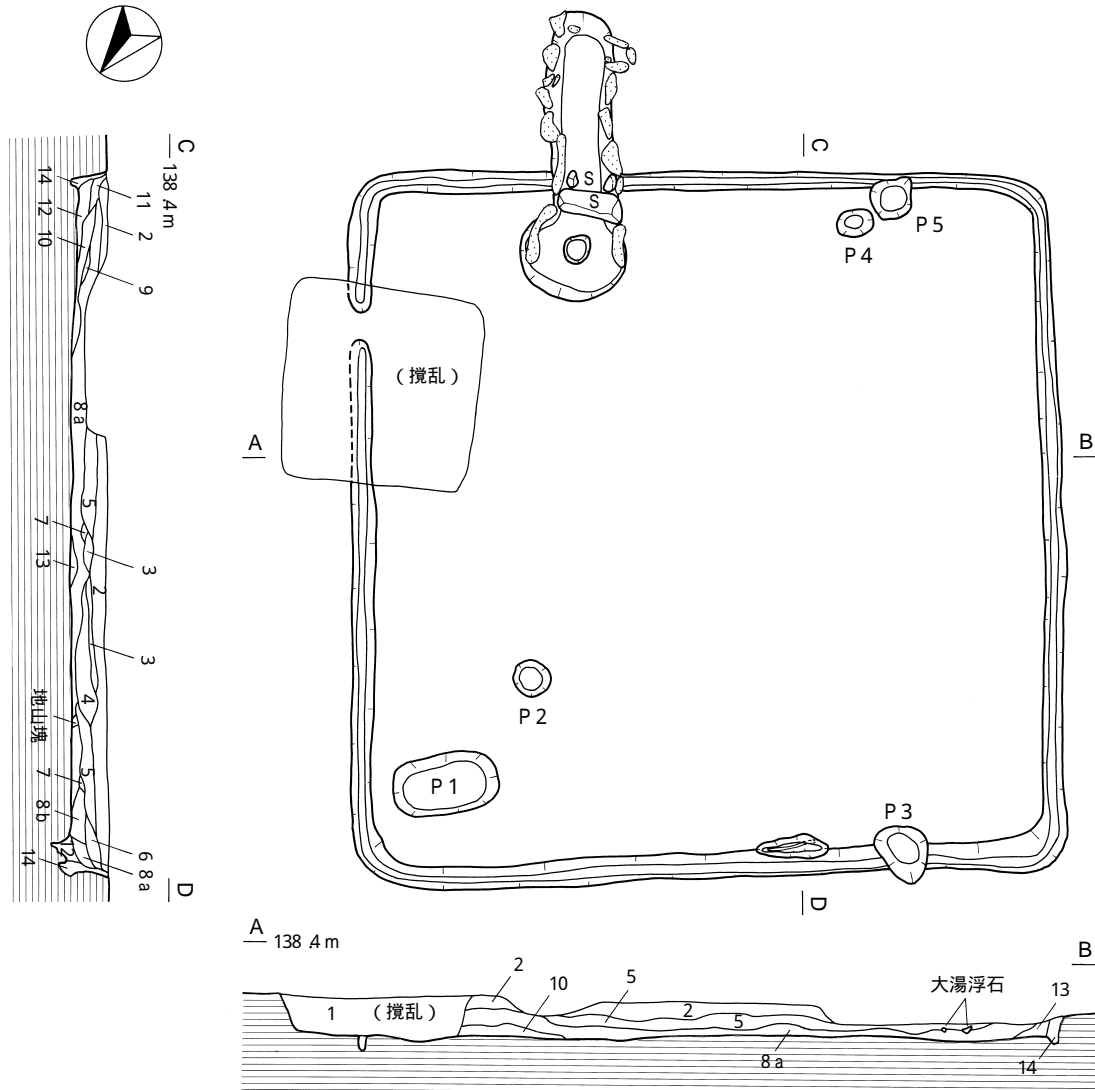
〔規模と形態〕長径0.62m、短径0.58mの円形で、深さは0.26mである。壁は底面から上端まではほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕長径0.58m、短径0.54mで小さな凹凸はあるがほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックが堆積土に平均的に含まれていることなどから、埋め戻しによる人為堆積と判断した。

〔出土遺物〕鉄器片1点の出土があった。

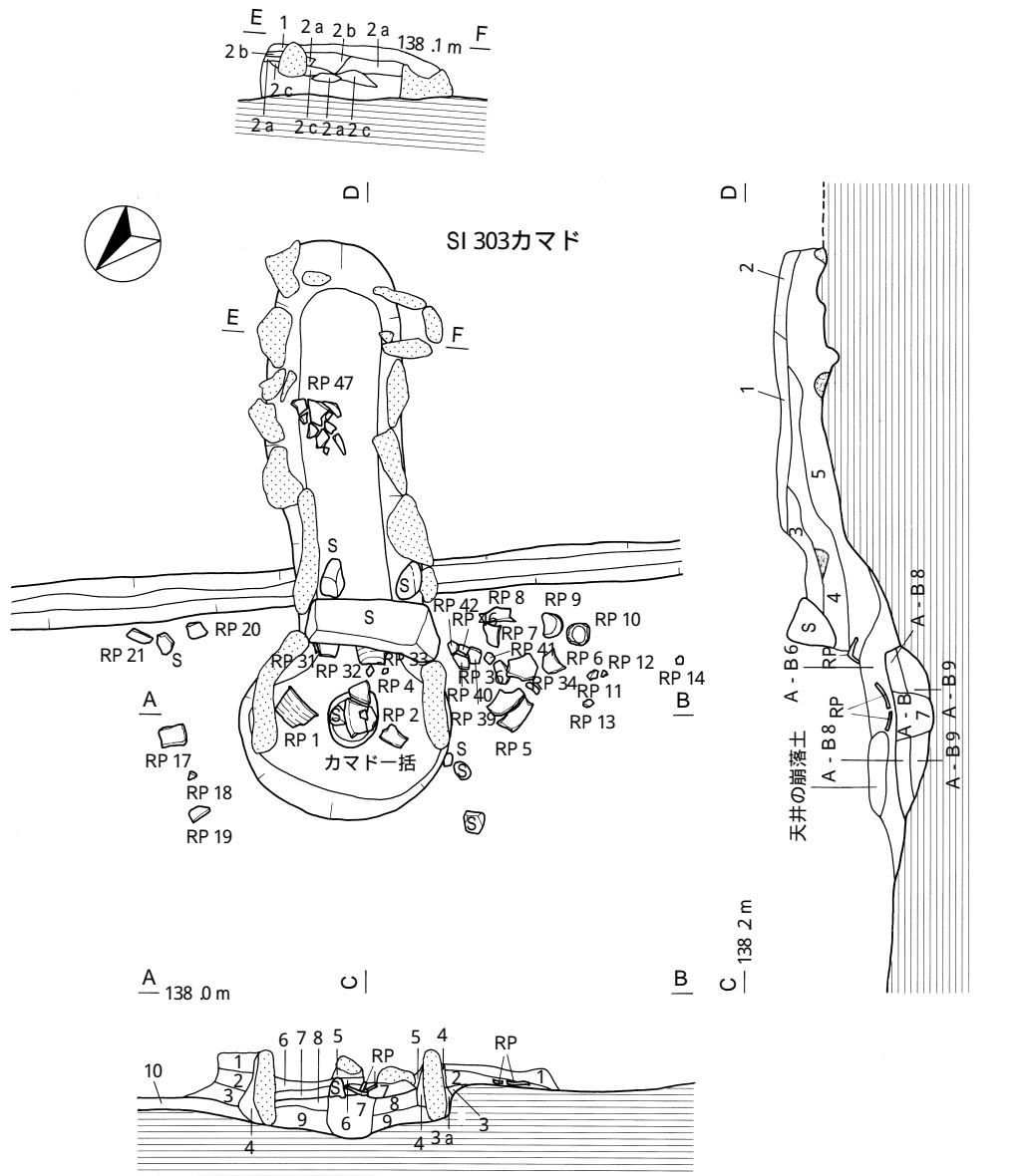
〔時期〕板状の鉄器片(長さ11cm、幅6cm、厚さ3mm)が出土しているので土坑の構築年代は少なくとも古代以降と考えられる。性格ははっきりしない。



SI 303

- 1 黒色土 (10 YR 2/1) 地山ブロック少量 攪乱
- 2 黒褐色土 (10 YR 2/2) 地山ブロック少量 大湯浮石粒微量
- 3 暗赤褐色土 (2.5 YR 3/2) 地山ブロック少量 大湯浮石粒~ブロック微量
- 4 黒褐色土 (10 YR 2/2) 地山ブロック少量 地山粒少量 大湯浮石粒微量
- 5 黒褐色土 (10 YR 2/2) 地山粒微量 大湯浮石粒~ブロック微量
- 6 黒色土 (10 YR 1.7/1) 地山粒微量 大湯浮石粒微量
- 7 黒色土 (10 YR 1.7/1)
- 8a 黒褐色土 (10 YR 2/2) 地山ブロック微量 地山粒微量
大湯浮石粒~ブロック少量
- 8b 黒褐色土 (10 YR 2/2) 地山ブロック微量 地山粒微量
大湯浮石粒~ブロック少量
- 9 黒色土 (10 YR 1.7/1)
- 10 黒褐色土 (10 YR 2/2) 地山粒微量 大湯浮石粒~ブロック少量
- 11 黒褐色土 (10 YR 2/2) 大湯浮石粒~ブロック微量
- 12 黒色土 (10 YR 2/1) 地山粒微量 大湯浮石粒微量
- 13 にぶい黄色土 (2.5 Y 6/3) 大湯浮石粒少量
- 14 黒色土 (10 YR 2/1) 地山粒微量

第20図 検出遺構 S 303



SI 303カマド (A - B)

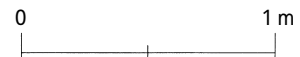
- 1 黒褐色土 (10 YR 3/2) 地山粒微量 炭微量
- 2 暗褐色土 (10 YR 3/4) 地山ブロック多量 炭微量
- 3 暗褐色土 (10 YR 3/4) 地山粒微量 炭微量
- 3a 暗褐色土 (10 YR 3/4) 地山ブロック少量 埋土
- 4 褐色土 (7.5 YR 4/4) 粘土質
- 5 黒褐色土 (10 YR 3/1) 焼土微量 炭微量
- 6 褐色土 (7.5 YR 4/4) 地山粒微量 炭微量
- 7 褐色土 (7.5 YR 4/6) 焼土微量 炭微量
- 8 赤褐色土 (2.5 YR 4/8) 炭微量
- 9 明赤褐色土 (5 YR 5/8) 炭微量
- 10 にぶい黄橙色土 (10 YR 6/4) 炭微量

SI 303カマド (C - D)

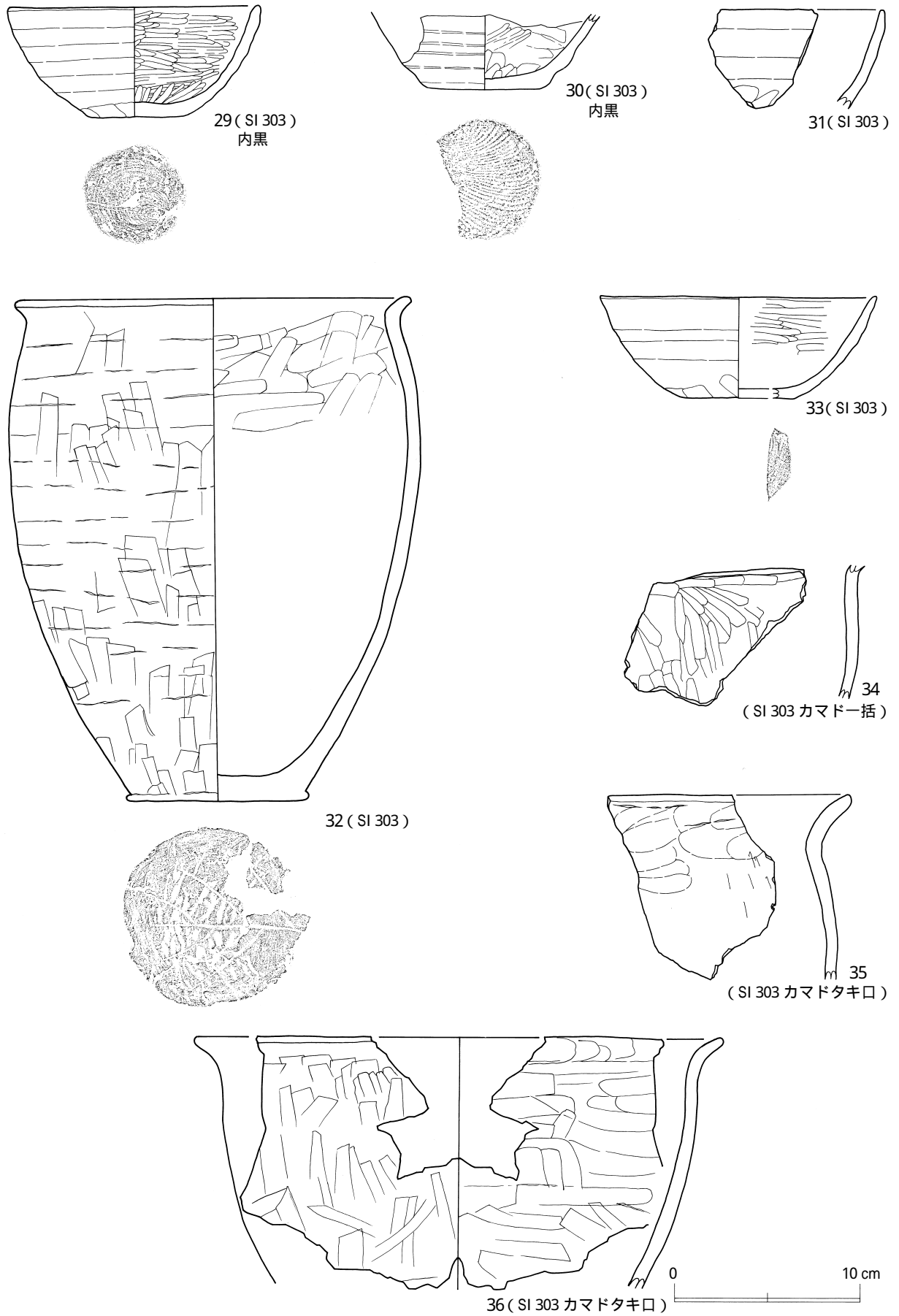
- 1 黒色土 (10 YR 1.7/1) 自然堆積土
- 2 黒褐色土 (10 YR 2/2) 地山粒少量 自然堆積土
- 3 黒褐色土 (10 YR 3/2) 地山粒少量
- 4 にぶい黄褐色土 (10 YR 4/3) 地山粒少量
- 5 暗褐色土 (7.5 YR 3/4)

SI 303カマド (E - F)

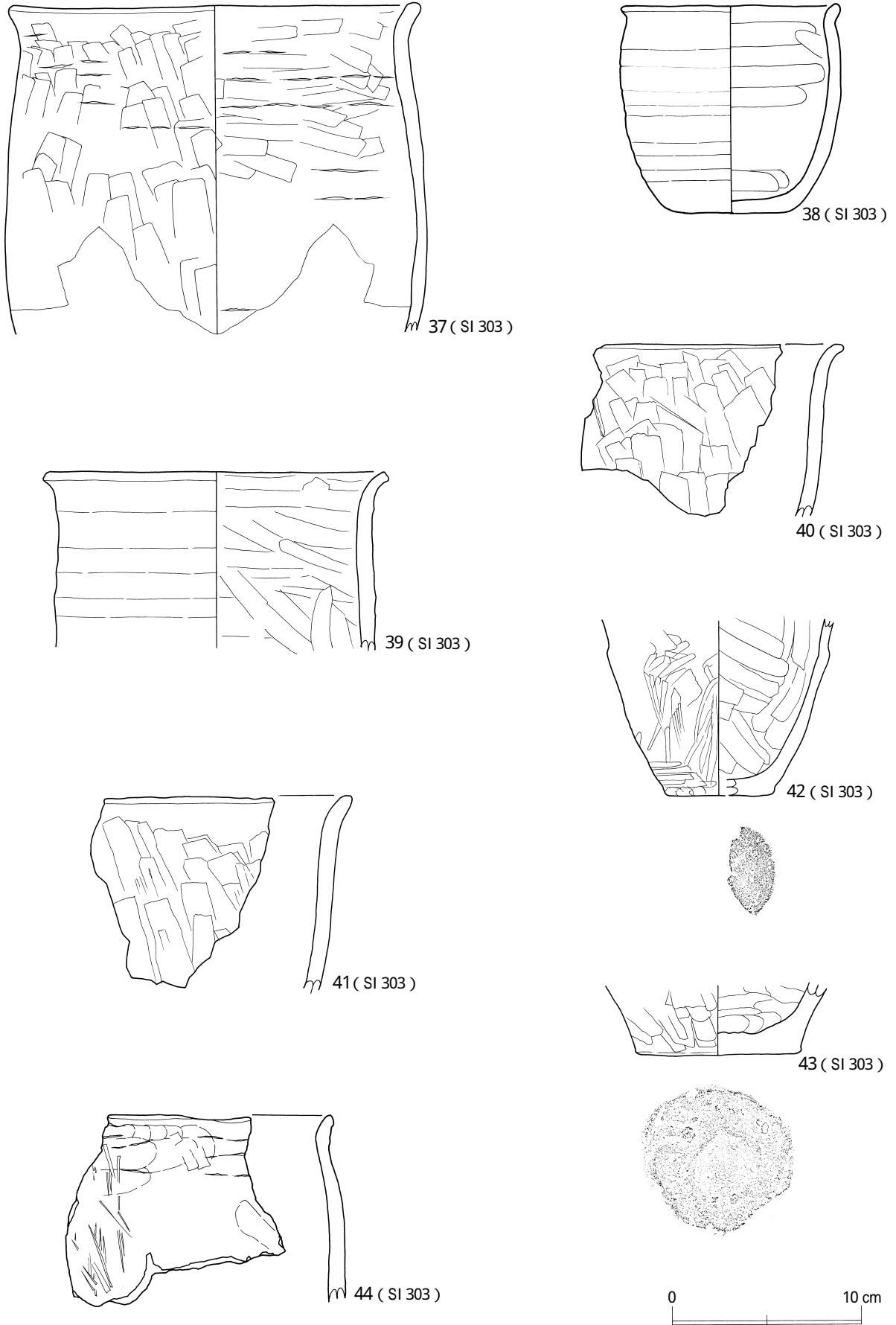
- 1 黒褐色土 (10 YR 3/1) 火山灰微量
- 2a 暗褐色土 (7.5 YR 3/3) 地山粒微量 炭化物微量
- 2b オリーブ黄色土 (5 Y 6/4) 火山灰多量
- 2c オリーブ褐色土 (2.5 Y 4/4) 火山灰少量
- 3 にぶい黄褐色土 (10 YR 4/3) 地山粒微量 焼土粒少量 炭化物少量



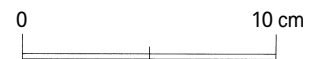
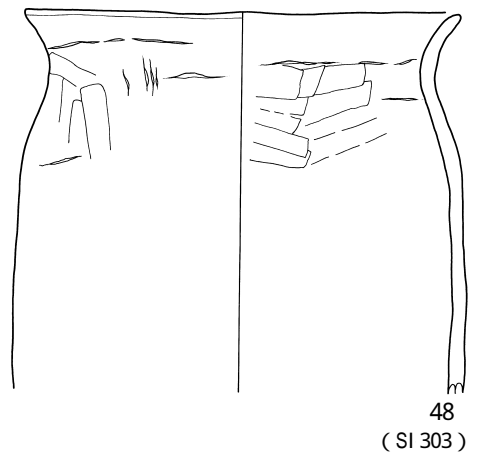
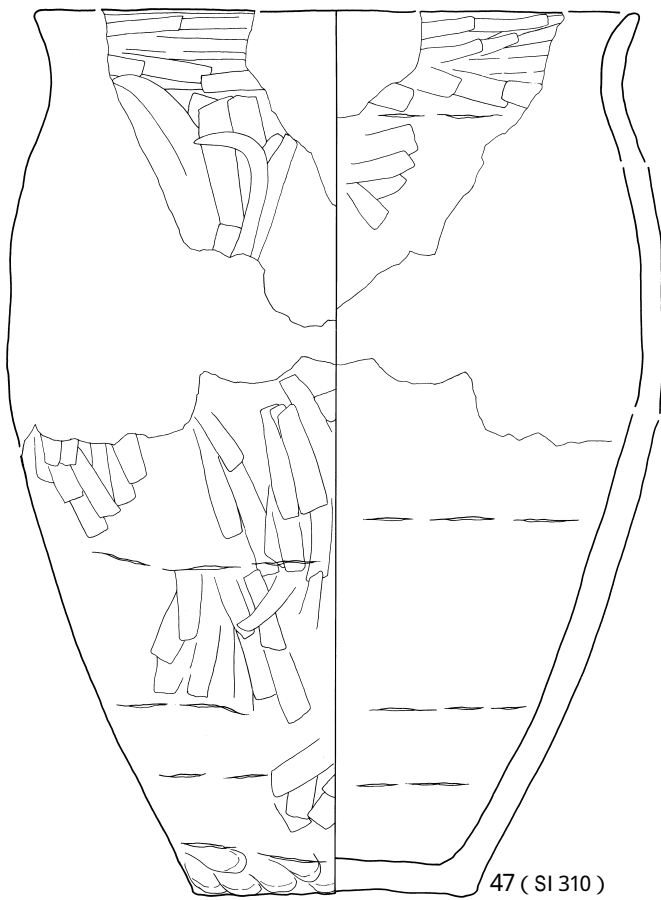
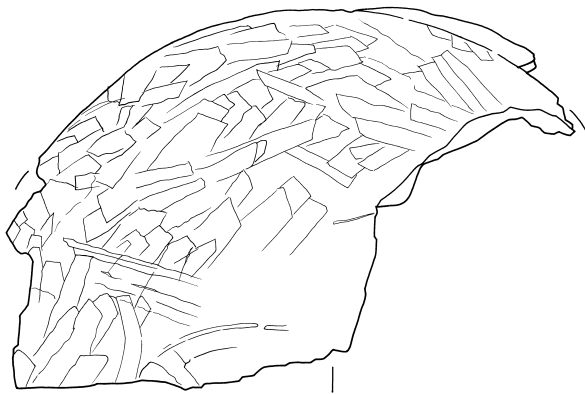
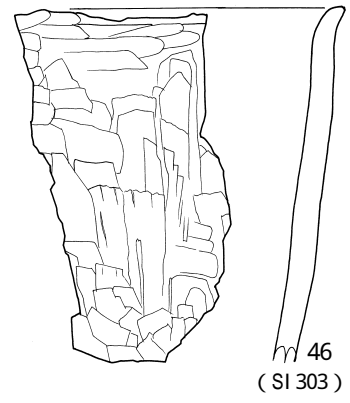
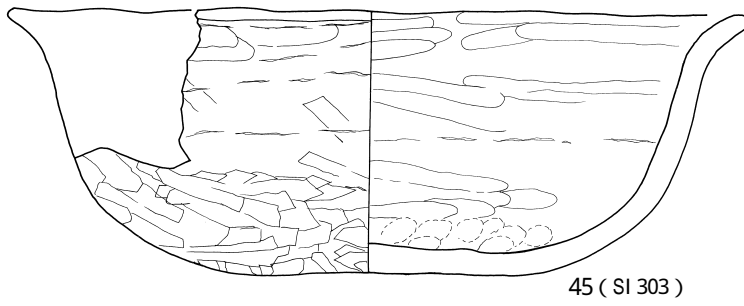
第21図 検出遺構 S 303カマド



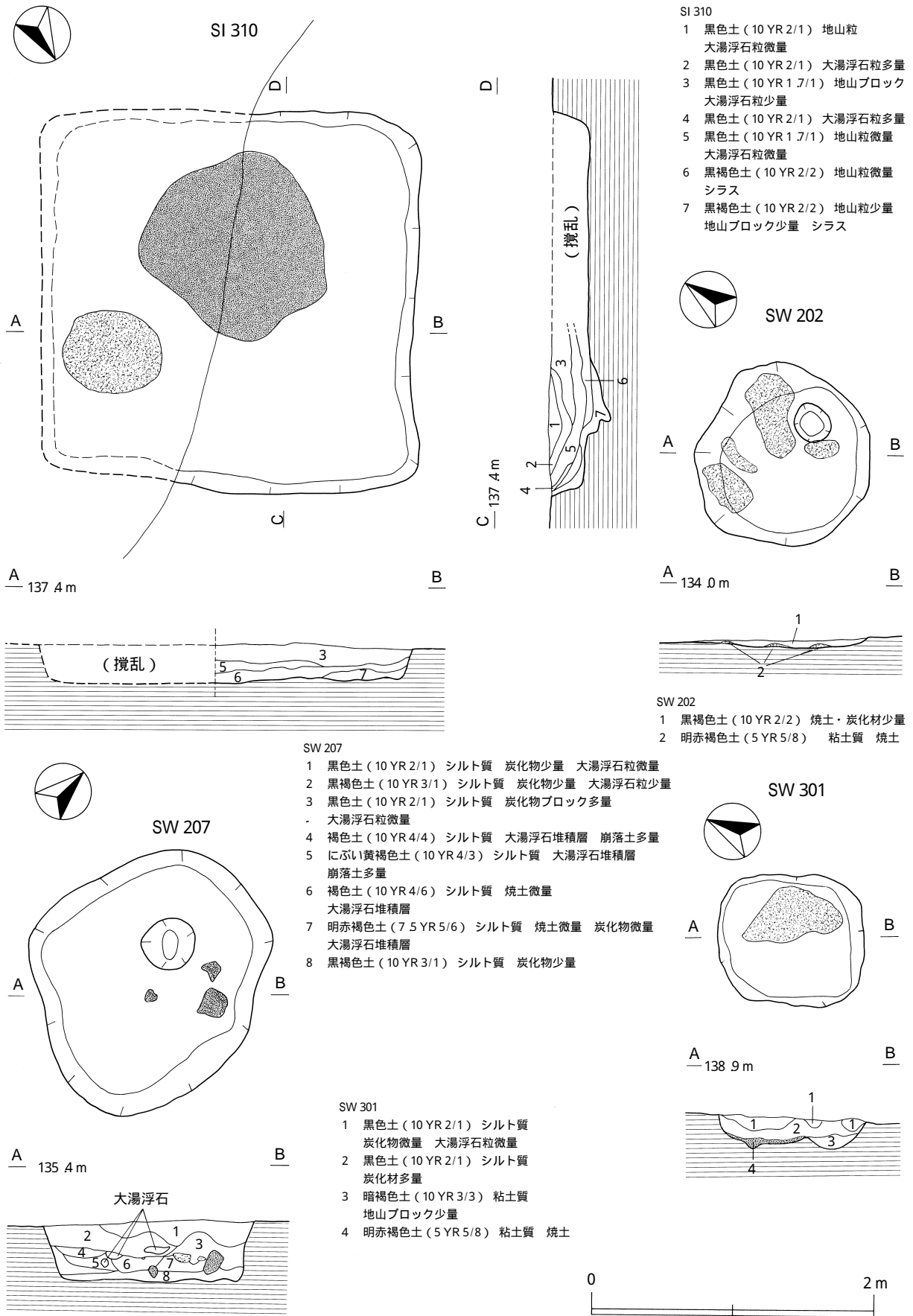
第22図 遺構内出土土器(29 ~ 36)



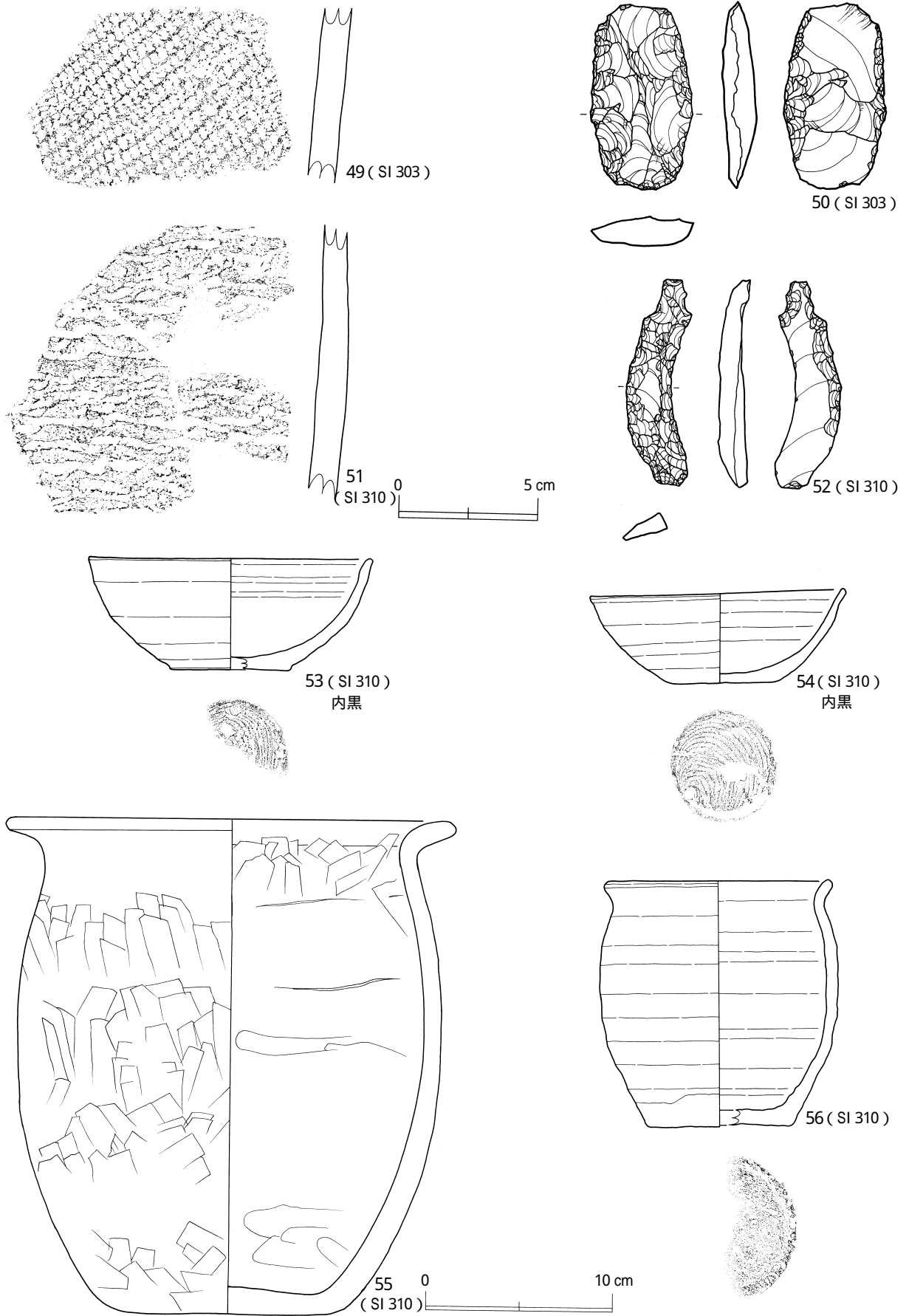
第23図 遺構内出土土器(37~44)



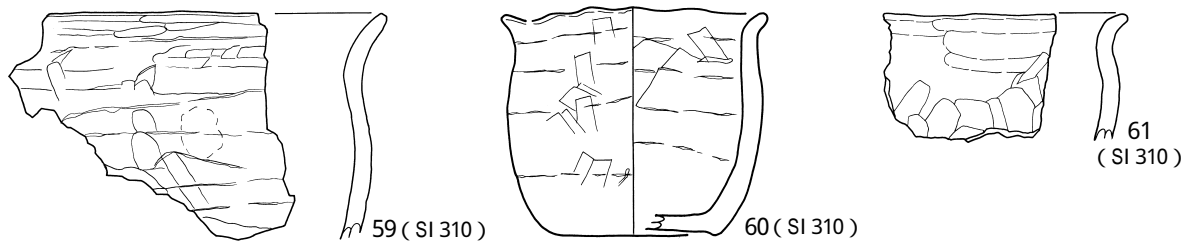
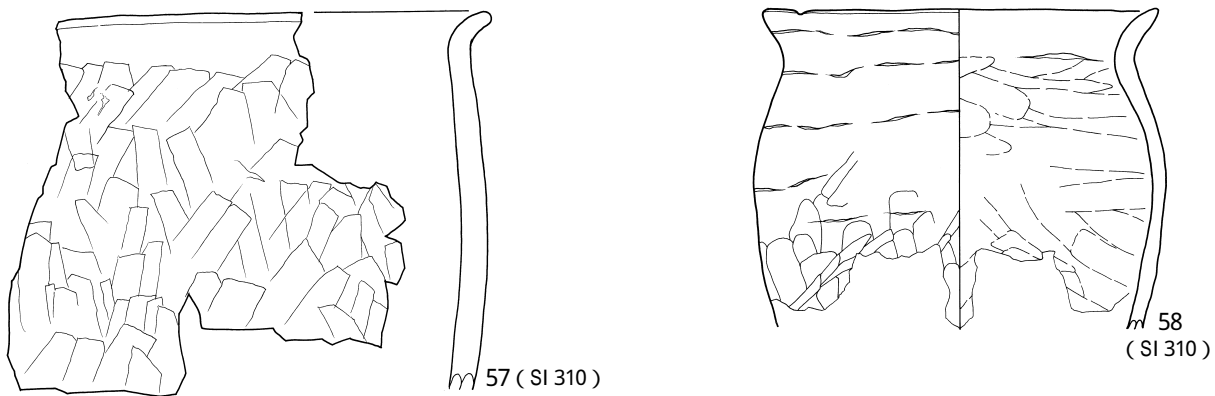
第24図 遺構内出土土器(45~48)



第25図 検出遺構 S 310 SW 202 SW 207 SW 301

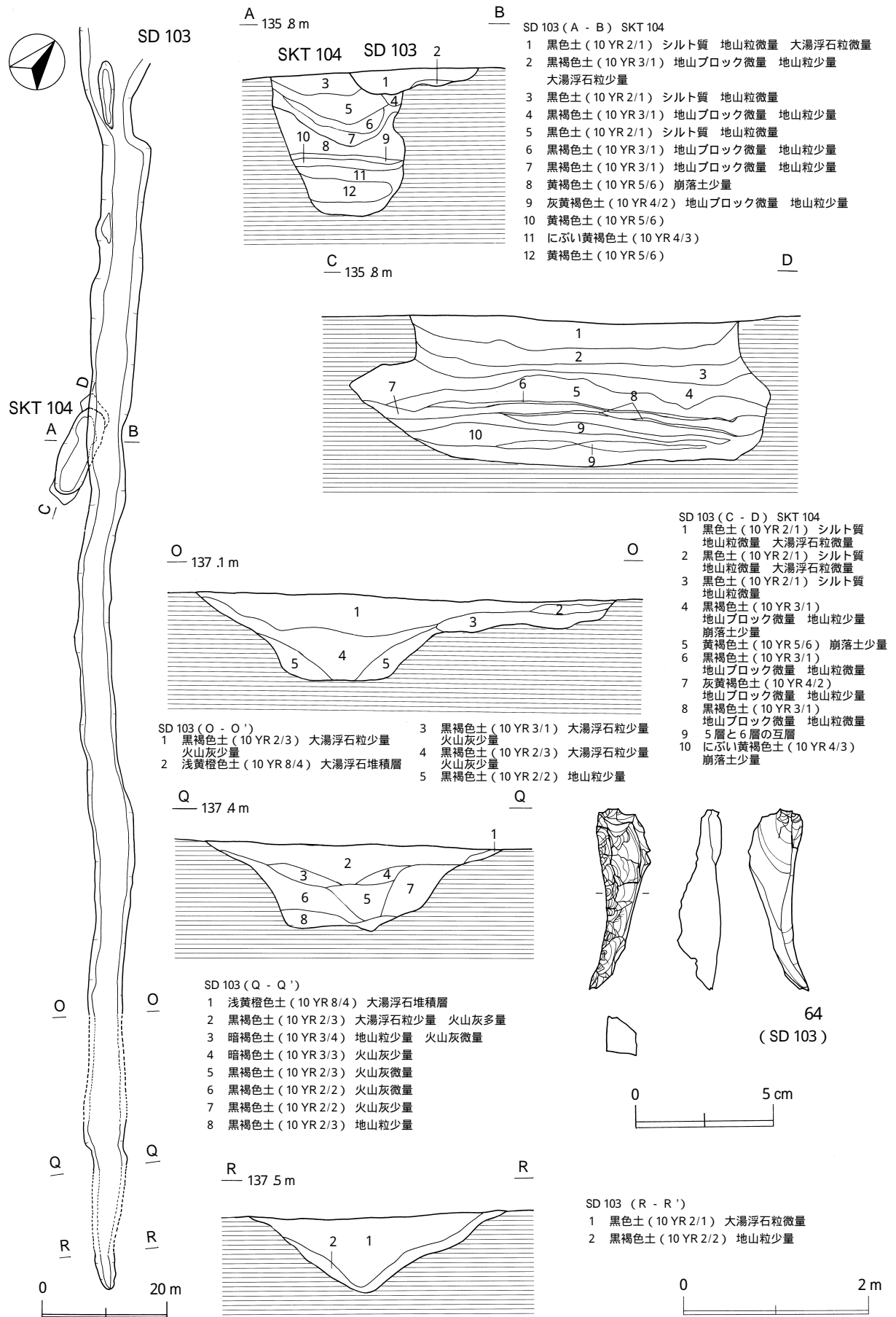


第26図 遺構内出土土器・石器(49~56)

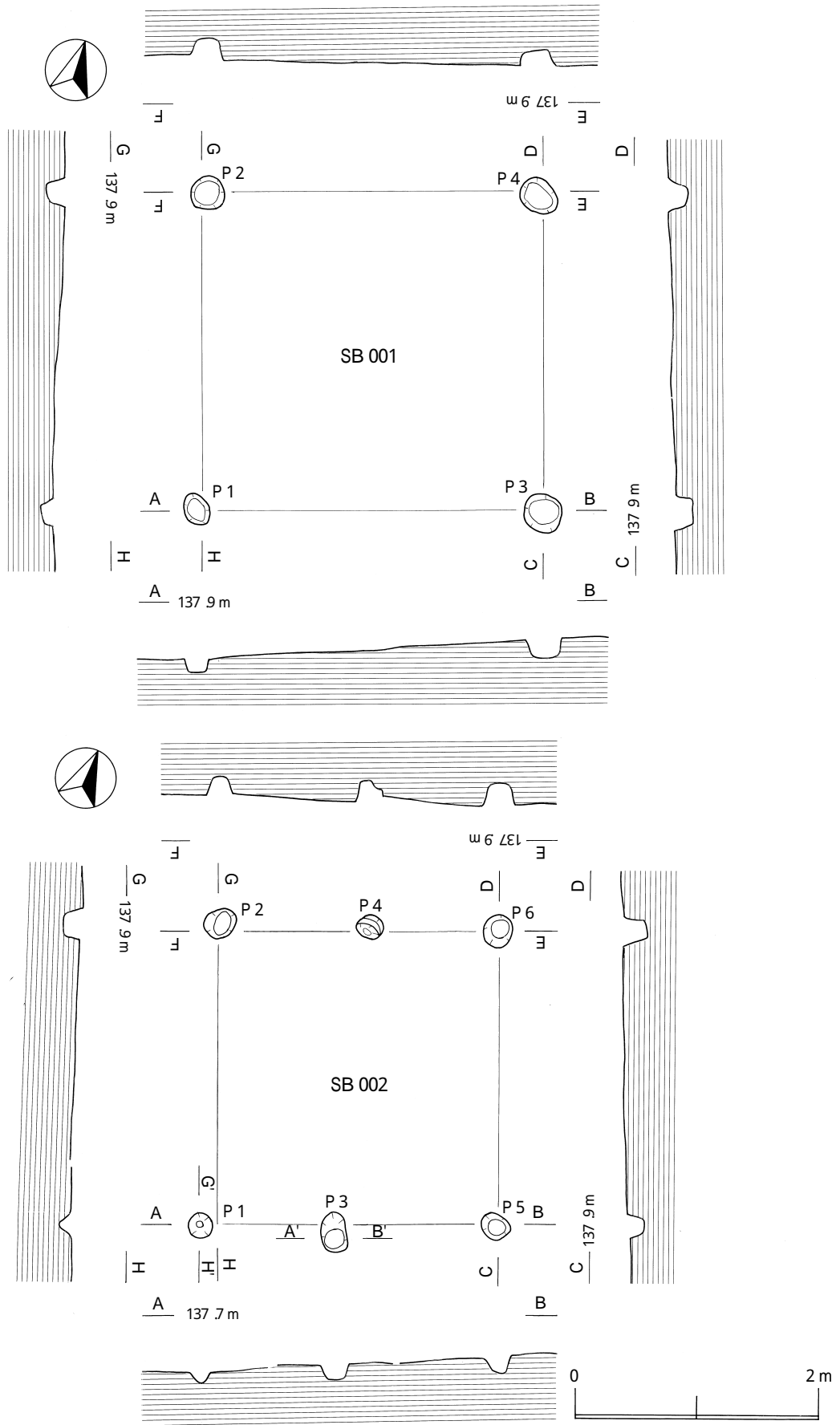


0 10 cm

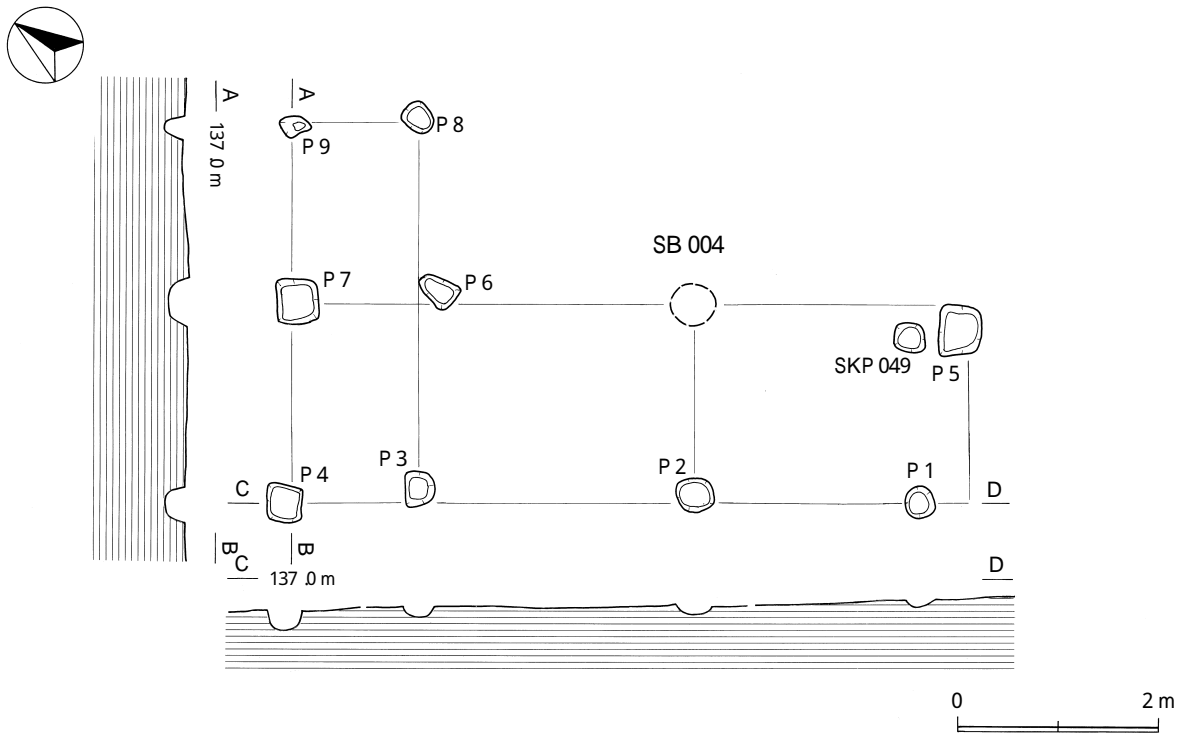
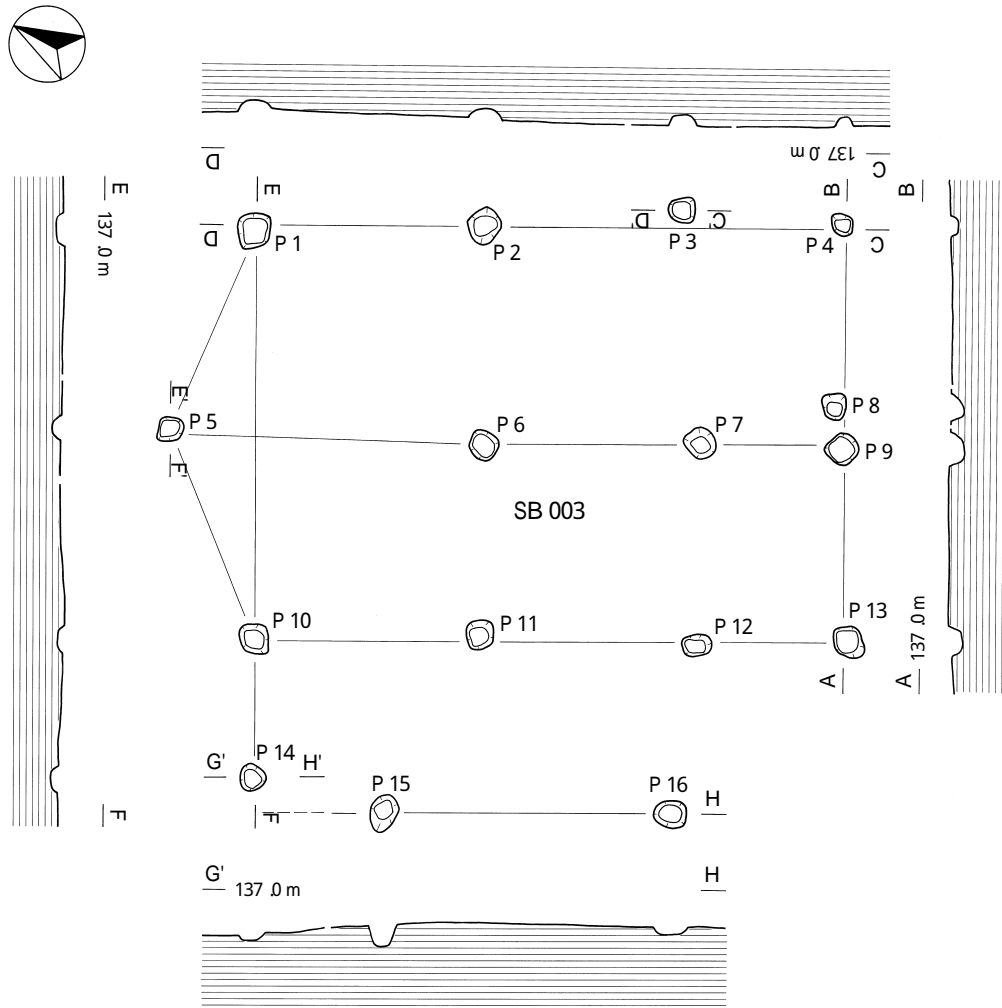
第27図 遺構内出土土器(57~63)



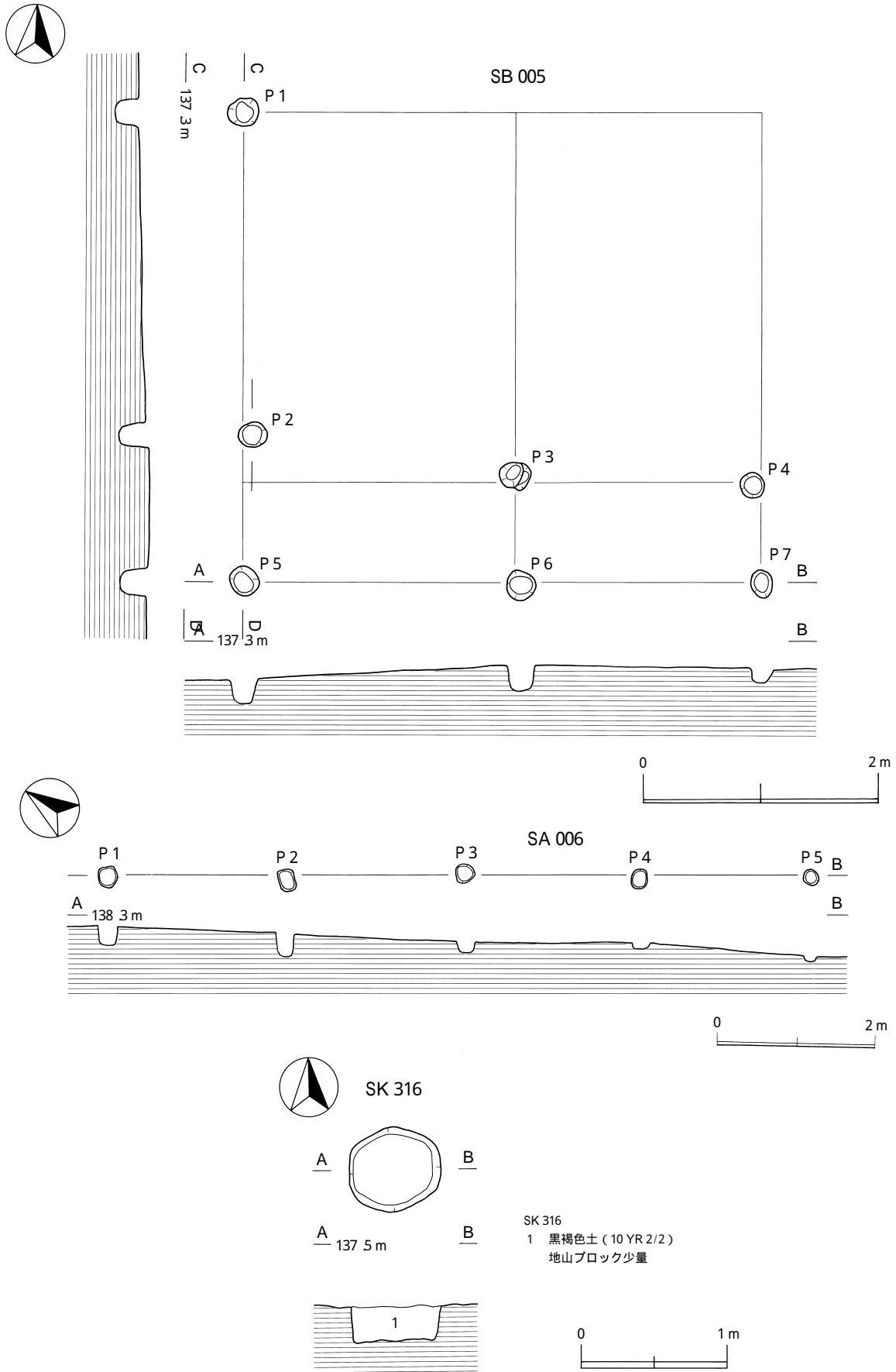
第28図 検出遺構 SD 103 SKT 104 遺構内出土石器(64)



第29図 検出遺構 SB 001 SB 002



第30図 検出遺構 SB 003 SB 004



第31図 検出遺構 SB 005 SA 006 SK 316

遺構番号	柱穴番号	現場用 柱穴番号	所在区	平面形状	径または 辺長 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
SB 001	P 1	SKP 168	LR 46	楕円形	27×19	12	137.31	
	P 2	SKP 148	LS 47	楕円形	29×25	15	137.38	
	P 3	SKP 172	LR 46	方形	29×28	42	137.15	
	P 4	SKP 152	LR 47	方形	30×25	19	137.42	
SB 002	P 1	SKP 169	LR 46	楕円形	20×17	10	137.33	
	P 2	SKP 149	LS 47	楕円形	26×22	16	137.35	
	P 3	SKP 171	LR 46	方形	30×20	13	137.36	
	P 4	SKP 150	LR 47	楕円形	23×19	16	137.40	
	P 5	SKP 173	LR 46	楕円形	23×20	15	137.41	
	P 6	SKP 151	LR 47	楕円形	25×21	18	137.42	
SB 003	P 1	SKP 009	ME 55	方形	33×31	10	136.53	
	P 2	SKP 118	ME 54	方形	30×29	12	136.59	
	P 3	SKP 018	ME 54	方形	25×22	10	136.63	
	P 4	SKP 019	ME 54	方形	19×18	10	136.64	
	P 5	SKP 008	MF 55	方形	23×22	10	136.50	
	P 6	SKP 017	ME 54	方形	29×26	8	136.55	
	P 7	SKP 020	ME 54	楕円形	33×30	17	136.52	
	P 8	SKP 032	ME 53	方形	26×22	14	136.58	
	P 9	SKP 031	ME 53	方形	30×28	16	136.57	
	P 10	SKP 014	MF 54	方形	27×27	6	136.55	
	P 11	SKP 016	MF 54	方形	27×26	19	136.45	
	P 12	SKP 029	MF 53	方形	28×19	32	136.35	
	P 13	SKP 030	ME 53	方形	30×26	14	136.58	
	P 14	SKP 028	MF 54	楕円形	27×24	8	136.49	
	P 15	SKP 044	MF 54	楕円形	38×29	21	136.44	
	P 16	SKP 013	MF 53	方形	30×27	10	136.56	
SB 004	P 1	SKP 253	MD 54	円形	29×27	7	136.73	
	P 2	SKP 255	MD 54・55	楕円形	40×32	11	136.65	
	P 3	SKP 042	MD 55	方形	33×27	9	136.62	
	P 4	SKP 041	MD 55	方形	34×33	19	136.51	
	P 5	SKP 050	MC 54	方形	48×39	20	136.67	
	P 6	SKP 110	MD 55	不整形	37×23	8	136.70	
	P 7	SKP 039	MD 56	方形	44×39	20	136.54	
	P 8	SKP 190	MC 55・56	方形	32×27	8	136.68	
	P 9	SKP 040	MD 56	不整形	21×19	21	136.47	
SB 005	P 1	SKP 067	MG 51	楕円形	26×21	20	136.70	
	P 2	SKP 089	MG 50	楕円形	24×20	26	136.74	
	P 3	SKP 091	MF 50	楕円形	27×23	20	136.88	
	P 4	SKP 094	MF 50	円形	20×20	14	136.95	
	P 5	SKP 088	MG 50	楕円形	25×21	25	136.76	
	P 6	SKP 090	MF 50	円形	25×25	20	136.89	
	P 7	SKP 093	MF 50	楕円形	25×19	11	136.97	
SA 006	P 1	SKP 244	LT 51	方形	24×23	25	137.91	
	P 2	SKP 158	LT 50	方形	26×19	30	137.77	
	P 3	SKP 140	LS 50	円形	23×22	14	137.83	
	P 4	SKP 230	LS 49	楕円形	27×20	10	137.87	
	P 5	SKP 189	LS 49	不整形	18×18	8	137.70	

第3表 掘立柱建物跡観察表

第4章 調査の記録

遺構番号	所在区	平面形状	径または 辺長 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
SKP 008	MF 55	方形	23×22	10	136.50	SB 003 P 5
SKP 009	ME 55	方形	33×31	10	136.53	SB 003 P 1
SKP 010	ME 55	不整形	35×25	14	136.50	
SKP 011	ME 55	楕円形	33×23	16	136.49	
SKP 012	MG 55	楕円形	23×19	12	136.65	
SKP 013	MF 53	方形	30×27	10	136.56	SB 003 P 16
SKP 014	MF 54	方形	27×27	6	136.55	SB 003 P 10
SKP 015	MG 54	不整形	47×38	26	136.29	
SKP 016	MF 54	方形	27×26	19	136.45	SB 003 P 11
SKP 017	ME 54	方形	29×26	8	136.55	SB 003 P 6
SKP 018	ME 54	方形	25×22	10	136.63	SB 003 P 3
SKP 019	ME 54	方形	19×18	10	136.64	SB 003 P 4
SKP 020	ME 54	楕円形	33×30	17	136.52	SB 003 P 7
SKP 021	ME・MF 53	方形	29×15	7	136.22	
SKP 022	MH 53	方形	25×22	23	135.77	
SKP 023	MH 53	円形	43×43	14	136.08	
SKP 024	MH 53	不整形	40×23	27	135.68	
SKP 025	MH 53	不整形	38×35	26	135.78	
SKP 026	MG 53	不整形	23×20	12	136.15	
SKP 027	MG 53	不整形	47×35	22	136.06	
SKP 028	MF 54	楕円形	27×24	8	136.73	SB 003 P 14
SKP 029	MF 53	方形	28×19	32	136.35	SB 003 P 12
SKP 030	ME 53	方形	30×26	14	136.58	SB 003 P 13
SKP 031	ME 53	方形	30×28	16	136.57	SB 003 P 9
SKP 032	ME 53	方形	26×22	14	136.58	SB 003 P 8
SKP 033	MJ 51	方形	28×24	14	135.57	
SKP 034	ME 58	方形	29×25	14	136.22	
SKP 035	MD・MH 58	楕円形	30×21	9	136.30	
SKP 036	MC 59	円形	22×21	28	136.26	
SKP 037	MB 58	楕円形	30×23	22	136.43	
SKP 038	MC 56	円形	22×20	12	136.51	
SKP 039	MD 56	方形	44×39	20	136.54	SB 004 P 7
SKP 040	MD 56	不整形	21×19	21	136.47	SB 004 P 9
SKP 041	MD 55	方形	34×33	19	136.51	SB 004 P 4
SKP 042	MD 55	方形	33×27	9	136.62	SB 004 P 3
SKP 043	MD 55	円形	26×26	15	136.60	
SKP 044	MF 54	楕円形	38×29	21	136.44	SB 003 P 15
SKP 045	MC 55	方形	35×34	9	136.76	
SKP 046	MC 55	方形	20×20	18	136.65	
SKP 047	MB 55	楕円形	26×20	16	136.75	
SKP 048	MA 55	楕円形	29×21	23	136.92	
SKP 049	MC 54	方形	28×27	18	136.67	
SKP 050	MC 54	方形	48×39	20	136.67	SB 004 P 5
SKP 051	MC 54	方形	21×20	15	136.73	
SKP 052	MC 54	不整形	44×40	11	136.80	
SKP 053	MJ 51	円形	27×27	15	135.58	
SKP 054	MI 51	円形	29×28	21	135.76	
SKP 055	LT 45	楕円形	62×43	14	137.26	
SKP 056	LT 45	楕円形	37×26	19	137.20	
SKP 057	MI 50・51	楕円形	32×28	11	135.81	確認面に S
SKP 058	MI 51	方形	28×21	13	135.80	
SKP 059	MH・MI 51	楕円形	49×30	16	136.03	
SKP 060	MH 51	楕円形	29×26	17	136.02	
SKP 061	MH 51	方形	35×35	4	136.39	
SKP 062	MG 51	不整形	44×35	21	136.31	
SKP 063	MG 51	不整形	48×39	22	136.50	
SKP 064	MG 51	円形	59×55	34	136.45	
SKP 065	MG 51	円形	25×23	12	136.69	
SKP 066	MG 51	楕円形	42×28	18	136.68	
SKP 067	MG 51	楕円形	26×21	20	136.70	SB 005 P 1
SKP 068	MG 51	楕円形	27×23	20	136.74	
SKP 069	MG 51	楕円形	50×39	20	136.76	SB 005 P 2
SKP 070	MF 51	方形	35×35	13	136.88	
SKP 071	MF 51	楕円形	27×24	11	136.93	
SKP 072	MF 51	円形	30×29	14	136.93	
SKP 073	ME・MF 51	楕円形	61×50	17	136.86	
SKP 074	ME 51	楕円形	42×28	13	136.94	
SKP 075	ME 51	楕円形	23×21	20	136.88	
SKP 076	ME 52	不整形	28×25	19	136.24	
SKP 077	MH 50	方形	39×18	9	136.45	
SKP 078	MH 51	楕円形	33×24	5	136.36	
SKP 079	MH 50	楕円形	30×25	12	136.54	
SKP 080	MH 50	楕円形	22×20	7	136.57	
SKP 081	MG 50	不整形	37×15	12	136.56	
SKP 082	MH 50	楕円形	26×23	14	136.43	
SKP 083	MG 50	不整形	29×24	10	136.65	
SKP 084	MG 50	方形	28×20	14	136.53	
SKP 085	MG 50	方形	27×25	9	136.73	
SKP 086	MG 41	方形	27×25	17	135.88	
SKP 087	MF 51	楕円形	67×60	15	136.94	
SKP 088	MG 50	楕円形	25×21	25	136.76	SB 005 P 5
SKP 089	MG 50	楕円形	24×20	26	136.74	
SKP 090	MF 50	円形	23×25	20	136.89	SB 005 P 6
SKP 091	MF 50	楕円形	27×23	20	136.88	SB 005 P 3
SKP 092	MF 50	不整形	30×29	20	136.85	
SKP 093	MF 50	楕円形	25×19	11	136.97	SB 005 P 7
SKP 094	MF 50	円形	20×20	14	136.95	SB 005 P 4
SKP 095	MJ 49	方形	36×21	10	136.76	
SKP 096	MH・MI 49	円形	27×26	7	136.28	
SKP 097	MG 41	楕円形	45×27	18	135.87	
SKP 098	MH 48	楕円形	31×19	7	136.69	
SKP 099	MH 48	楕円形	32×21	9	136.47	
SKP 100	MH 48	方形	29×24	5	136.54	
SKP 108	MD 55	方形	34×23	18	136.58	
SKP 109	MD 55	楕円形	34×30	10	136.66	
SKP 110	MD 55	不整形	37×23	8	136.70	SB 004 P 6
SKP 111	MA 50	円形	22×22	12	137.83	
SKP 112	MA 50	円形	22×22	25	137.72	
SKP 113	MA 50	不整形	26×24	14	137.82	
SKP 114	MA 50	方形	25×24	22	137.78	
SKP 115	LT 50	方形	31×19	15	137.84	
SKP 116	LT 45	不整形	36×23	21	137.21	
SKP 117	MA 48	楕円形	21×16	12	137.80	
SKP 118	ME 54	方形	30×29	12	136.59	SB 003 P 2
SKP 119	MC 48	不整形	27×18	14	137.55	
SKP 120	MH 47	楕円形	31×25	11	136.39	
SKP 121	LS 45	楕円形	65×40	13	137.32	
SKP 122	LT 48・49	楕円形	23×19	12	137.63	
SKP 123	MD 43	楕円形	51×37	19	136.71	
SKP 124	LS・LT 48	方形	20×19	11	137.54	
SKP 125	MI 47	円形	30×29	12	136.93	
SKP 126	MH 47	楕円形	35×31	26	136.31	
SKP 127	MH 47	不整形	76×47	20	136.24	
SKP 128	MH 47	円形	16×16	9	136.45	
SKP 129	MH 47	不整形	47×30	16	136.38	
SKP 130	MH 47	円形	29×27	18	136.38	
SKP 131	MH 47	方形	27×20	9	136.52	
SKP 132	MH 47	楕円形	22×18	9	136.48	
SKP 133	MH 47	楕円形	27×22	9	136.52	
SKP 134	MH 47	不整形	36×30	13	136.51	
SKP 135	MC 48	方形	46×27	15	137.60	
SKP 136	MC 48・49	楕円形	25×22	10	137.55	
SKP 137	MD 43	楕円形	34×27	9	136.82	
SKP 138	MC 48	楕円形	26×20	20	137.39	
SKP 139	LT 50	楕円形	27×24	13	137.81	
SKP 140	LS 50	円形	23×22	14	137.83	SA 006 P 3
SKP 141	LT 47	方形	21×17	16	137.52	
SKP 142	LT 47	楕円形	26×21	14	137.36	
SKP 143	LT 47	円形	23×22	10	137.43	

遺構番号	所在区	平面形状	径または 辺長 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
SKP 144	LS 48	方形	23×21	7	137.55	
SKP 145	LS 47	楕円形	26×21	14	137.46	
SKP 146	LS 47	楕円形	20×17	3	137.51	
SKP 147	LS 47	不整形	35×22	18	137.37	SB 001 P 2
SKP 148	LS 47	楕円形	29×25	15	137.38	SB 002 P 2
SKP 149	LS 47	楕円形	26×22	16	137.35	SB 002 P 4
SKP 150	LR 47	楕円形	23×19	16	137.40	SB 002 P 6
SKP 151	LR 47	楕円形	25×21	18	137.42	SB 002 P 4
SKP 152	LR 47	方形	30×25	19	137.42	SB 001 P 4
SKP 153	MH 46	楕円形	72×40	28	136.17	
SKP 154	MG 46	不整形	24×24	10	136.68	
SKP 155	MG 46	不整形	34×34	17	136.61	
SKP 156	MG 46	方形	36×34	9	136.74	
SKP 157	MD 43	楕円形	37×27	32	136.60	
SKP 158	LT 50	方形	26×19	30	137.77	SA 006 P 2
SKP 159	LT 46	不整形	21×20	15	137.35	
SKP 160	LT 46	方形	39×33	17	137.24	
SKP 161	LT 46	方形	36×26	19	137.25	
SKP 162	LS 46	楕円形	35×30	15	137.28	
SKP 163	LS 46	楕円形	49×18	19	137.27	
SKP 164	LS 46	楕円形	17×9	13	137.44	
SKP 165	LS 46	方形	22×21	9	137.42	
SKP 166	LS 46	楕円形	16×12	9	137.34	
SKP 167	LS 46	円形	17×17	11	137.35	
SKP 168	LR 46	楕円形	27×19	12	137.31	SB 001 P 1
SKP 169	LR 46	楕円形	20×17	10	137.33	SB 002 P 1
SKP 170	LR 46	楕円形	20×19	18	137.27	
SKP 171	MR 45	楕円形	30×20	19	137.36	SB 002 P 3
SKP 172	LR 46	楕円形	29×28	42	137.15	SB 001 P 3
SKP 173	LR 46	楕円形	23×20	15	137.41	SB 002 P 5
SKP 174	MH 45・46	不整形	32×21	18	136.24	
SKP 175	MH 45	楕円形	33×24	7	136.39	
SKP 176	MG・MH 45	不整形	26×24	7	136.52	
SKP 177	MG 45	楕円形	36×24	10	136.55	
SKP 178	MG 45	楕円形	38×27	12	136.68	
SKP 179	MB 45	楕円形	23×18	9	137.05	
SKP 180	MB 45	楕円形	24×20	10	137.08	
SKP 181	MA 45	不整形	17×15	11	137.12	
SKP 182	MA 45	楕円形	24×20	21	137.12	
SKP 183	LT・MA 45	楕円形	32×28	15	137.18	
SKP 184	MA 45	不整形	26×23	15	137.25	
SKP 185	LT 45	楕円形	29×20	13	137.28	
SKP 186	LT 45	円形	26×26	16	137.23	
SKP 187	LT 45	楕円形	35×30	27	137.17	
SKP 188	LT 45	方形	31×31	28	137.14	
SKP 189	LS 49	不整形	18×18	8	137.70	SA 006 P 5
SKP 190	MC 55・56	方形	32×27	8	136.68	SB 004 P 8
SKP 191	LS 45	不整形	27×25	21	137.21	494に切られる
SKP 192	LS 45	楕円形	20×17	8	137.29	
SKP 193	LS 45	不整形	57×32	34	137.03	
SKP 194	LS 45	楕円形	26×22	57	136.87	491を切る
SKP 195	LS 45	楕円形	70×40			

第2節 遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外から縄文時代と続縄文時代、平安時代に使用された土器と石器・石製品および剥片などが出土した。遺物のほとんどが南区東側の残丘斜面下と台地の南縁に近い平坦地からの出土である。

1 土器【第32～38図、図版8～10】

土器は、ほとんどが層～層にかけて出土した。層からは主に平安時代のものが多く、層からは縄文時代のものが多く出土した。縄文時代の土器の多くは前期初頭に相当するもので、次いで早期、後期、中期の順に多い。また、数は少ないものの、縄文時代晩期、続縄文時代の後北式に比定されるものや小坂X式に比定される土器片も数点出土している。

縄文時代早期に相当する土器の多くは、LS 56グリッドとMC 57グリッド各々層から出土した。MC 59グリッド層では、貝殻腹縁文のみを施した白浜式に比定される土器(第32図65)が出土している。また、MA 56グリッド層から出土した白浜式に比定される土器片(第32図66)には、外面条痕地文に貝殻腹縁文が施されていた。これら白浜式に比定されるこの2点は、出土遺物全体の中では最も古い。この他にMF 53グリッド層では、吹切沢式に比定される土器片(第32図77)も出土している。

縄文時代前期に属する土器は、南区東側にある残丘斜面下のMB 56グリッド第層で多く出土した。そのほとんどが円筒下層式土器に分類され、地文に縄文を施していたものと、地文に撚糸文を施したものの2種類があった。他に大木式に比定される土器も数点出土した。中でも縄文に横位の沈線文を多数施した土器片(第33図78)は、波状口縁を呈し、2本の沈線は口縁部に平行するように描かれていた。同様な形状の土器片(第33図81)は、焼成が良く硬質で、口縁部がやや厚い。

縄文時代中期から続縄文時代にかけての遺物は極めて少ない。晩期の遺物としては、唯一注口土器の注口部分(第36図113)がある。全体の形状は不明である。

平安時代の土器は、南区で出土した。これは同区に竪穴住居跡が2軒あり、これに伴っていたものと考えられる。

遺構外から出土した土器は、文様要素・施文手法・文様構成の違いから以下のように分類した。

第 群土器 縄文時代早期の土器

A 類 白浜式に比定される土器

B 類 物見台式に比定される土器

C 類 吹切沢式に比定される土器

第 群土器 縄文時代前期の土器

A 類 早稲田6類に比定される土器

B 類 円筒下層式aに比定される土器

C 類 大木式に比定される土器

第 群土器 縄文時代中期の土器

第 群土器 縄文時代後期の土器

第 群土器 縄文時代晩期の土器

第 群土器 続縄文時代の土器

A 類 後北式に比定される土器

B 類 小坂X式に比定される土器

C 類 A類・B類どちらもいえないが
続縄文時代と考えられる土器

第 群土器 平安時代の土器

第 群土器：縄文時代早期の土器(第32図65～77、図版8)

A類 白浜式に比定される土器(第32図65・66、図版8)

〔文様〕2片とも胴部破片で、別個体である。65は、貝殻腹縁文のみである。66は、条痕文の上に貝殻腹縁文を組み合わせている。2破片とも縦位と横位に施文している。

〔胎土・焼成〕胎土に多量の細砂粒を含み、66では砂粒が露出している。焼成は良好である。

〔内面〕平滑に行っている。

〔器形〕小破片のため全体の器形を判断することはできないが、胴部から口縁部に向かって外反する尖底土器と推測される。

B類 物見台式に比定される土器(第32図67～76、図版8)

〔文様〕口縁部には沈線と刻文が施文されている。口縁部文様帯は、横位の連続性が強く、区画内には貝殻腹縁文が多数施されている。これら土器片(第32図67～69・71～76)は、物見台式でも田面木平タイプに相当する。この他にMC57グリッドで出土した、所謂明神裏式の特徴を持つ物見台式土器(第32図70)がある。これには、「く」の字状有節沈線で文様を描いており、2本の有節沈線の間には短条痕を施文している。口縁部には刻文があり、胴部上位には、3箇所方形刺突文が施されている。

〔胎土・焼成〕胎土には少量の細砂粒を含んでいる。焼成は良好である。

〔内面〕平滑に行っている。

〔器形〕乳房状尖底部(第32図69)が出土しており、胴部から口縁部に向かって外反する尖底土器と判断される。

C類 吹切沢式に比定される土器(第32図77、図版8)

〔文様〕篋状工具による斜位または横位の押し引き沈線文が施されている。

〔胎土・焼成〕胎土には少量の細砂粒を含んでいる。焼成は一般的には良好である。

〔内面〕平滑に行っている。

〔器形〕小破片のため全体の器形を判断することはできないが、類例から考え、胴部から口縁部に向かって外反する尖底土器と推測できる。

第 群土器：縄文時代前期の土器(第33～35図78～98)

A類 早稲田6類に比定される土器(第33図78～82、図版8)

〔文様〕このA類に含まれる土器は、縄文地文の上に、篋状工具または棒状工具によって、横位に沈線文が施されているもの(78・79)と沈線文のみのも(80)がある。また、篋状工具による押し引き沈線文を施したもの(81・82)もある。

〔胎土・焼成〕胎土には少量の細砂粒と繊維を含んでいる。焼成は全般的に良好である。

〔内面〕平滑に行っている。80には炭化物が付着している。

〔器形〕胴部から口縁部に向かってやや外反する尖底土器と推測できる。表館式土器や春日町式土器に極めて近い特徴を有する。

B類 円筒下層式aに比定される土器(第33～35図83～97、図版8・9)

〔文様〕地文に縄文を施したもの(84～89・91・92・97)と、地文に不整撚糸文を施したもの(83・87・93・94～96・98)がある。特に口縁部には、この後者の特徴を有するものが多い(83・87・93・94)。

胴部は地文に縄文を施しているものがほとんどであるが、羽状縄文(85・88)もある。また、底部には、網代痕が見られるもの(90)や、底面にも縄文を施し、側面に補修孔のみられるもの(97)があった。これは、外面からの穿孔であった。

〔胎土・焼成〕胎土には中量の細砂粒と繊維を含んでいる。焼成は全般的に良好である。

〔内面〕ほとんどが平滑に行っている。炭化物が付着している。

〔器形〕口縁部がゆるく外反し、口径と底径の差が比較的大きく、器高は高いと考えられる。

C類 大木式に比定される土器(第35図98、図版9)

〔文様〕胴部の小破片(98)であるが、上半に羽状縄文、下半には斜縄文が施文されている。

〔胎土・焼成〕胎土には、多量の細砂粒と少量の石英を含んでおり、表面に砂粒が露出している。焼成は不良である。

〔内面〕平滑に行っている。

〔器形〕小破片のため全体の器形を判断することはできない。

第 群土器 縄文時代中期の土器(第35図99～103、図版9)

〔文様〕99は胴部破片で口縁部に不等間隔に沈線を施し、横位の縄文を施している。100は斜位の縄文を施している。口唇部には刻み文が施されている。第33図101・102は、斜位に施文した撚糸文に細い粘土紐を貼り付けている。101は、口縁部は膨隆し、細い絡状体圧痕文が施されている。

103は、波状口縁の波頂部で、斜位に縄文を施文したあと棒状工具で沈線を施している。この沈線は、内面にも描かれている。

〔胎土・焼成〕胎土には、中量の細砂粒と少量の石英を含んでいる。焼成は良好である。

〔内面〕指頭による調整で生じた凹凸のあるものと篋状工具によって平滑にしたものの2種類が見られる。

〔器形〕小破片のため全体の器形を判断することはできないが、概ね、この時期特有の円筒上層式土器の範疇に含まれるものと考えられる。100・101は、波状口縁を呈し、底部からふくらみ、胴部上位でややくびれ口縁部に向かって外反する形状である。

第 群土器 縄文時代後期の土器(第36図104～112、図版10)

〔文様〕棒状工具による入り組み区画文を施した土器片(104)が1点出土している。また、105・106の破片は、縄文を施した後、平行沈線で区画し、内部を磨消している。107・108は平行沈線を巡らした後に、連続刺突文を充填している。109・110は同時期の底部資料である。111・112同時期の縄文を施した口縁部破片である。

〔胎土・焼成〕胎土には少量の細砂粒を含んでいる。焼成は一般的には全般的に良好である。

〔内面〕平滑に行っている。

〔器形〕小破片のため全体の器形を判断することはできないが、類例から考え、胴部から口縁部に向かって外反する深鉢型の土器と推察する。

第 群土器 縄文時代晩期の土器(第36図113、図版10)

〔文様〕注口部のみであり、無文である。

〔胎土・焼成〕胎土には、少量の細砂粒を含んでいる。焼成は良好である。

〔内面〕平滑である。

〔器形〕注口部のみ出土であり、全体の器形を判断することはできない。

第 群土器 続縄文時代の土器(第37図114～127、図版10)

A類 後北式に比定される土器(第37図114～116)

〔文様〕114・116には縦位に絡状体縄文圧痕が認められる。115は幅1.2mm程度の篋状工具で正三角形に近い形を描き、その上に絡状体縄文原体を2条押捺している。その内側には3条、外側には1条確認できる刺突文が施文されていた。

〔胎土・焼成〕胎土には、少量の細砂粒を含んでいる。焼成は良好といえる。3点ともに薄手であるがしっかりしている。115表面には炭化物が付着している。

〔内面〕平滑である。

〔器形〕小破片であり全体の器形を判断することはできない。

B類 小坂X式に比定される土器(第37図117～119、図版10)

〔文様〕3点ともに、糸ほど細い縄文を不規則ながら斜位に施文している。

〔胎土・焼成〕胎土には、少量の細砂粒と石英を含んでいる。焼成は良好であり、薄手であるがしっかりしている。

〔内面〕平滑である。

〔器形〕小破片であり全体の器形を判断することはできない。

C類 A類・B類どちらともいえないが続縄文時代と考えられる土器(第37図120～127)

〔文様〕糸ほど細い縄文を不規則に斜位または縦位・横位に施文している。

〔胎土・焼成〕胎土には、少量の細砂粒と石英を含んでいる。焼成は良好であり、薄手であるがしっかりしている。

〔内面〕平滑である。

〔器形〕小破片であり全体の器形を判断することはできない。

第 群土器 平安時代の土器(第38図128～133)

〔文様〕128・129ともに、篋ナデである。

〔胎土・焼成〕胎土には、少量の細砂粒を含んでいる。焼成は良好である。

〔内面〕平滑である。

〔器形〕128・129は土師器の甕である。130・131は土師器の杯である。132・133は底部高台であるが、胴部以上が残されておらず、推定になるが、割れ口から皿状の器と考えられる。

2 石器【第39～47図、図版11～13】

全調査区から出土した石器は、剥片などを含めて総数323点である。時代の変遷を受けて、土地造成や耕作などによって、細片となったものも多い。また、出土地点は全域に及ぶものの、出土層位が一定ではなく、1層から4層の各層で確認されていることから、前述土器群に対応する時期ごとの分別は推論の域が強くなってしまうため、ここでは器形中心に特徴を記述としたい。

石鏃(第39図134～140、図版11)

4点出土している。134・135ともに欠損があるものの二等辺三角形に近く、無茎石鏃に類する。また、136と137は有茎石鏃に分類される。4点全て二次加工を両面に施しており、剥離面が観察できたのは134のみである。

尖頭器(第39図138～140、図版11)

3点出土した。138は先端が欠損している。3点全てに二次加工を両面に施している。無茎尖頭器に分類される。

石匙(第39図141～146、図版11)

形状の違う石匙が6点出土している。141～145は、縦型であり、146は横型である。また、141と144は細身で長身である。142は台形状である。6点全てが片側に大きな二次加工痕が認められ、大きく残る剥離面が観察できる片側にも刃部を設けている。

石篋(第40図147～155、図版11)

大きさの近い9点が出土した。9点全て片側には大きな二次加工痕があり、その裏側には概ね剥離面が観察できる。また、その剥離面にも割合は大小あるものの刃部を設けるための二次加工痕が認められる。

スクレイパー(第41・42図156～172、図版12)

剥片の周縁・縁辺に連続した調整剥離が施されている。両面調整されているものと、片面調整されているものの2種類あった。

石錐(第43図173・174、図版12)

2点出土した。断面が菱形・三角形・凸レンズ状の尖頭部を持つ石器である。

石核(第43図175、図版12)

1点出土した。剥片剥離を行ったと考えられる石である。

磨製石斧(第43図176・177、図版12)

磨製石斧の中でもこの2点は、乳棒状磨製石斧に分類される。断面が楕円形であり、頭部の細い棒

状である。

石錘(第44・45図178～182、図版13)

5点の出土があった。円盤状またはそれに近い礫に、抉りを入れて錘としたもの。本遺跡から出土したもののほとんどが長軸方向にあたる部位に抉りを入れていた。

環状石製品(第45図183、図版13)

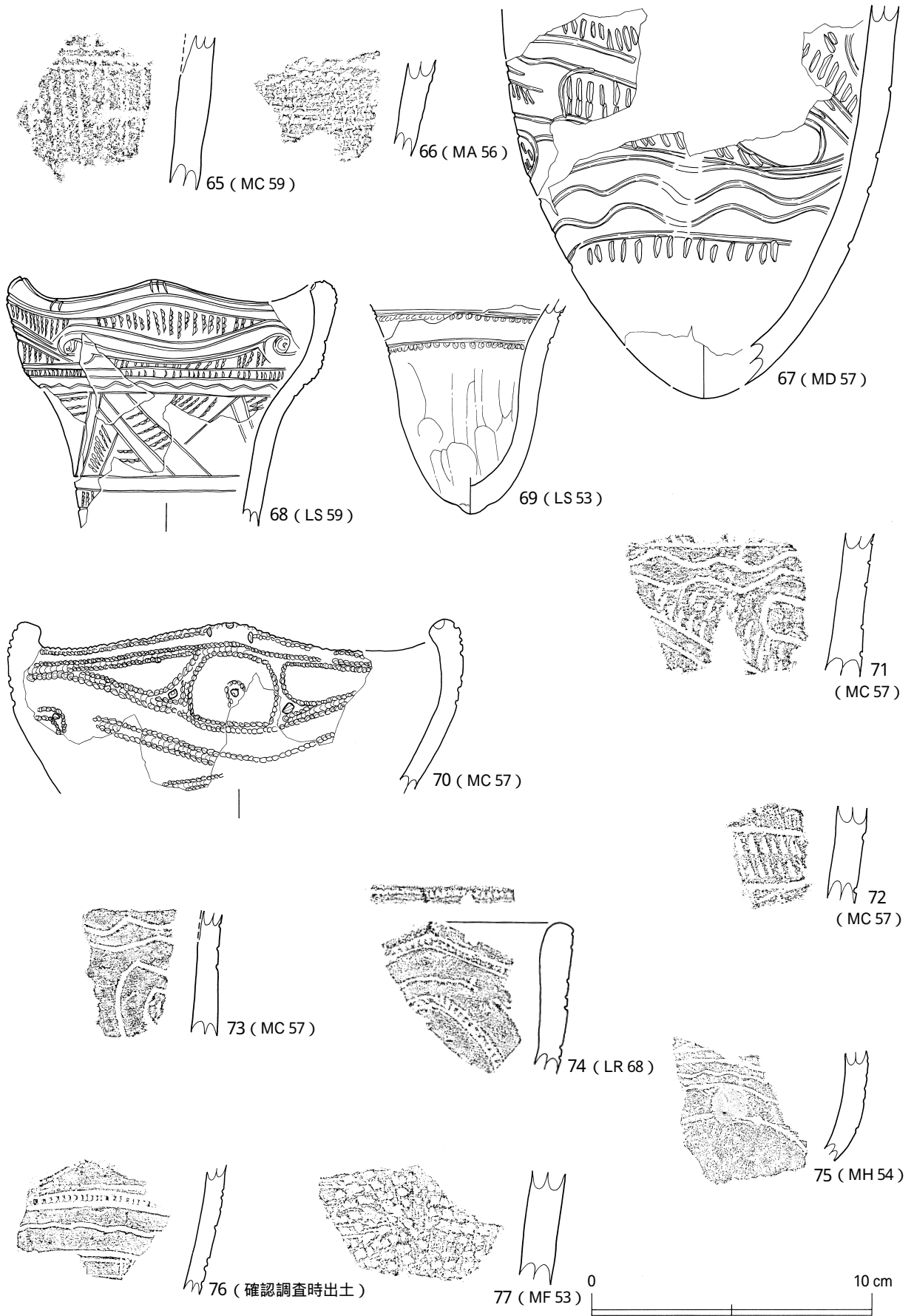
1点出土した。円盤形の周縁に刃をつけ、中心に貫通孔をもっている。東北地方から中部地方にかけて出土例があり、縄文時代早期後半から前期初頭の遺跡に多く出土する。環状石製品は、縄文時代のほぼ全時期を通じて存在し、弥生時代まで残存する。

凹み石(第45図184、図版13)

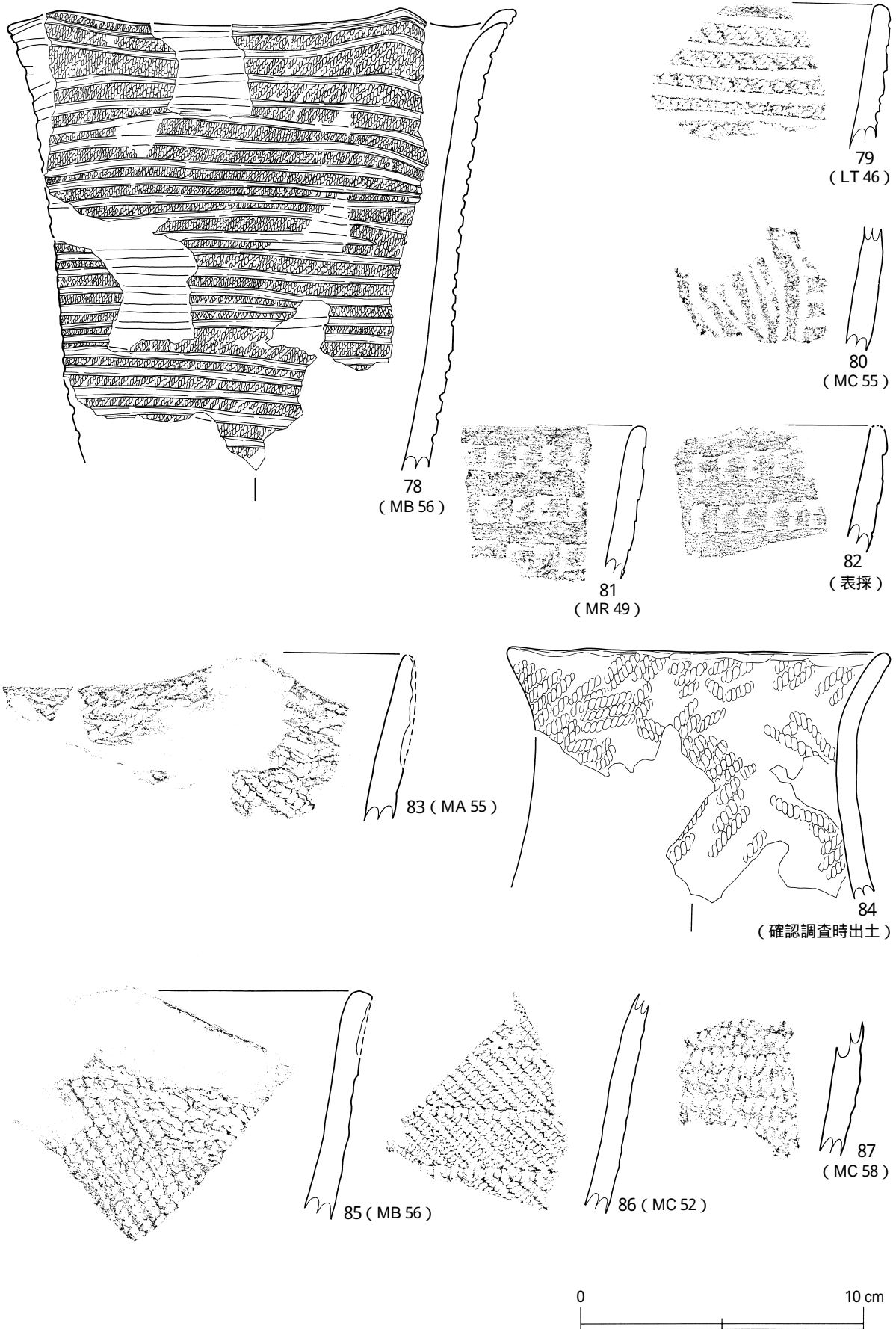
1点出土した。人工的な凹みのある礫である。長楕円形であり、両面に人工的につけられた粗い凹みがあった。

すり石(第45～47図185～194、図版13)

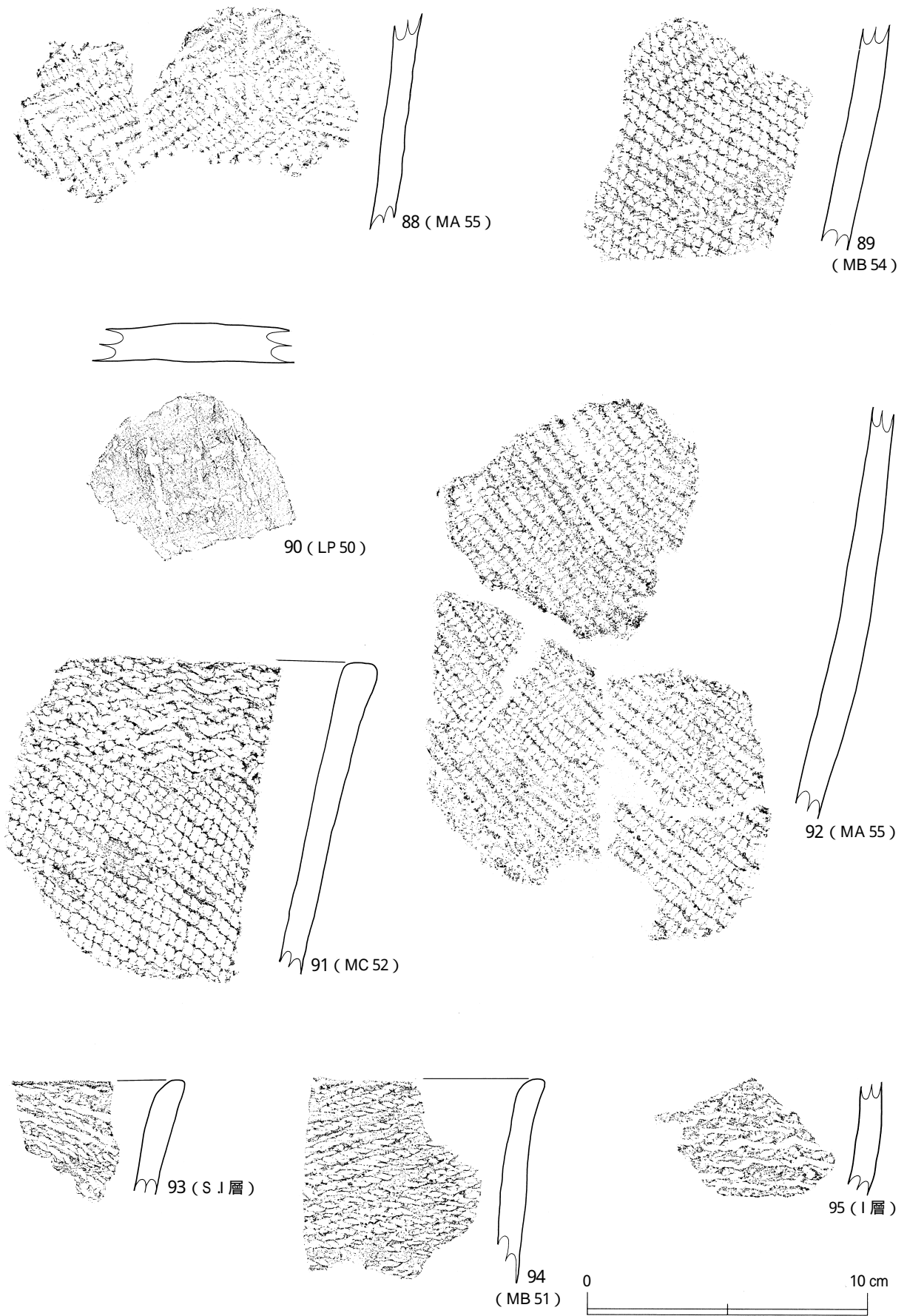
10点の出土があった。断面は全般的に三角形に近い物が多い。形状は棒状・球状・お結び形のものなど様々である。擦りが施された部位は、一部から全面におよぶものまでそれぞれである。また、一部には敲いた痕跡も認められた。



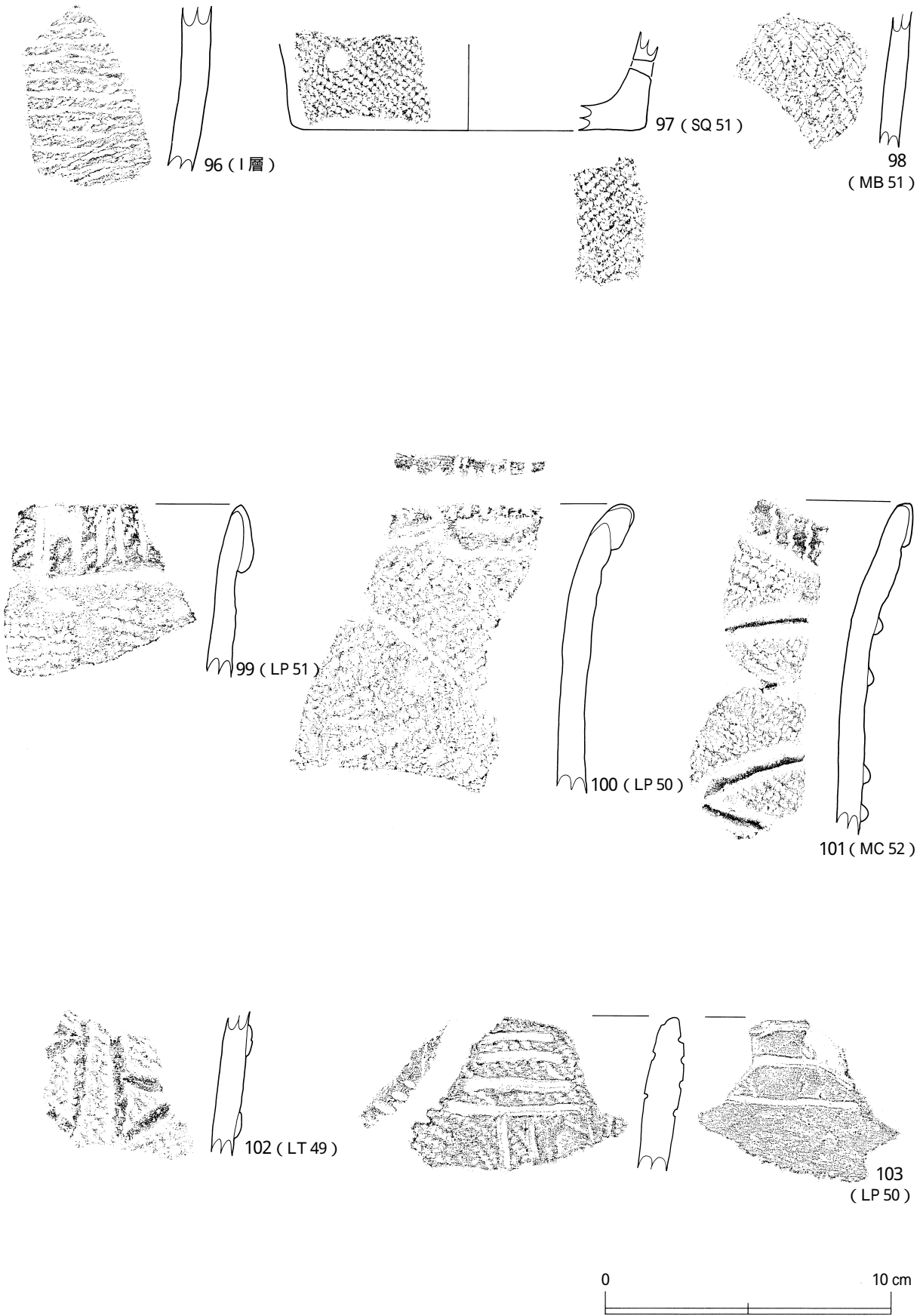
第32図 遺構外検出土器(65~77)



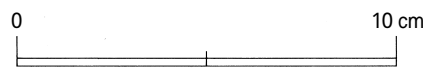
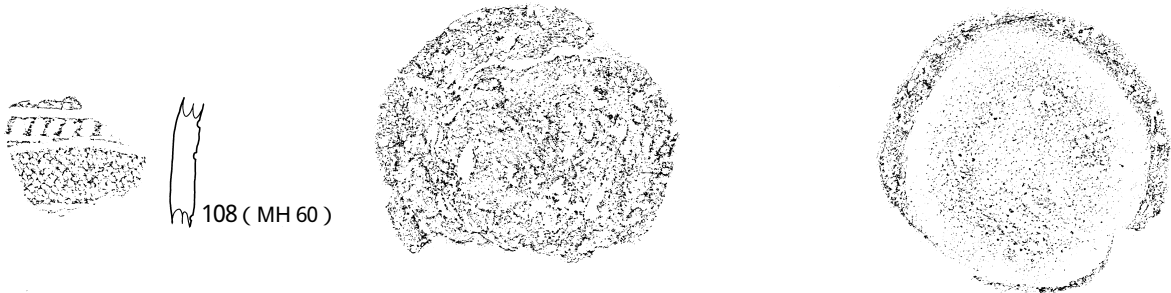
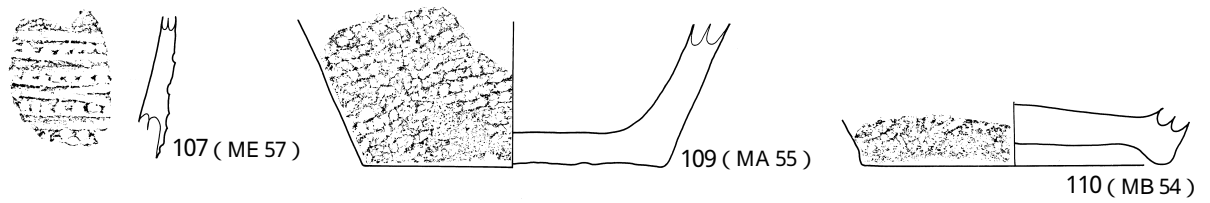
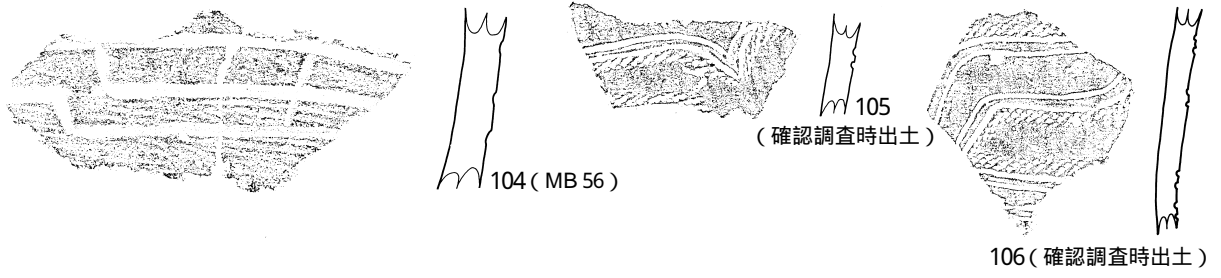
第33図 遺構外検出土器(78~87)



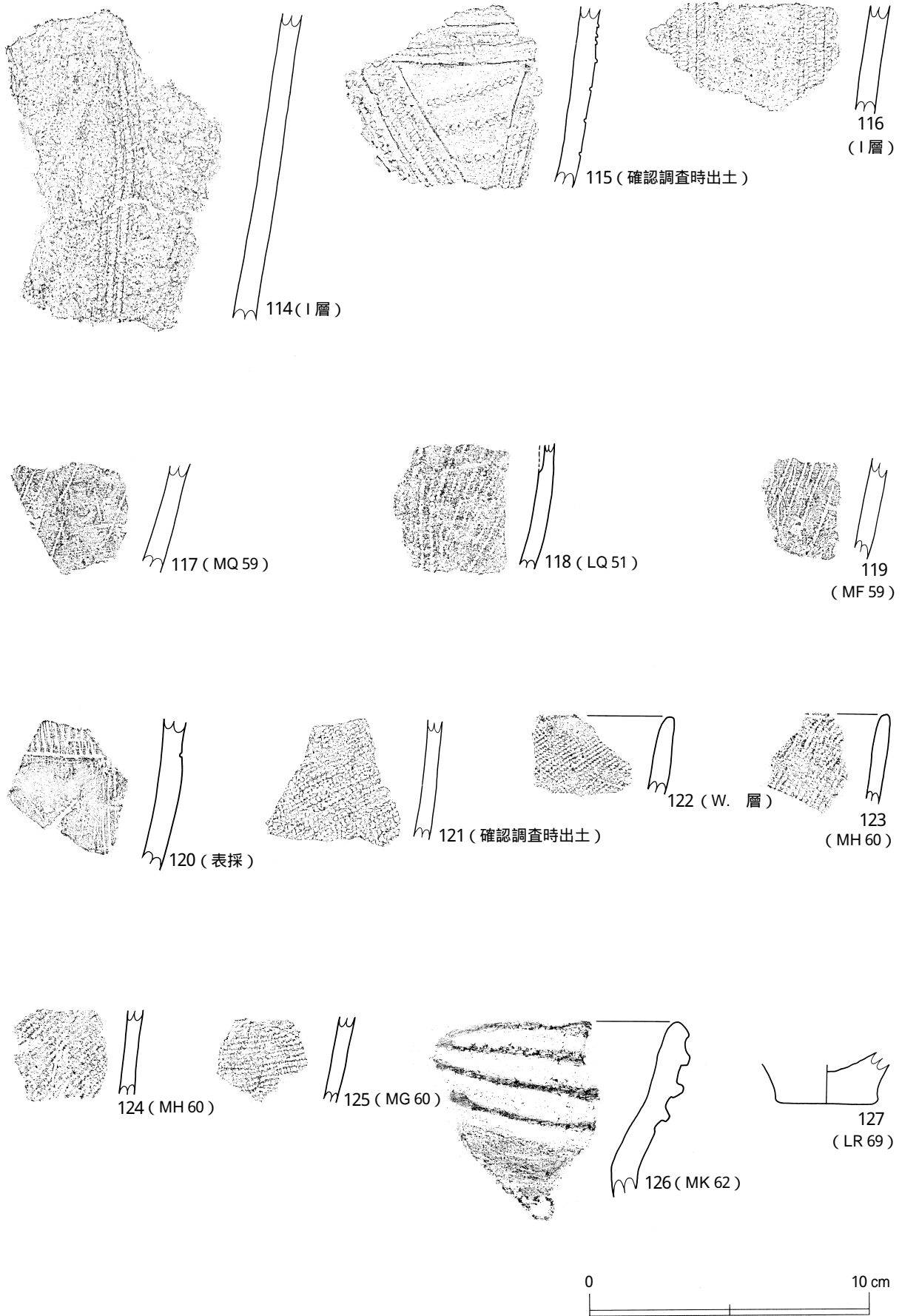
第34図 遺構外検出土器(88~95)



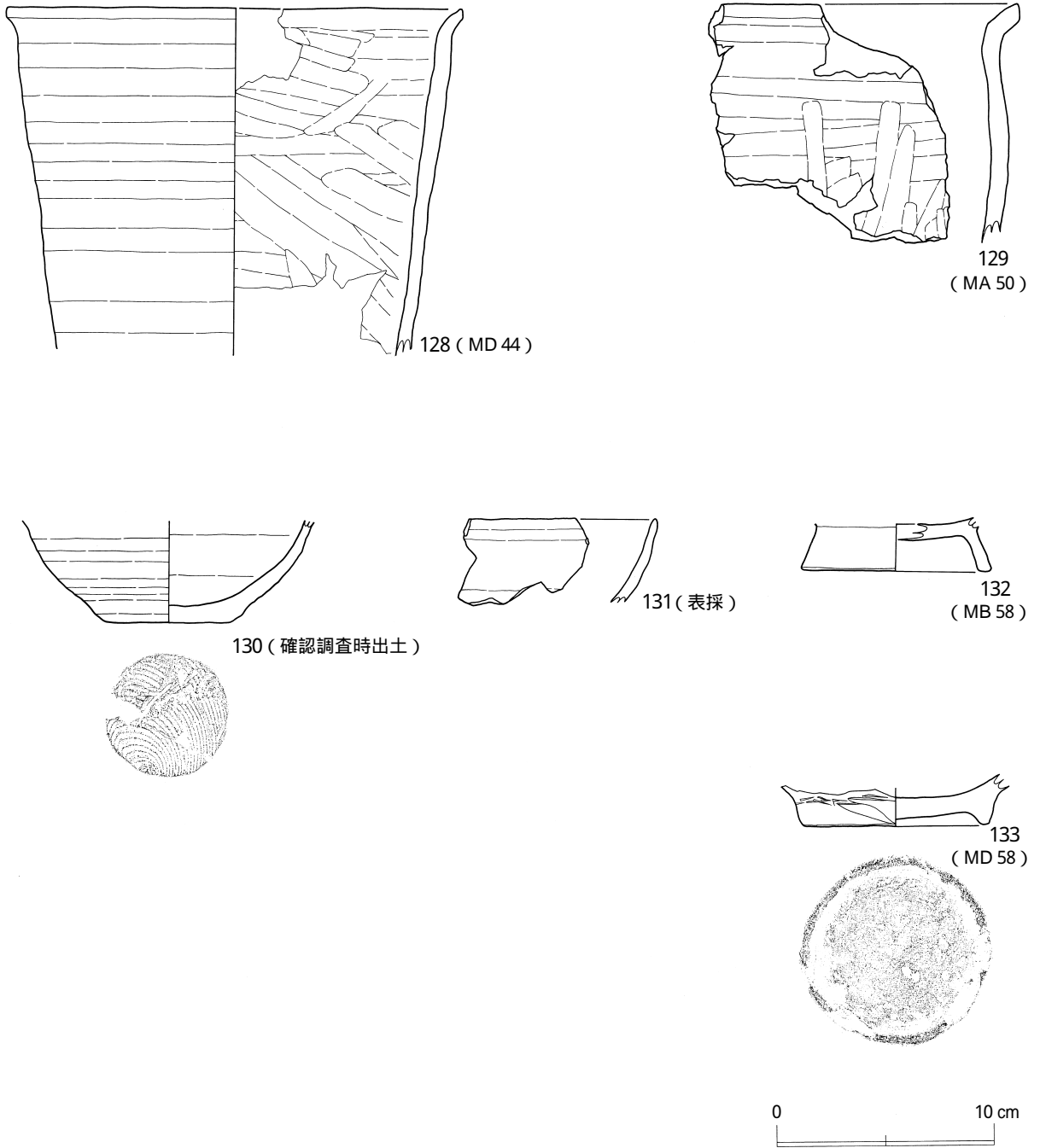
第35図 遺構外検出土器(96~103)



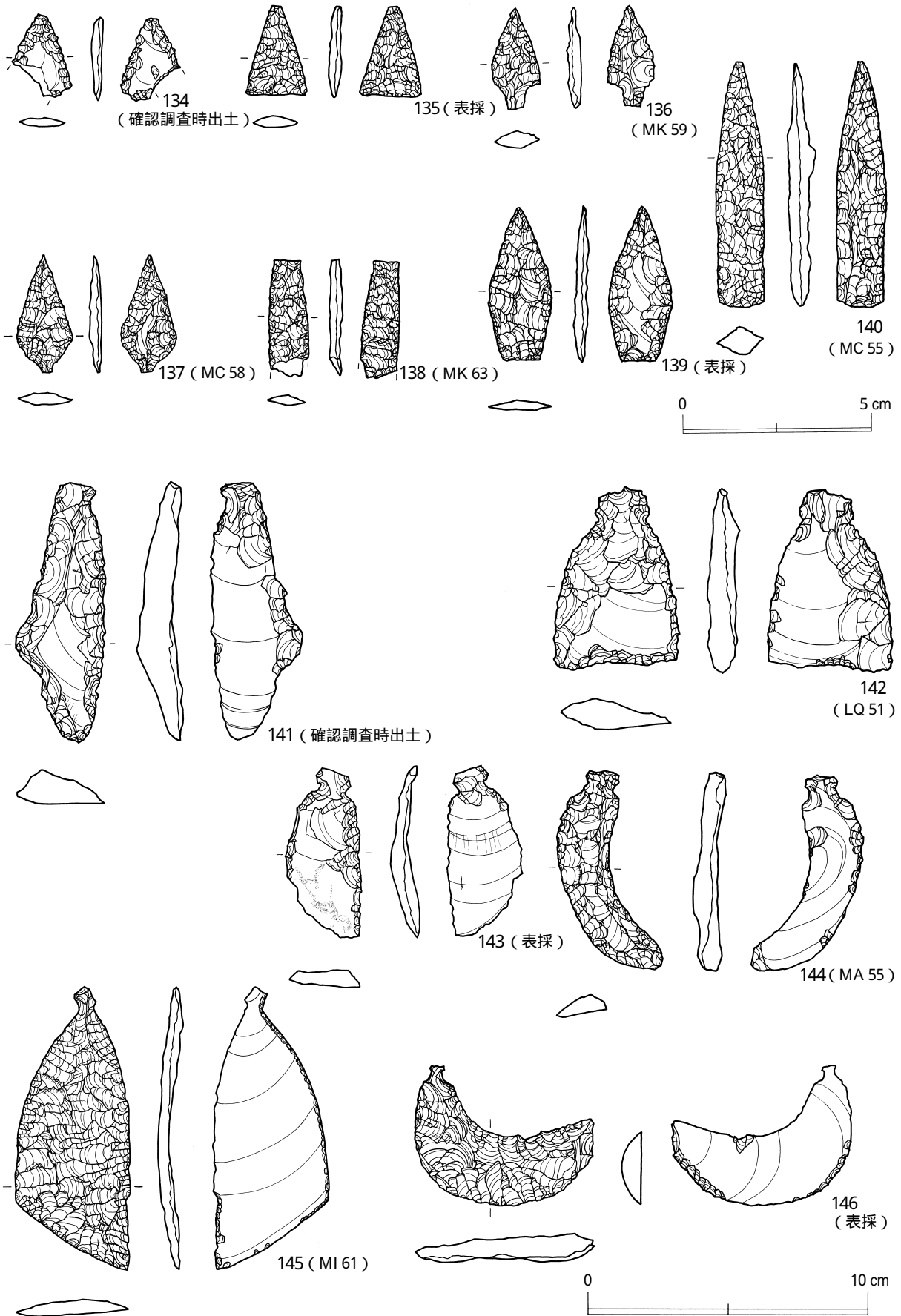
第36図 遺構外検出土器(104~113)



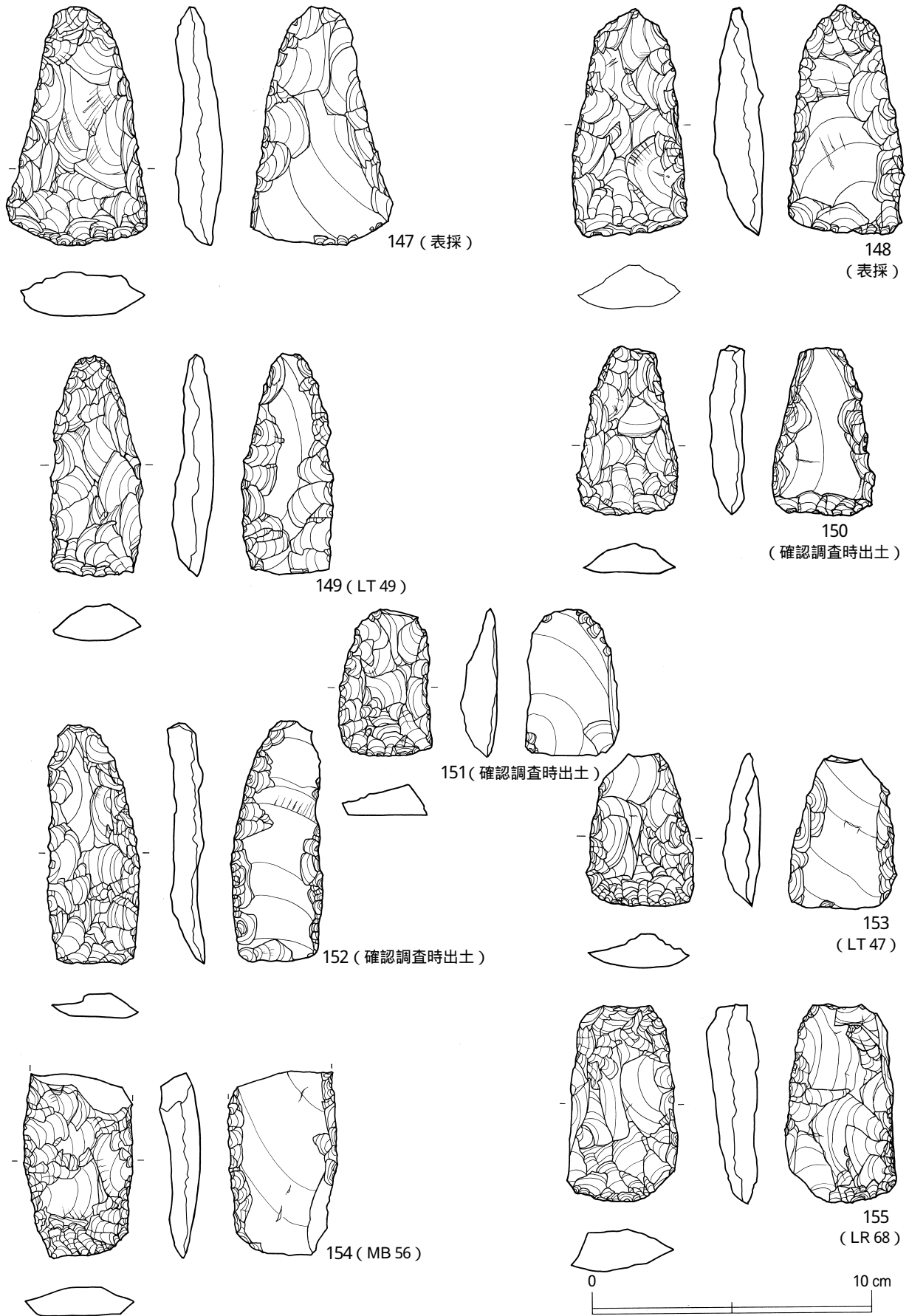
第37図 遺構外検出土器(114~127)



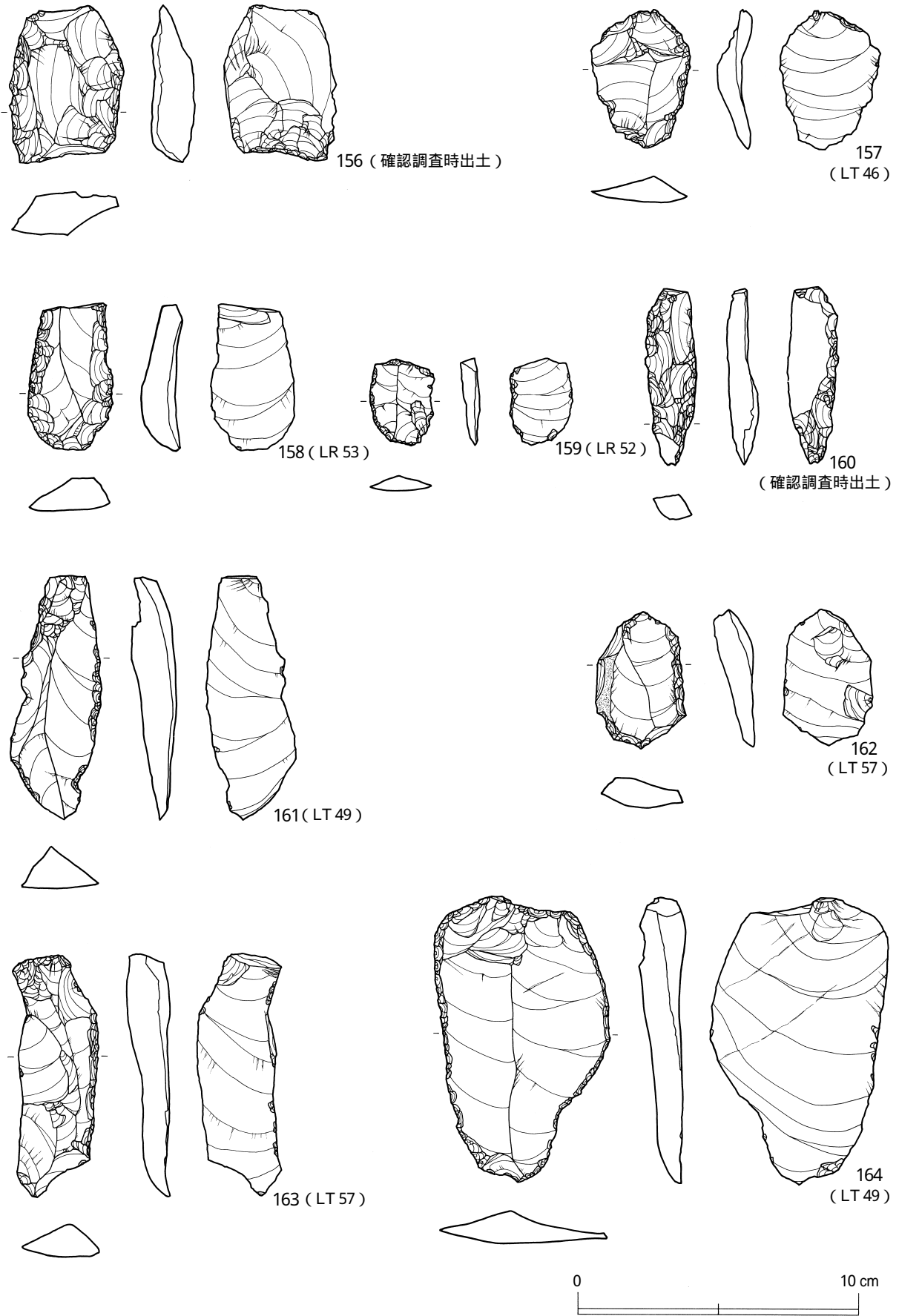
第38図 遺構外検出土器(128~133)



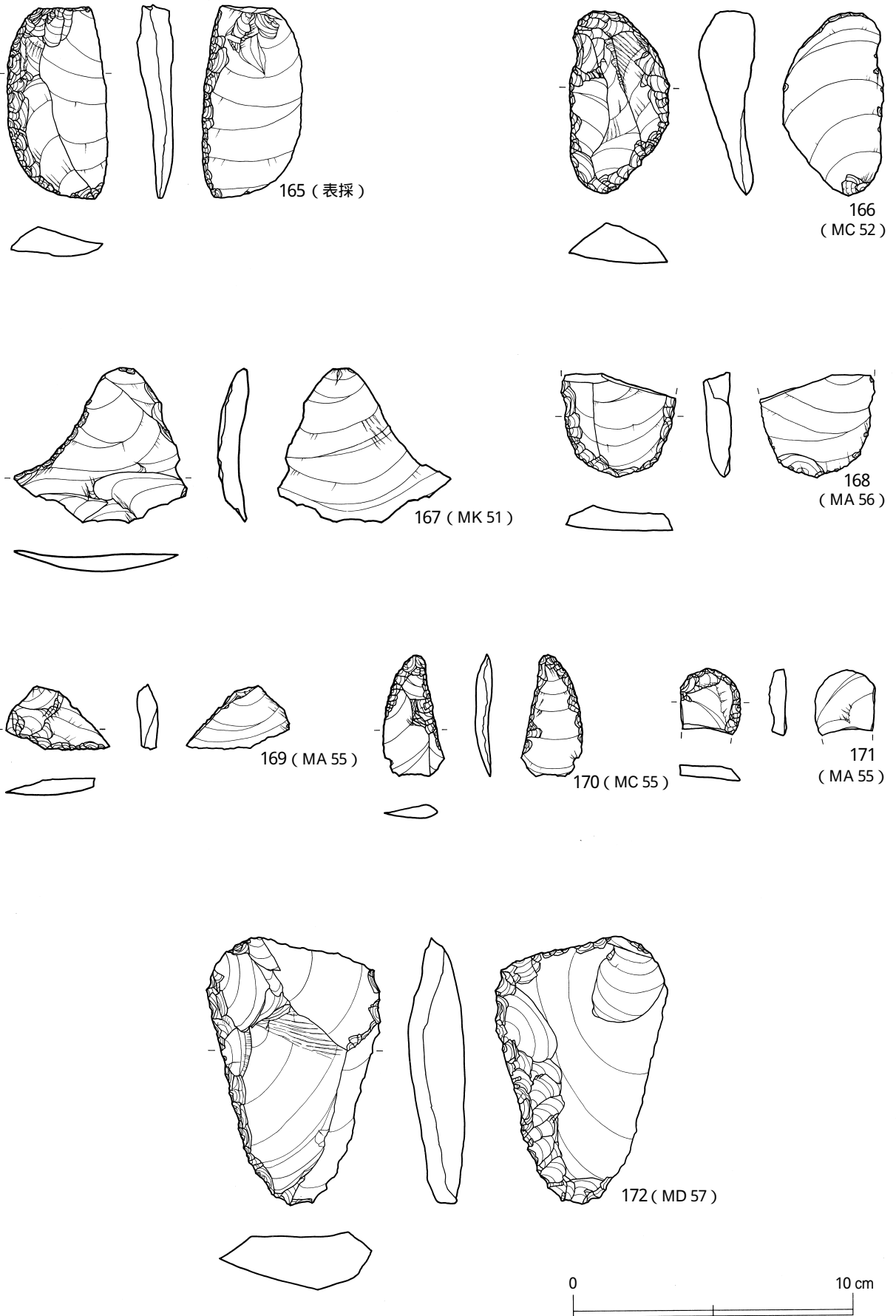
第39図 遺構外検出石器(134~146) 石鏃・尖頭器・石匙



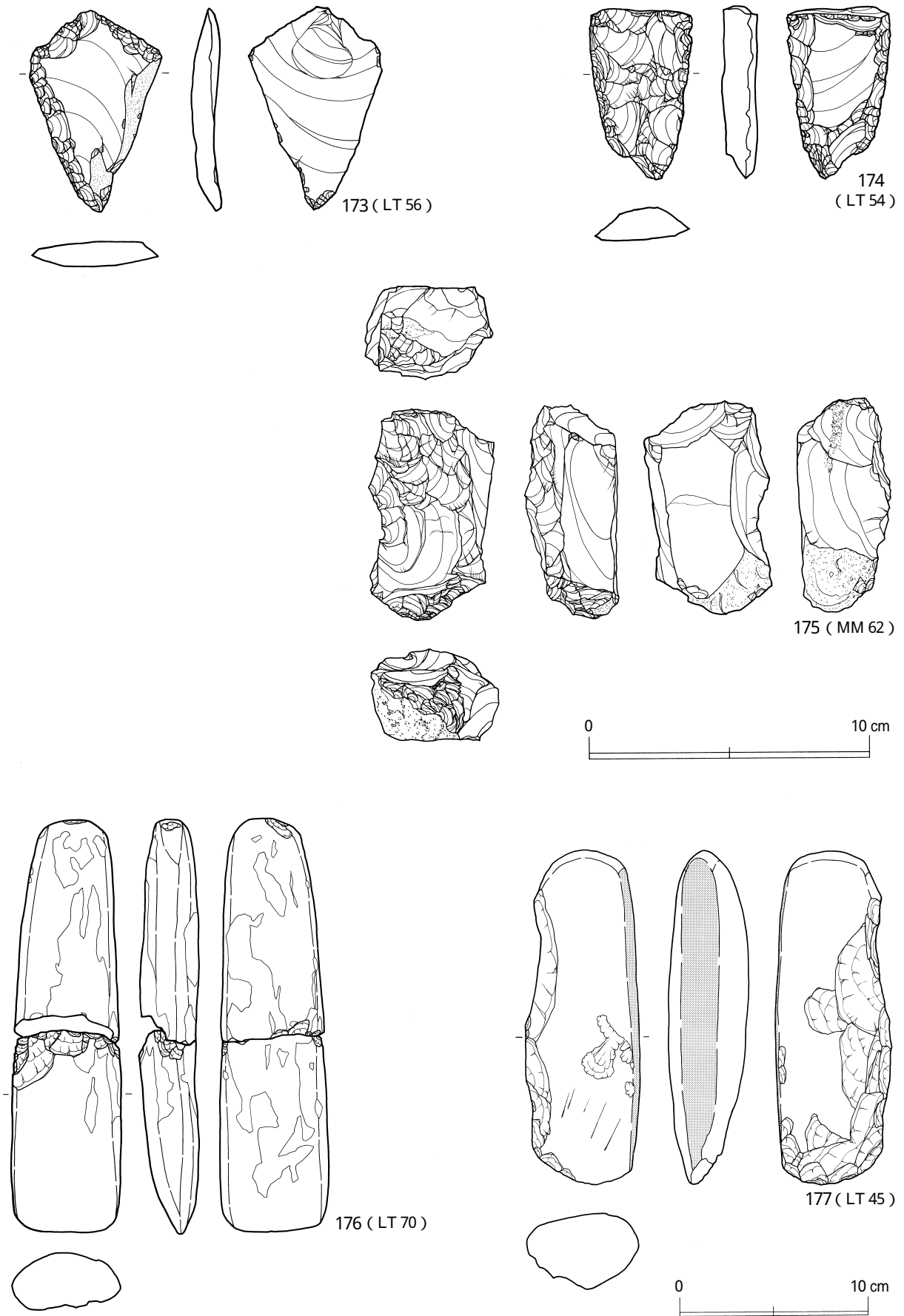
第40図 遺構外検出石器(147~155)石筴



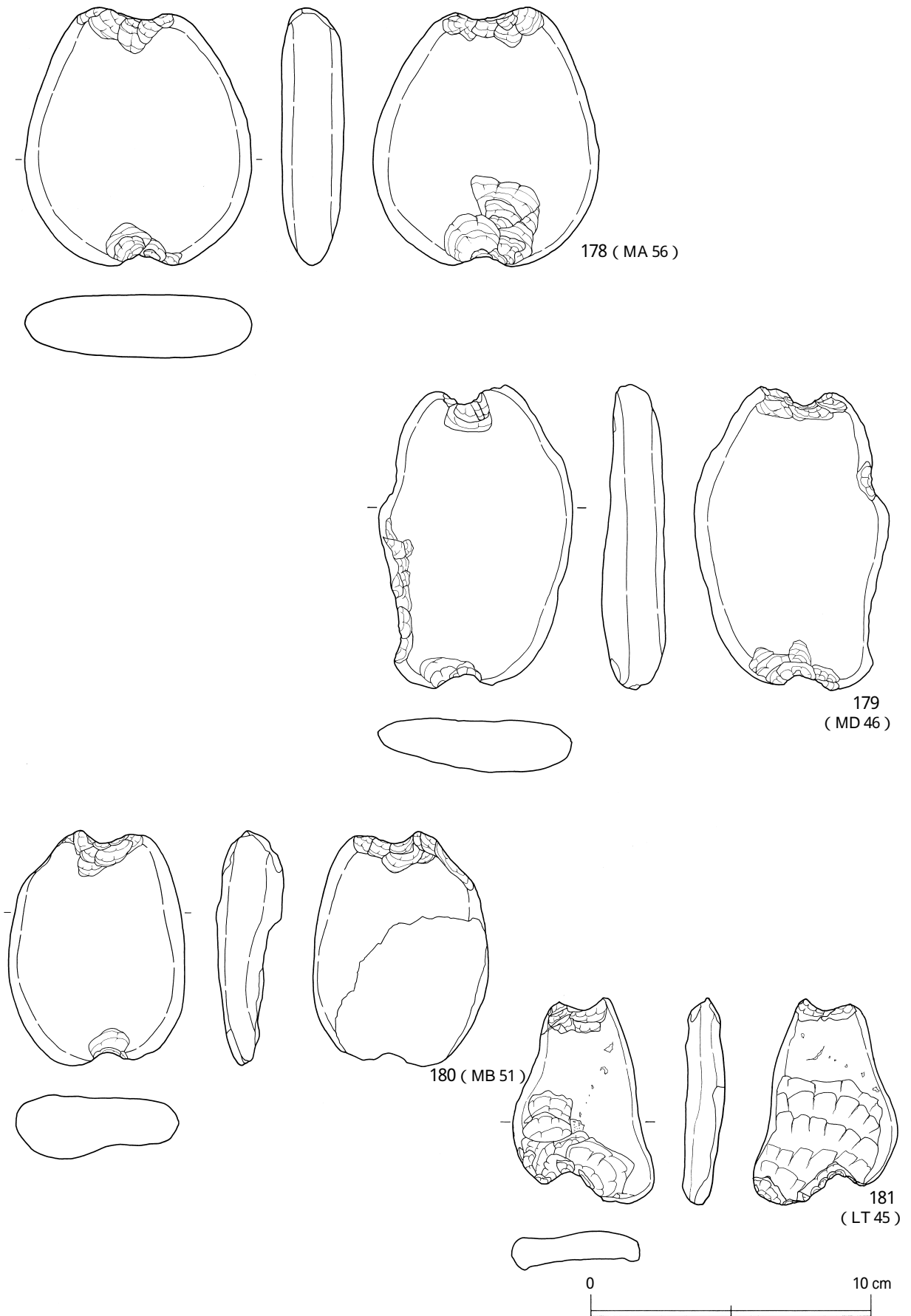
第41図 遺構外検出石器(156~164)スクレイパー



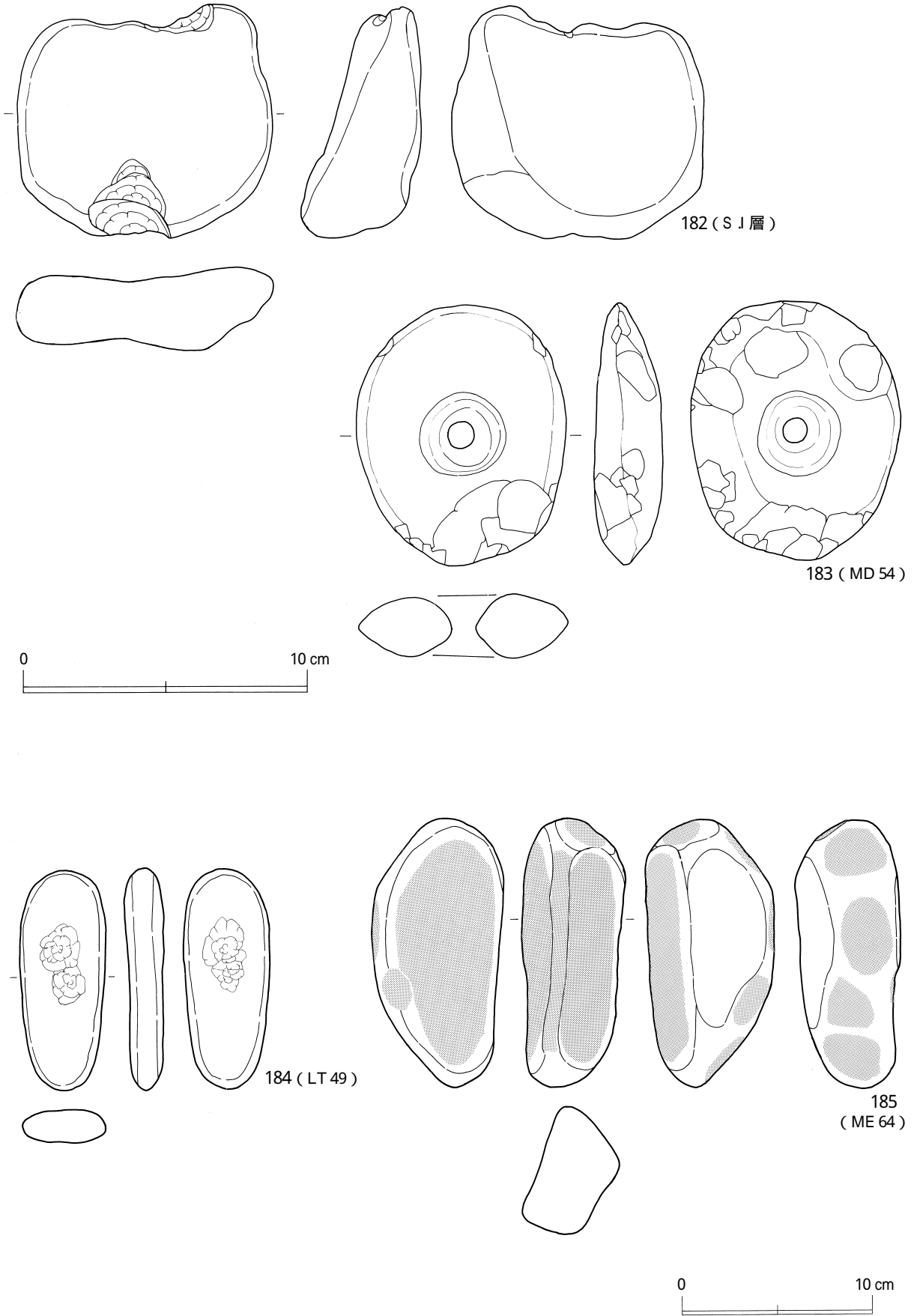
第42図 遺構外検出石器(165~172)スクレイパー



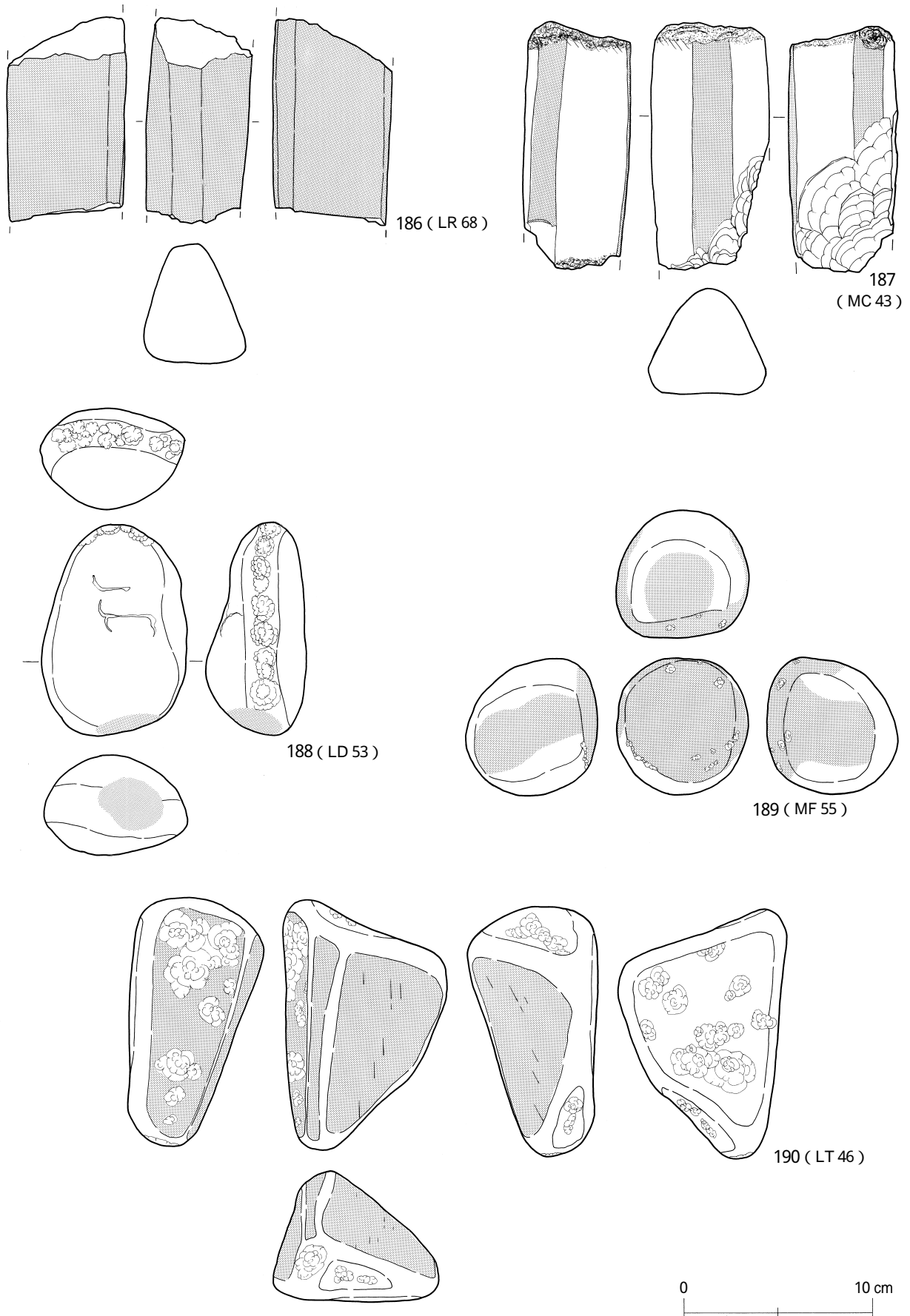
第43図 遺構外検出石器(173~177)石錐・石核・磨製石斧



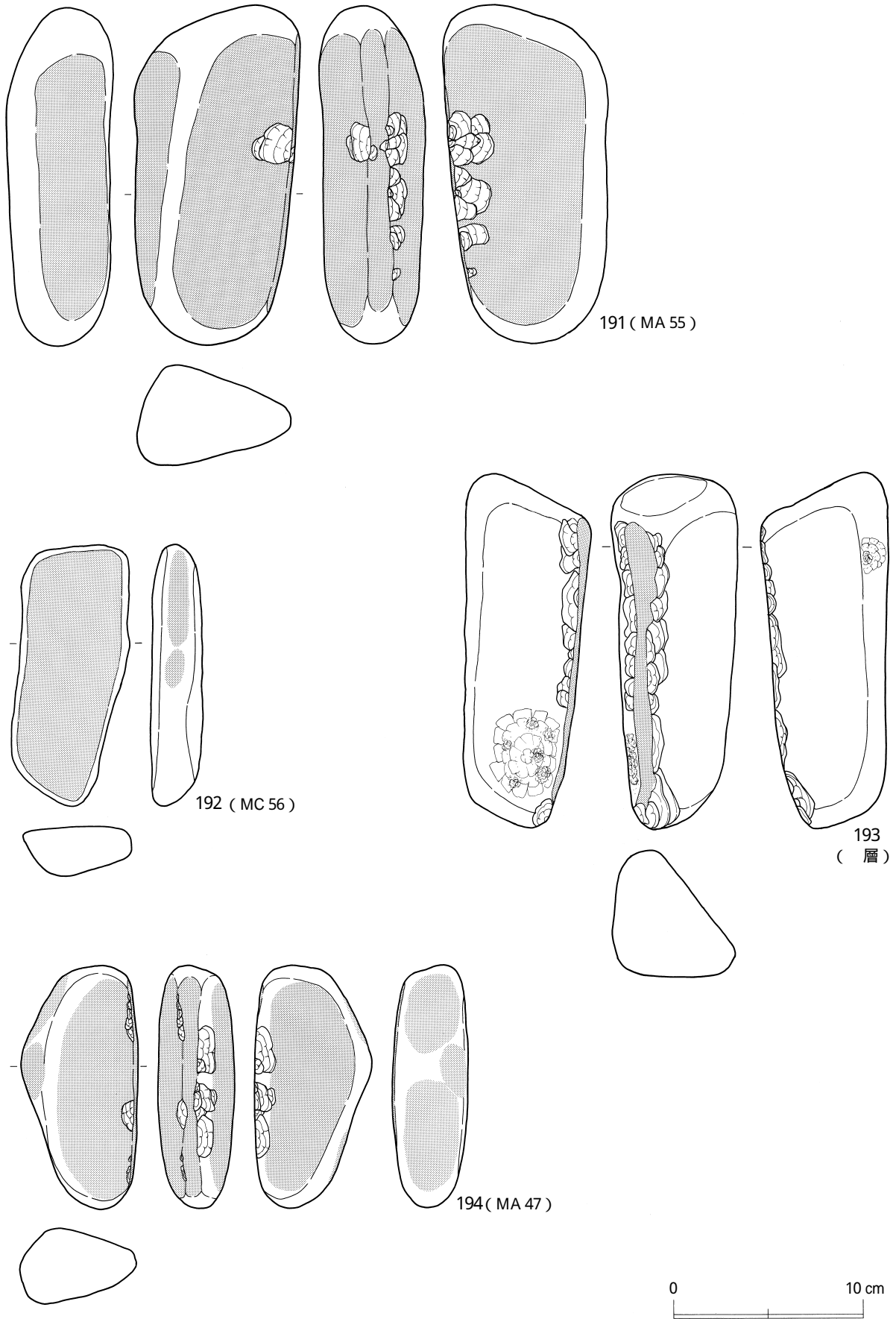
第44図 遺構外検出石器(178~181)石錘



第45図 遺構外検出石器(182~185) 石錘・環状石製品・凹石・すり石



第46図 遺構外検出石器(186~190)すり石



第47図 遺構外検出石器(191~194)すり石

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定(第5表)

山形 秀樹(パレオ・ラボ)

1. はじめに

物見坂 遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、SI 303覆土から採取した炭化材(クリ)1点、SI 310覆土から採取した炭化材(クリ)1点、SI 310 RC 32から採取した炭化材(クリ)1点、S南北ベルト北端 層十和田火山灰直下から採取した炭化材(クリ)1点、SW 202確認面から採取した炭化材(クリ)1点、SW 301確認面から採取した炭化材(クリ)1点、SW 207確認面から採取した炭化材(クリ)1点、SKF 344最下層から採取した炭化材(オニグルミ)1点、SKT 308褐色土から採取した炭化材(クリ)1点の併せて9点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

第5表に、各試料の同位体分別効果の補正值(基準値 - 25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値(yrBP)の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差(± 1)は、計数値の標準偏差に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5,730 \pm 40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 暦年代範囲のうち、その確からしさを示す確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示

した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の14C年代、p. 3-20 .

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB 3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p. 215-230 .

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000- 0 cal BP, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083 .

第2節 炭化材の樹種同定(第6表・図版14 - 1)

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

鹿角市十和田錦木に所在する当遺跡の、住居跡・窯跡・土坑などから出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

2. 炭化材樹種同定の方法

試料中の異なる種類と推定された破片を調べた。樹種同定は、炭化材の3方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大して材組織を観察し同定した。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柁目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T 100型)で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

9試料すべてからクリが検出され、試料8からはクリと共にオニグルミも検出された。住居跡(SI)・窯跡(SW)・土坑(SK)など異なる性格の遺構からクリは検出され、非常に多用されていた事が判る。

以下に同定の根拠とした材組織の特徴を記載する。

オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura クルミ科 図版14 - 1 1a-1c(炭化物 SKF 344 最下層)

単独あるいは2~3個が主に放射方向に複合した中型の管孔が徐々に径を減じながら散在し、接線状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、膜状のチロ-スが顕著ある。放射組織はほぼ同性または上下端部に方形細胞がある異性、3細胞幅が多い。

暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木で、種子は食用になり、材は加工しやすく狂いが少ない。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版14 - 1 2a-2c(炭化物)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し、除々に径を減じるものや急に径を減じるものがあり、晩材は非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロ - スがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

第3節 火山灰分析(第7～10表・図版14 - 2)

黒澤 一男(パレオ・ラボ)

1. 試料と分析方法

秋田県北東部に位置する鹿角市の物見坂 遺跡から採取された試料5点(SD 103覆土, SI 303覆土, 層上位, 中位, 下位)を用いて以下の分析をおこなった。なお, 軽石試料2点(SD 103覆土とSI 303覆土)については, 粉末状にし付着した汚れを超音波洗浄により除去した後に, 以下の分析(テフラ鉱物組成分析の と は除く)をおこなった。

(1)テフラ鉱物組成分析

各試料について約40g程度秤量し, 分析試料とした。

1 (0.5mm : 30メッシュ), 2 (0.25mm : 60メッシュ), 3 (0.125mm : 120メッシュ), 4 (0.063mm : 250メッシュ), の4枚のふるいを重ね, 流水下で電磁式フルイ振とう機を用いて, 湿式ふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について, それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらわし, 試料の乾燥重量中における粒径4 μ m以上の砂粒分の重量%を含砂率とした。

4の残渣(粒径0.125～0.063mm)については, 重液(テトラプロモエタン, 比重2.96)を用いて重鉱物(有色鉱物)と軽鉱物(無色鉱物)に分離した。

分離した重鉱物, 軽鉱物それぞれについて封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。それらを偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定, 計数し, 重鉱物, 軽鉱物組成を求めた。重鉱物はカンラン石, イディングサイト(カンラン石が水の影響をうけて変質した鉱物; 町田ほか, 1983), 斜方輝石(主にしそ輝石), 単斜輝石(主に普通輝石), 角閃石(ホルンブレンド), 磁鉄鉱(チタン鉄鉱も含む), 不透明鉱物(その他の不透明粒子を含む)に分類した。軽鉱物は火山ガラスと長石, 石英に分類した。なお, 軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので, 計数の対象から除いた。また, 軽鉱物中の火山ガラスの形態については, 町田・新井(1992)の分類基準に従い形態分類をおこなった(第7表)。

(2)屈折率測定

火山ガラスの屈折率については, 横山ほか(1986)の方法に従って, 温度変化型屈折率測定装置(RIMS 86)を用いて屈折率(n)を測定し, その結果を範囲(range)であらわした。

2. 結果

物見坂 遺跡において鉱物組成分析，屈折率測定をおこなった結果を以下に述べる．

(1)テフラ組成分析(第8・9表)

堆積物中の砂粒分の割合(含砂率)は，層において下位ほど高い値を示す．

砂粒分の粒度組成は，3試料とも1 残渣がおよそ50%以上となり，下位ほど高い値を示す．

重・軽鉱物比については，軽鉱物がおよそ80%以上を占める．その中で層中位と上位は重鉱物が20.6，17.5と高い値を示す．

重鉱物は，斜方輝石，磁鉄鉱，単斜輝石，角閃石からなる組成となり，5試料とも近似した組成を示す．斜方輝石は5試料とも40%以上と最も高い含有率を示す．磁鉄鉱は24～40%と斜方輝石に次いで高い値を示す．単斜輝石は12～25%の含有量である．角閃石の含有率は2.4%以下の値を示す．カンラン石やイディングサイトは確認されなかった．

軽鉱物は，73%以上が火山ガラスである．

火山ガラスの形態は，スポンジ状の軽石型が多く，軽鉱物中の半分以上(52～76%)を占める．また，次いで繊維状軽石型が見られる．

(2)屈折率測定(第10表)

測定した5試料の結果は，SD 103覆土の屈折率は範囲1.5007 - 1.5039，平均1.5025，SI303覆土の屈折率は範囲1.5014 - 1.5041，平均1.5026，層上位の屈折率は範囲1.5006 - 1.5044，平均1.5025，層中位の屈折率は範囲1.5018 - 1.5046，平均1.5033，層下位の屈折率は範囲1.5006 - 1.5058，平均1.5039となり，およそ範囲1.500 - 1.505，平均1.503～1.504とやや近似した値を示す．

3. 堆積物中の指標テフラ

今回の分析により物見坂 遺跡において検出されたテフラについて，その特徴と噴出起源及び年代について述べる．

【To-a：十和田 a 火山灰】

SD 103覆土，SI 303覆土，層上位は，火山ガラスの形態とその屈折率の値から十和田 a 火山灰 (Towada-a：To-a；大池，1972)と考えられる．火山ガラスの形態が軽石型からなることと，火山ガラスを用いた屈折率測定結果は範囲1.496 - 1.504，平均1.503となり，従来の十和田 a 火山灰の値(範囲1.496 - 1.504；町田・新井，1992)と重なることから，To-aに同定される．

To-aは東北の十和田カルデラを噴出源とし，東北地方のほぼ全域に分布している．また，噴出時代は，古文書から西暦915年(平安時代前期)であると考えられている(町田ほか，1981)．

また，層中位と下位について火山ガラスの屈折率値はほぼ前述の3試料と近似しているが，少々平均が高い値にずれているが，火山ガラスの形態は前述の3試料と同様であることも含め，前述の3試料と同様にTo-aに同定されることが考えられる

4. まとめ

物見坂 遺跡においてテフラ分析をおこなった結果，指標テフラとして，平安時代前期(西暦915年)に噴出した十和田 a 火山灰 (To-a)とTo-H(十和田八戸火山灰)が認められた．

引用文献

町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」．東京大学出版会，277p．

町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981)日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，562 - 569．

町田 洋・村上雅博・斎藤幸治(1983)南関東の火山灰中の変質鉱物 "イディングサイト" について．第四紀研究，22，69 - 76．

大池昭二(1972)十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，228 - 235．

横山卓雄・檀原 徹・山下 透(1986)温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究，25，21 - 30．

第4節 植物珪酸体分析(第11・12表・図版14 - 3)

鈴木 茂(パレオ・ラボ)

イネ科植物は別名珪酸植物ともいわれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。この吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積し形成されたものを植物珪酸体(機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体)と言い、これについては藤原(1976)や藤原・佐々木(1978)など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。こうしたことから物見坂 遺跡において採取された土壌試料について植物珪酸体分析を行い、得られた植物珪酸体から遺跡周辺のイネ科植生について検討した。

1．試料と分析方法

分析用試料はSK 343下層(試料番号15)、SK 344最下層(試料番号16)およびSI 303内カマド周辺付近(試料番号17)より採取された3試料である。各試料について簡単に記すと、試料15は黒色土壌、16は黒灰色の土壌、17は黒褐色の砂混じり土壌である。植物珪酸体分析はこれら3試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をト - ルビ - カ - にとり、約0.02gのガラスビ - ズ(直径約40μm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザ - による試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラ - トを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビ - ズが300個に達するまで行った。

2．分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビ - ズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め(第11表)、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、試料17よりイネが検出され、約12,000個とやや多い検出個数を示している。また同試料からは他にクマザサ属型やヨシ属、キビ族、ウシクサ族などが得られているが、他の試料に比べかなり低い検出個数を示している。試料15, 16ではクマザサ属型が非常に多く、いずれも300,000個を越えている。次いでウシクサ族が多く、キビ族も20,000個を越えている。ヨシ属は試料15で10,000個を越えており、同試料からはシバ属も得られている。

3．遺跡周辺のイネ科植物

上記したように、試料15, 16ではクマザサ属型が非常に多く、遺跡周辺にはクマザサ属型のササ類、すなわちチシマザサやチマキザサといったササ類が分布を広げていたとみられる。これらササ類は森林の下草的存在で生育していたと考えられる。一方次いで多いウシクサ族は日の当たる開けたところでの生育が考えられ、ススキやチガヤといったウシクサ族が遺跡周辺の空き地や森林の林縁部などに

群落を形成していたと推測される。またキビ族も20,000個を越えており、珪酸体の生産量が少ないキビ族としては比較的多く得られている。このキビ族についてはその形態からアワ・ヒエ・キビといった栽培種であるのかイヌビエ・エノコログサなどの雑草類であるのか分類が難しいのが現状である。ちなみに雑草類とすると先のウシクサ族に加え、ネザサ節型のササ類やシバ属とともに遺跡周辺において草地的景観を見せていたと考えられよう。

試料15からはヨシ属も比較的多く検出されており、他の2試料からも少ないながら得られている。よって遺跡周辺にはヨシ属(ヨシ・ツルヨシなど)が生育できる湿地や地下水位の高いところの存在も予想される。

試料17からはイネが検出されている。試料は住居内のカマド周辺より採取された土壌であることから、稲藁がカマドにおいて着火材などとして焼かれた結果、その灰がカマド周辺の土壌内に混入したことが考えられる。よってこの時期物見坂遺跡においてイネが存在していたといえるが、栽培していたかどうかについては言及できない。

引用文献

藤原宏志(1976)プラント・オパ・ル分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 - . 考古学と自然科学, 9, p.15 - 29.

藤原宏志・佐々木彰(1978)プラント・オパ・ル分析法の基礎的研究(2) - イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状 - . 考古学と自然科学, 11, p.9 - 20.

第5節 花粉化石群集(第13表・図版14-4)

新山 雅広(パレオ・ラボ)

1. はじめに

物見坂遺跡は、秋田県鹿角市十和田錦木字下野2-2外に所在する。本遺跡では、これまでの発掘調査により、縄文時代早期から10世紀前後の遺物が検出されている。ここでは、本遺跡周辺の古植生を明らかにする一端として花粉化石群集の検討を行った。

2. 試料と方法

花粉化石群集の検討は、試料18~20の合計3試料について行った。試料18(土壌)は黒褐色シルトでSKF 343下層より採取された。試料19(土壌)は黄灰色シルトでSKF 343最下層より採取された。試料20(土壌)は黄灰色シルトでSKF 344中層より採取された。なお、試料19については大型植物化石の検討も行われた。

花粉化石の抽出は、試料約2~3gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。なお、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別

が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。また、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3. 花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉 8、草本花粉 5、形態分類で示したシダ植物孢子 2 である。以下に、各試料の花粉化石群集の記載を示す。

試料18(土壌、SKF 343下層): 産出したのはハンノキ属 1 個体のみであった。

試料19(土壌、SKF 343最下層): 産出したのはサワグルミ属 - クルミ属とクリ属が 1 個体ずつであった。

試料20(土壌、SKF 344中層): 産出したのは樹木では、クルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、ニレ属 - ケヤキ属、キハダ属、トチノキ属であり、トチノキ属はやや目立った。草本では、イネ科、マメ科、ヨモギ属、他のキク亜科、タンポポ科であった。

4. 考察

検討した結果、いずれの試料も十分な花粉化石が産出せず、古植生の推定は困難である。試料20では、他試料に比べると多少花粉化石が保存されていたが、樹木で産出したのはいずれも落葉広葉樹であった。周辺に落葉広葉樹林が成立しており、やや目立った虫媒花のトチノキ属は遺跡の比較的近辺に生育していた可能性は考えられる。なお、検討した試料は十分な花粉化石が保存されていなかったが、花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、花粉化石が殆ど産出しないことから、試料とした堆積物は水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。試料とした堆積物は、おそらく土壌のような酸化的な条件下で堆積したものと思われ、そのために、花粉化石は保存されず、ブレパルト状況に示したように主に炭化物片(燃烧により炭化した植物片)のみが残ったのであろう。

第6節 炭化種実 (図版14 - 5)

新山 雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

物見坂 遺跡は、秋田県鹿角市十和田錦木字下野 2 - 2 外に所在する。本遺跡では、これまでの発掘調査により、縄文時代早期から10世紀前後の遺物が検出されている。ここでは、本遺跡での食生活 (栽培・利用状況) を明らかにする一端として炭化種実の検討を行った。

2. 試料と方法

炭化種実の検討は、試料21、22の 2 試料について行った。試料21(土壌) は黄灰色シルトでSKF 343最下層より採取された。試料22(土壌) は暗灰黄色砂礫混じりシルトでSI 303カマド周辺付近より採取された。なお、試料21は花粉化石群集の検討も行われた。

炭化種実の採集は、0.25mmおよび2mm目の篩を用いて水洗篩い分けを行い、肉眼および実体顕微鏡下で残渣から拾い上げた。処理量は、試料21は818.6g、試料22は8.8kgである。

3. 結果および若干の考察

試料21は炭化種実を全く含んでいなかった。試料22はイネ炭化胚乳 (5 個体)、キビ炭化胚乳 (10 個体)、アワ近似種炭化胚乳 (4 個体)、コムギ炭化胚乳 (14 個体)、オオムギ炭化胚乳 (3 個体)、ムギ類炭化胚

乳(破片1個体)を出土した。これらは、いずれも栽培植物と考えられ、本遺跡での食生活の一端を知ることができた。個数がさほど多くないので、明らかなことではないが、キビ族ではアワよりもキビ、ムギではオオムギよりもコムギの方がより一般的であったのかもしれない。

4. 形態記載

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

長さ約4.3~5.9mm、幅約2.8~3.3mm。

コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

丸こく、楕円形ないしほぼ円形。厚みがあり、断面も楕円形ないしほぼ円形。欠損で大きさの不明なものの一部あったが、長さ約3.4~5.2mm、幅約2.1~3.1mm。

オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

コムギに比べて細長く、菱形に近い楕円形。長さの割に厚さが薄く、下端がやや尖り気味となる。長さ約4.1~5.3mm、幅約2.0~3.2mm。なお、ムギ類としたものは、破片であり、コムギともオオムギとも区別し得なかった。

キビ *Panicum miliaceum* Linn. 炭化胚乳

ヒエ、アワに比べて大きく、先端は尖り気味となる。胚部分の長さは果長の約1/2程度。欠損で大きさの不明なものの一部あったが、長さ約1.8~2.9mm、幅約1.3~1.7mm。

アワ近似種 cf. *Setaria italica* Beauv. 炭化胚乳

キビよりも一回り小さく、長さと同程度であり、先端部はやや平らな円形で中央部がややへこむ場合もある。アワは、胚部分の長さは果長の2/3程度で臍は幅が狭く細長い楕円形である。出土したものは、欠損で胚部分、臍のいずれかが不明瞭であるが、外形もあわせておそらくアワと思われる、アワ近似種とした。長さ1.5mm前後、幅1.3mm前後。

参考文献

吉崎昌一(1990) 北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体。北海道恵庭市発掘調査報告書, pp. 104 - 113.

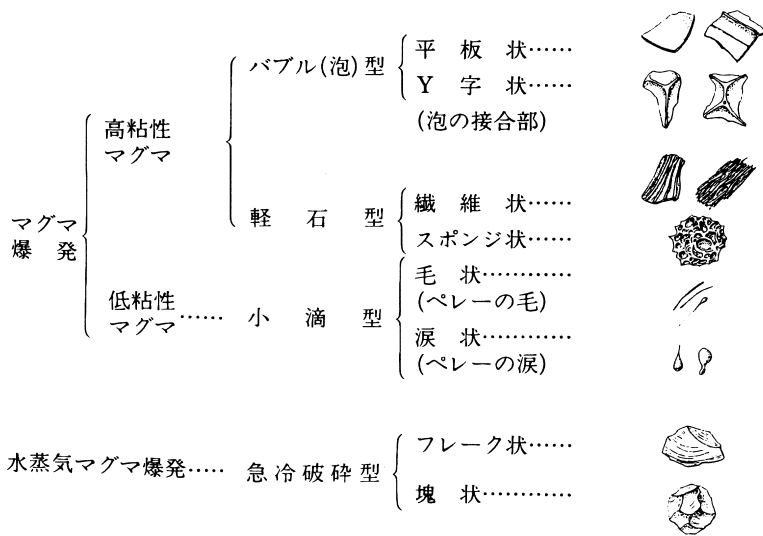
第5表 放射性年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1404 (AMS)	炭化物 No.1 (クリ) SI303 覆土	-26.7	1210 ± 30	cal AD 780 cal AD 795 cal AD 800	cal AD 780 - 830 (57.5%) cal AD 835 - 875 (42.4%)
PLD-1405 (AMS)	炭化物 No.2 (クリ) SI310 覆土	-24.2	1220 ± 30	cal AD 780	cal AD 775 - 875 (100%)
PLD-1406 (AMS)	炭化物 No.3 (クリ) SI310 RC32	-27.5	1280 ± 40	cal AD 695 cal AD 700 cal AD 715 cal AD 750 cal AD 765	cal AD 690 - 730 (53.6%) cal AD 735 - 775 (46.4%)
PLD-1407 (AMS)	炭化物 No.4 (クリ) ⅢS南北ベルト 北端Ⅲ層 十和田火山灰直下	-26.9	1280 ± 30	cal AD 695 cal AD 700 cal AD 715 cal AD 750 cal AD 765	cal AD 690 - 725 (52.2%) cal AD 740 - 770 (47.8%)
PLD-1408 (AMS)	炭化物 No.5 (クリ) SW202 確認面	-27.4	1290 ± 30	cal AD 690 cal AD 705 cal AD 710 cal AD 755 cal AD 760	cal AD 685 - 720 (55.6%) cal AD 740 - 770 (44.4%)
PLD-1409 (AMS)	炭化物 No.6 (クリ) SW301 確認面	-24.7	1220 ± 30	cal AD 780	cal AD 775 - 875 (100%)
PLD-1410 (AMS)	炭化物 No.7 (クリ) SW207 確認面	-26.0	1220 ± 40	cal AD 780	cal AD 775 - 880 (93.3%)
PLD-1411 (AMS)	炭化物 No.8 (オニグルミ) SKF344 最下層	-27.7	3060 ± 40	cal BC 1370 cal BC 1355 cal BC 1350 cal BC 1340 cal BC 1315	cal BC 1390 - 1330 (58.2%) cal BC 1325 - 1290 (28.9%) cal BC 1280 - 1265 (12.9%)
PLD-1412 (AMS)	炭化物 No.9 (クリ) SKT308 褐色土	-26.7	4580 ± 40	cal BC 3360	cal BC 3490 - 3470 (17.2%) cal BC 3375 - 3335 (45.6%) cal BC 3210 - 3190 (17.0%) cal BC 3155 - 3125 (20.1%)

第6表 炭化材樹種同定結果

試料No.	出土地点	樹種
1	炭化材① SI303覆土	クリ
2	炭化材② SI303覆土	クリ
3	炭化物③ SI303 RC32	クリ
4	炭化物④ ⅢS南北ベルト 北端Ⅲ層	クリ
5	炭化物⑤ SW202 確認面	クリ
6	炭化物⑥ SW301 確認面	クリ
7	炭化物⑦ SW207 確認面	クリ
8	炭化物⑧ SKF344 最下層 最下層	オニグルミ
		クリ
9	炭化物⑨ SKT308 (焼土?)	クリ

第7表 火山ガラスの形態区分



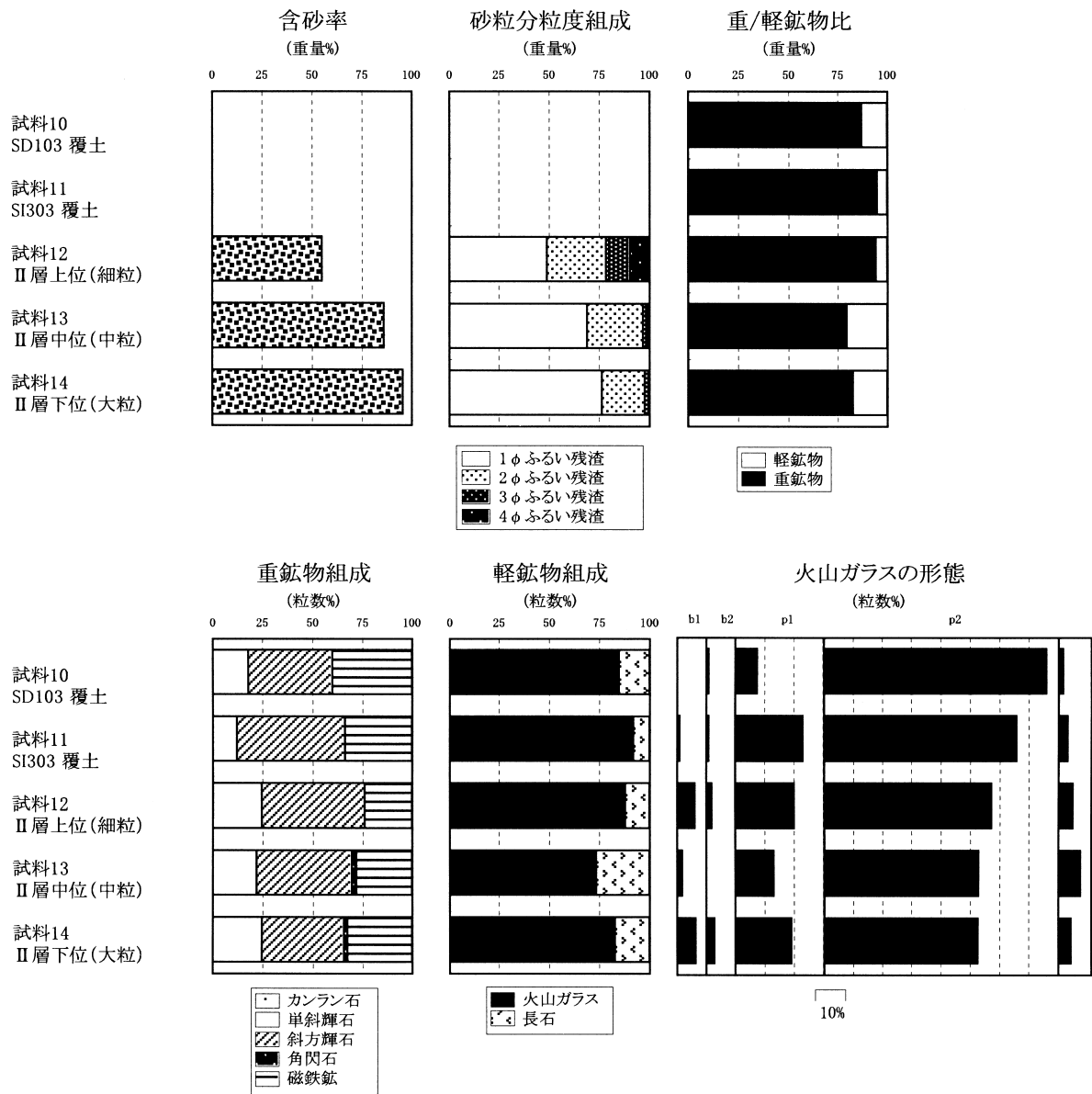
第8表 堆積物の鉱物分析結果一覧

試料名	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成 (重量%)				重・軽鉱物組成 (重量%)	
		1φ	2φ	3φ	4φ	軽鉱物	重鉱物
試料No.10 SD103覆土	-	-	-	-	-	87.2	12.8
試料No.11 SI303覆土	-	-	-	-	-	94.9	5.1
試料No.12 II層上位(細粒)	54.9	49.0	29.5	12.0	9.6	94.1	5.9
試料No.13 II層中位(中粒)	85.8	69.1	27.8	2.2	0.9	79.4	20.6
試料No.14 II層下位(大粒)	95.4	76.4	21.5	1.6	0.5	82.5	17.5

試料名	重鉱物組成(粒数)					
	カンラン石 Ol	単斜輝石 Cpx	斜方輝石 Opx	角閃石 Hor	磁鉄鉱 Mag	不明 Opq
試料No.10 SD103覆土	0	27	64	0	61	8
試料No.11 SI303覆土	0	22	99	0	62	4
試料No.12 II層上位(細粒)	0	44	92	0	43	16
試料No.13 II層中位(中粒)	0	37	81	4	48	53
試料No.14 II層下位(大粒)	0	39	65	3	52	85

試料名	軽鉱物組成(粒数)		火山ガラス形態分類(粒数)				
	長石 Pl	火山ガラス Vg	平板状 b1	Y字状 b2	繊維状 p1	スポンジ状 p2	破碎型 c0
試料No.10 SD103覆土	25	140	0	1	12	125	2
試料No.11 SI303覆土	16	181	1	1	45	129	5
試料No.12 II層上位(細粒)	23	168	10	3	38	109	8
試料No.13 II層中位(中粒)	60	166	3	0	29	119	15
試料No.14 II層下位(大粒)	28	136	9	4	31	86	6

第9表 堆積物中の鉱物組成



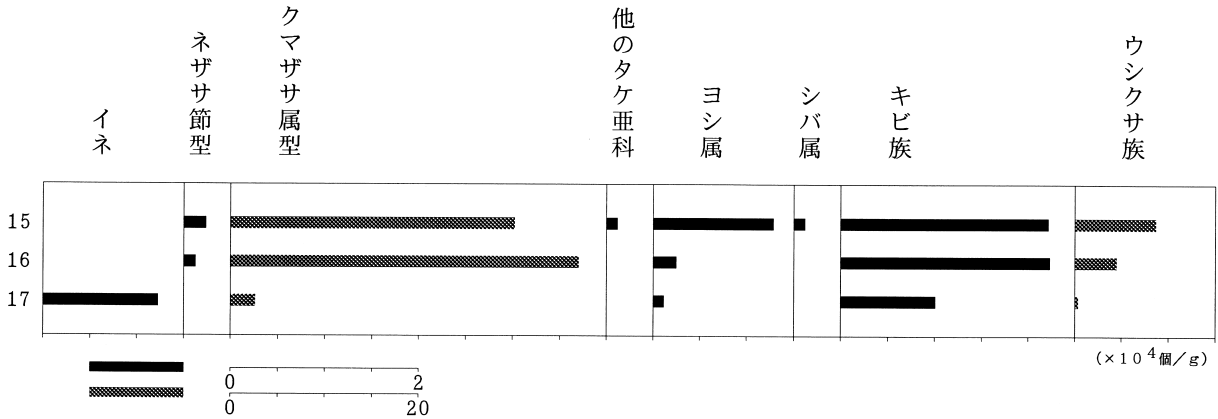
第10表 火山ガラスの屈折率測定結果

試料名	範囲(range)	平均(mean)
試料10 SD103 覆土	1.5007 - 1.5039	1.5025
試料11 SI303 覆土	1.5014 - 1.5041	1.5026
試料12 II層上位(細粒)	1.5006 - 1.5044	1.5025
試料13 II層中位(中粒)	1.5018 - 1.5046	1.5033
試料14 II層下位(大粒)	1.5006 - 1.5058	1.5039

第11表 試料1g当たりの植物珪酸体個数

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
15	0	2,300	301,900	1,200	12,800	1,200	22,100	86,300	31,500
16	0	1,200	370,100	0	2,500	0	22,300	44,600	34,700
17	12,300	0	25,700	0	1,100	0	10,000	3,300	6,700

第12表 植物珪酸体分布図



第13表 花粉化石一覧表

和名	学名	18	19	20
樹木				
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	1
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	1	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	-	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	-	1
クリ属	<i>Castanea</i>	-	1	2
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	1
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	6
草本				
イネ科	Gramineae	-	-	4
マメ科	Leguminosae	-	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	-	4
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	4
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	-	2
シダ植物				
単条型孢子	Monolete spore	-	-	2
三条型孢子	Trilete spore	1	-	1
樹木花粉				
樹木花粉	Arboreal pollen	1	2	13
草本花粉				
草本花粉	Nonarboreal pollen	0	0	15
シダ植物孢子				
シダ植物孢子	Spores	1	0	3
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	2	2	31
不明花粉				
不明花粉	Unknown pollen	0	5	5

第6章 まとめ

本遺跡の発掘調査では、国道建設予定地内の6,500㎡という限られた範囲にもかかわらず、縄文時代の土坑墓8基、土坑2基、陥し穴10基、フラスコ状土坑4基、平安時代の竪穴住居跡2軒、平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡5棟、溝跡1条などを検出した。また、遺構内外から、縄文時代早期～晩期、続縄文時代、平安時代、中世の遺物が出土した。個別の遺構と遺物については、第4章で述べているが、ここでは発掘調査の成果と今後の課題を抽出してみたい。

縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代の遺構としては、8基検出した土坑墓について述べてみたい。このうちSK327土坑墓からは、前期初頭の尖底土器2個体と台石2個が出土しているが、この土坑墓の底面には、十字に溝が掘られていた。他の土坑墓でも、1条あるいは平行する2条の溝が検出されており、注目される。

県内の他遺跡でも、貯蔵穴と判断されている土坑の底面に検出されている例があるが、土坑墓では類例がないことから、貯蔵穴を再利用したものが再検討する必要がある。

縄文時代早期の土器は、貝殻腹縁文を施した白浜式土器や横位の連続性が強い口縁部文様帯区画内に貝殻腹縁文を多数施した物見台式がある。この型式特有の底部には、乳房状のものもあった。全般に胎土は緻密で、焼成は良好であった。当該期に近い土器は、複節沈線が施された尖底土器が出土した鹿角市八幡平上葛岡遺跡や同市花輪の柏木森遺跡、同市十和田の大湯環状列石などで見つかっている。また、大館市の鳶ヶ長根遺跡、上ノ山遺跡、寒沢遺跡でも出土例がある。

縄文時代前期初頭の早稲田6類に比定される尖底土器には、縄文地文の上に篋状工具または棒状工具によって横位に沈線文を施したものと、押し引き沈線文を施したものがあつた。縄文地文に押し引き沈線文を施した尖底土器は、青森県六ヶ所村の表館遺跡・表館遺跡・新納屋遺跡(2)・鷹架遺跡、青森県八戸市の鳥木沢遺跡などで出土例がある。県内での出土例は少ないため、類例の比較検討は困難であるが、新たな資料を提示できたことの意義は大きい。

また、土坑墓群の近くから長さ7cm、幅4cm、厚さ3cmで約95gの重量をもつベンガラ塊が出土しているが、土坑墓内から出土した台石やすり石に、ベンガラが付着しているものがあることから、ベンガラ塊は赤色顔料として加工される前の原材料である可能性が高い。「赤い色の自然礫」として処理されることが多かったこの種の礫も検討する必要性のあることを指摘したい。

続縄文時代の遺物について

小破片の数点ながら、後北式、小坂式に比定される土器が出土した。県内では鹿角市や小坂町、大館市、能代市など米代川流域の遺跡からの出土が報告されているが、僅かな例を除き土器器形が明確になることは少ない。本地域における当該期の土器文化を知るためには、わずかずつでも資料の蓄積が必要である。

平安時代～中世の遺構と遺物について

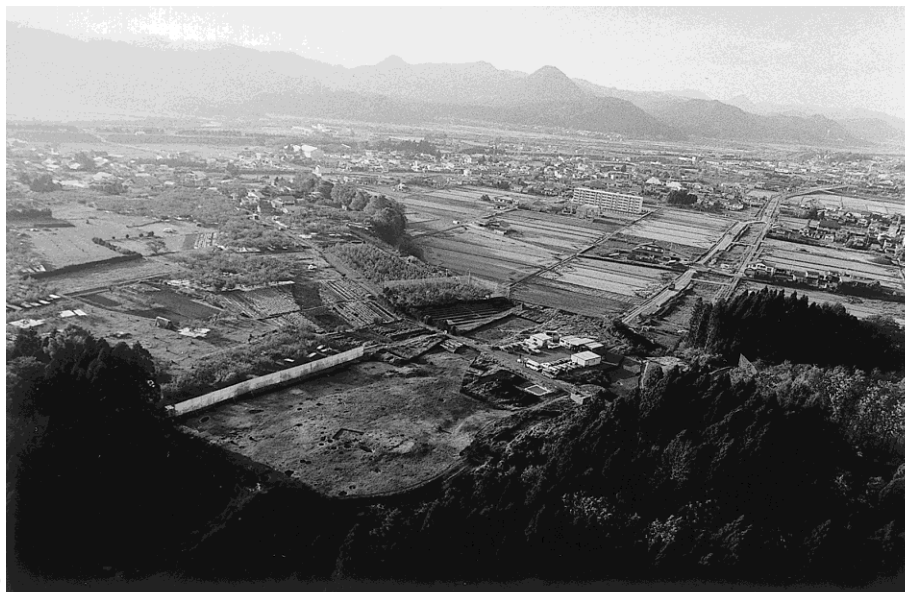
当地域の平安時代の遺跡研究で、年代示準資料として活用されているものの1つに十和田 a 降下火山灰（大湯浮石層）がある。西暦915年の降灰記録に比定されるこの火山灰は、本遺跡の2軒の竪穴住居跡内の堆積土中に確認された。2軒の竪穴住居は、火山灰があまり攪乱されていない状態で堆積していたことと、住居跡に付設されていたカマドが、煙道部の長い形態の所謂東北型カマドであり、出土した土器の編年上の位置付けから判断すると10世紀初頭という年代が与えられる。

また、SD 103とした溝状遺構は、堆積した火山灰層を掘り込んでいることから、10世紀初頭以降の構築と判断されたが、この溝状遺構の時期や性格については不明である。5棟検出した掘立柱建物跡と1条の柱穴列は、平安時代～中世の構築と考えられる。

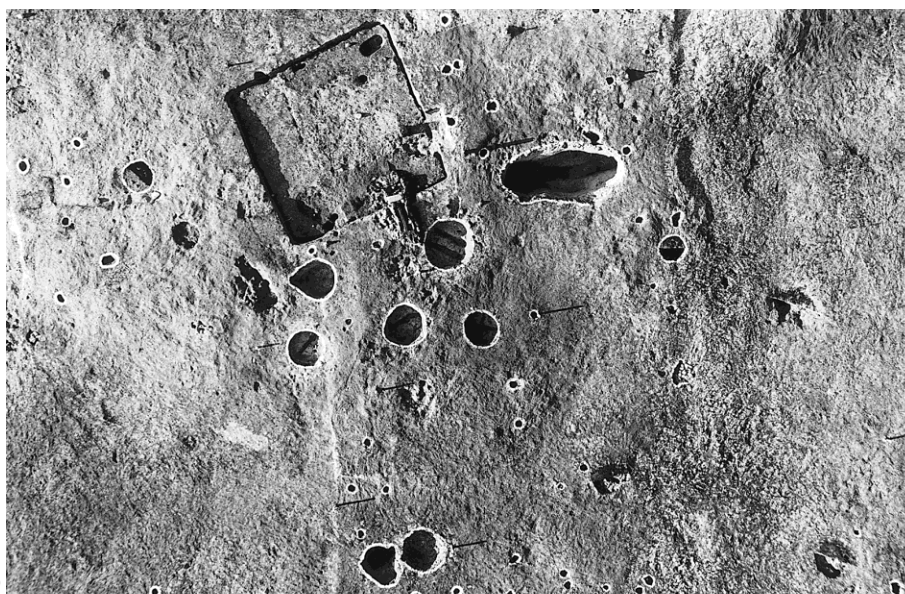
本遺跡の調査では、縄文時代早期から、この台地上で人々の営みがあり調査区内では墓域、狩猟場、居住域、耕作地と土地利用が変遷していったことが明らかになったが、周辺地域の遺跡との関わりや相互の比較検討をする必要のあることを今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 『表館遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第61集 1980(昭和55年)
- 青森県教育委員会 『鷹架遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第63集 1980(昭和55年)
- 青森県教育委員会 『表館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第91集 1984(昭和59年)
- 三沢市教育委員会 『根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書』 三沢市埋蔵文化財調査報告書第2集 1984(昭和59年)
- 三沢市教育委員会 『小田内沼(1)(4)遺跡発掘調査報告書』 三沢市埋蔵文化財調査報告書第10集 1991(平成3年)
- 八戸市教育委員会 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 - 鳥木沢遺跡・丹後谷地遺跡(2)・笹子遺跡(4)-』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第17集 1985(昭和60年)
- 岩手県立博物館 『岩手の土器』 県内出土資料の集成 1982(昭和57年)
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書 - 北の林 遺跡・上葛岡 遺跡・上葛岡 遺跡・小豆沢館遺跡 -』 秋田県文化財調査報告書第90集 1982(昭和57年)
- 秋田県教育委員会 『はりま館遺跡発掘調査報告書(上巻)(下巻)』 秋田県文化財調査報告192集 東北自動車道小坂インターチェンジ 建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査 1990(平成2年)
- 秋田県教育委員会 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 寒川 遺跡・寒川 遺跡 -』 秋田県文化財調査報告167集 1988(昭和63年)
- 秋田県教育委員会 『東北自動車道秋田線発掘調査報告書XXI - 小田 遺跡 -』 秋田県文化財調査報告262集 1996(平成8年)
- 佐々木潤之介・佐藤守・板橋範芳編 『北秋田と羽州街道』 街道の日本史9 吉川弘文館 2000(平成12年)
- 大川清 鈴木公雄 工楽善通 『日本土器事典』 雄山閣 1996(平成8年)
- 戸沢充則 『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994(平成6年)



遺跡近景(南東から)



遺構集中区(真上から)



SK327遺物出土状況
(東から)



SK304 (西から)



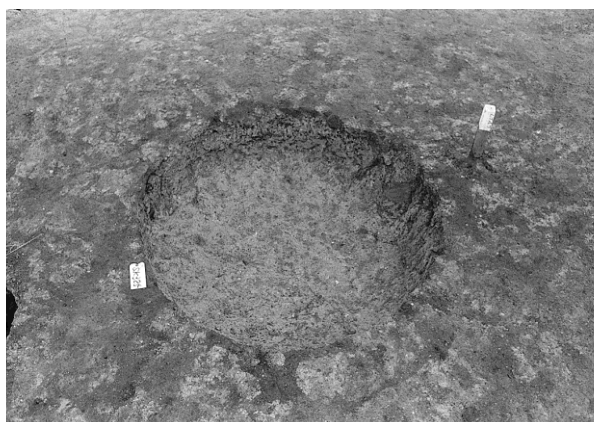
SK305 (南東から)



SK307 (東から)



SK320 (北東から)



SK325 (南から)



SK327 (南東から)



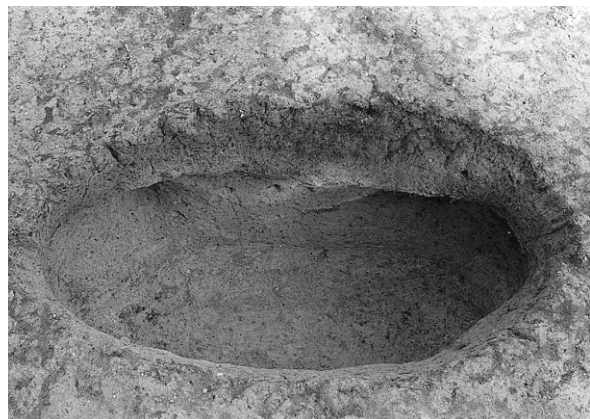
SK328 (南西から)



SK327 周辺作業風景 (北から)



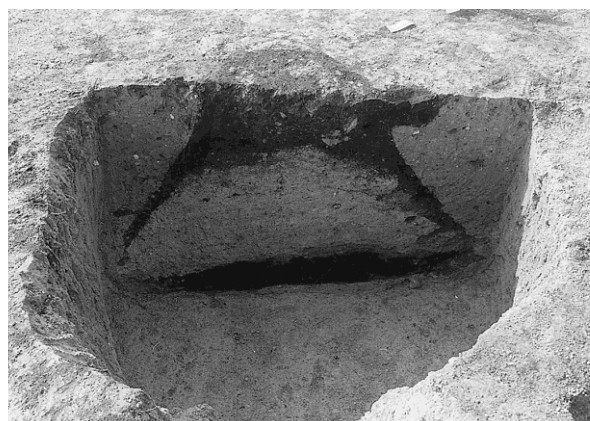
SKT308 (西から)



SKT331 (北東から)



SKF309 (西から)



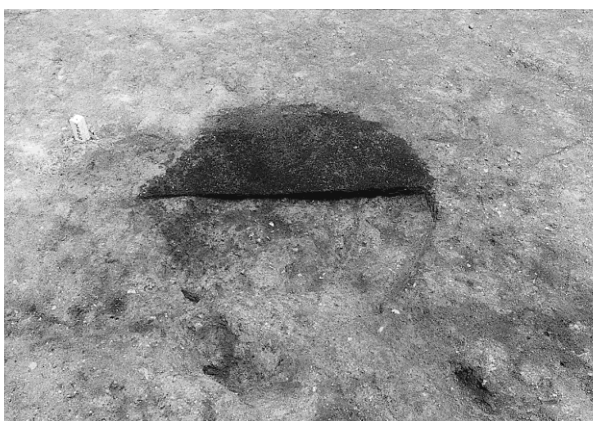
SKF344 (南東から)



SI303 確認状況 (南西から)



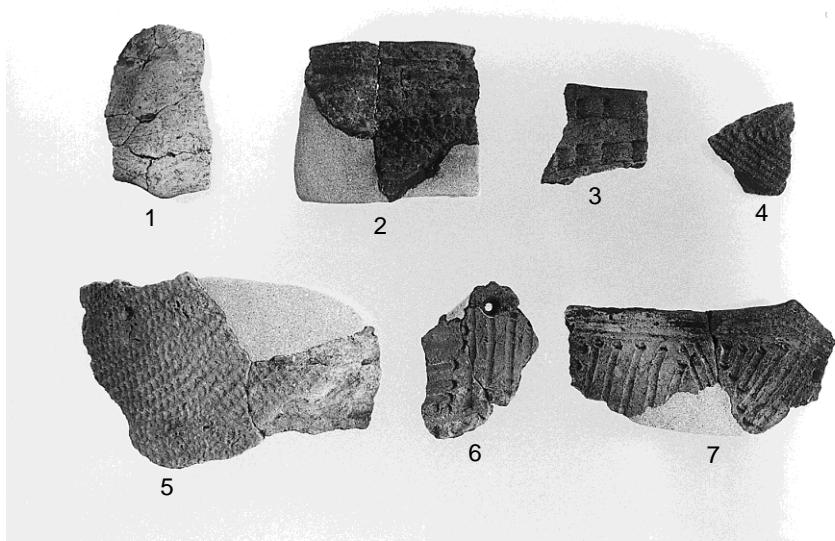
SI303 カマド (北西から)



SW202 (西から)



SD103 (南東から)

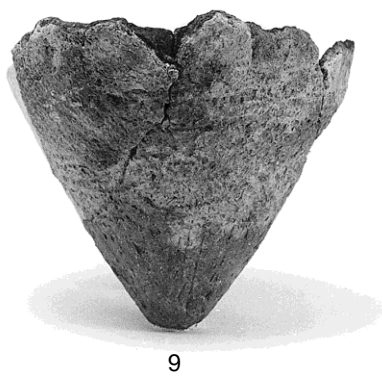


SK304(1) SK305(2~4)
SK307(5~7)



SK327

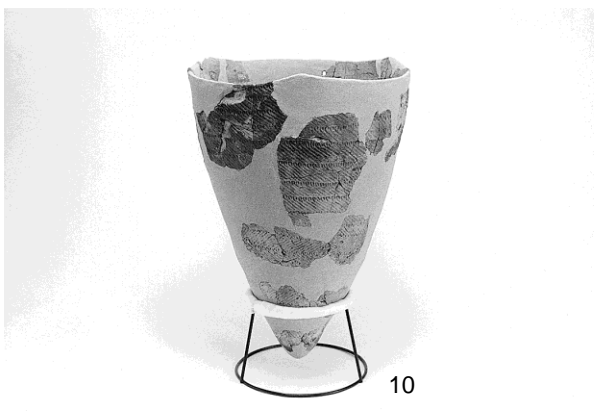
8



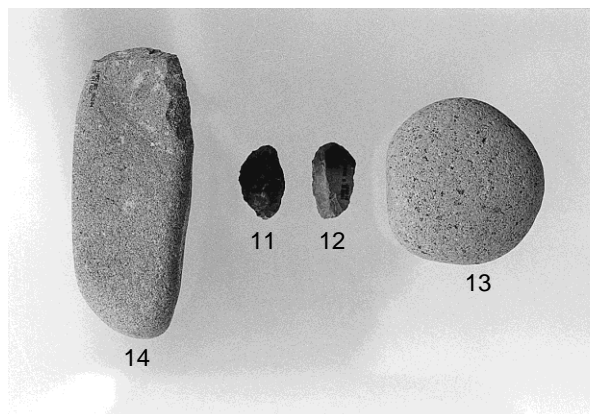
9

SK327

1、遺構内出土土器



SK304 305 307



SK304(14) SK307(11.12) SK325(13)



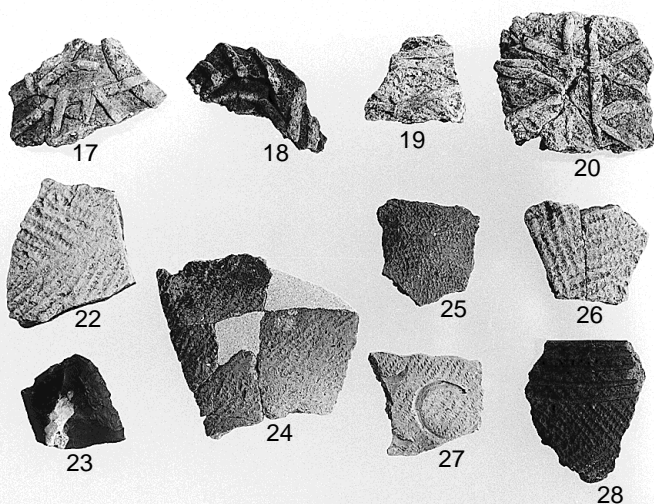
15

SK304



16

SK327



SKT308(17 ~ 20, 22, 23) SKF309(24 ~ 27) SKF344(28)



21

SKT308

2、遺構内出土土器・石器



3、SI303遺構内出土土器



47



53



54



55

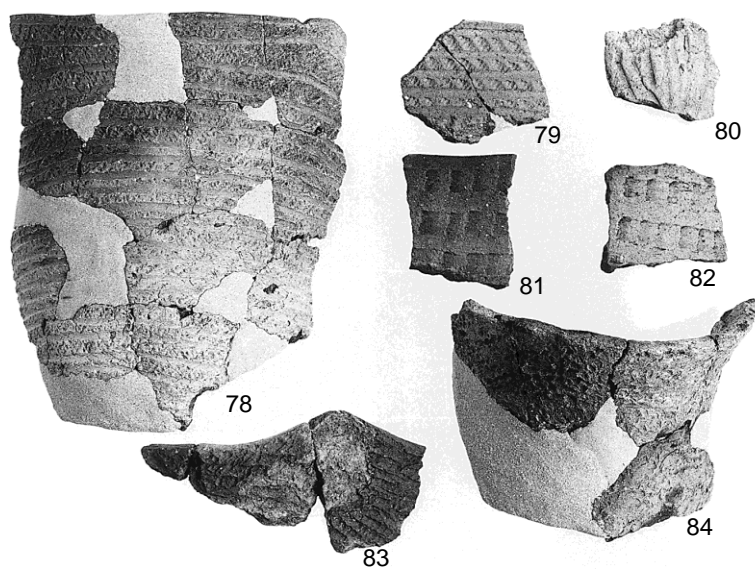
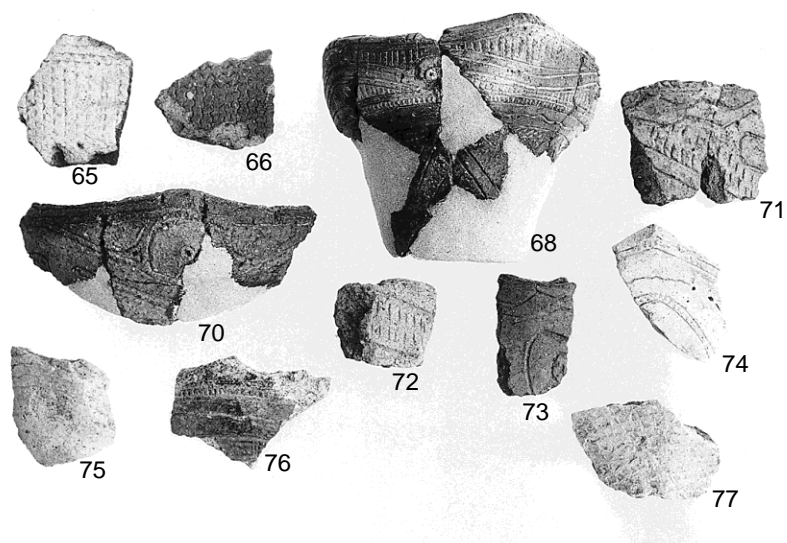


56

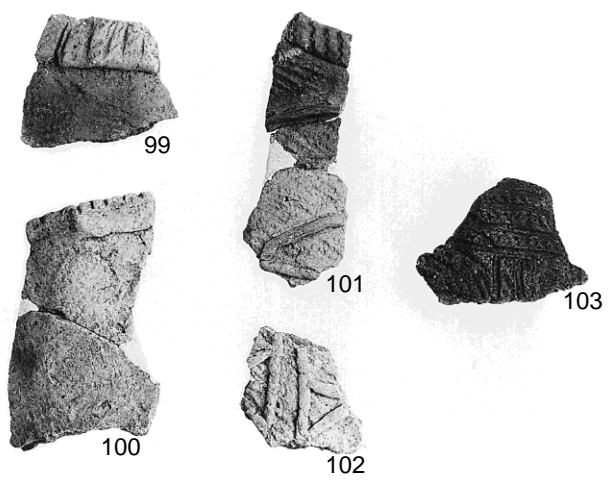
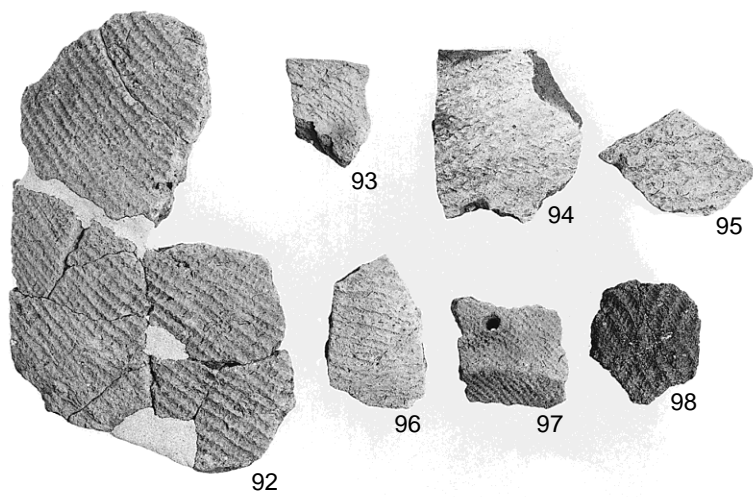
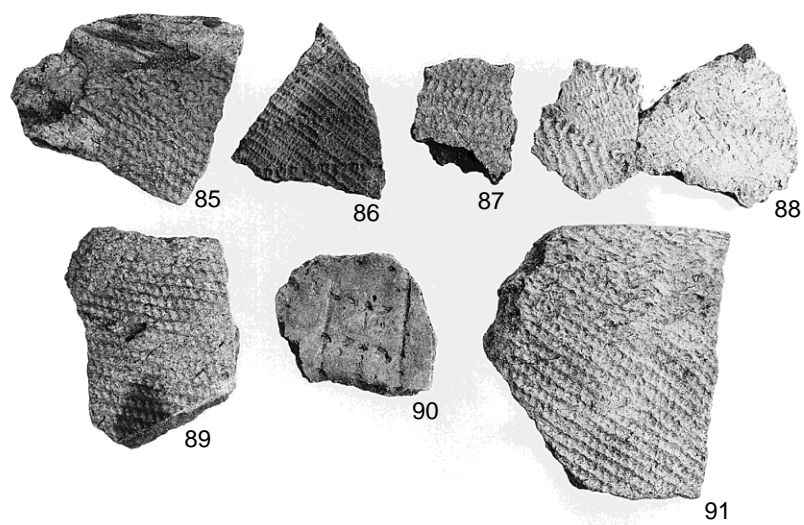


60

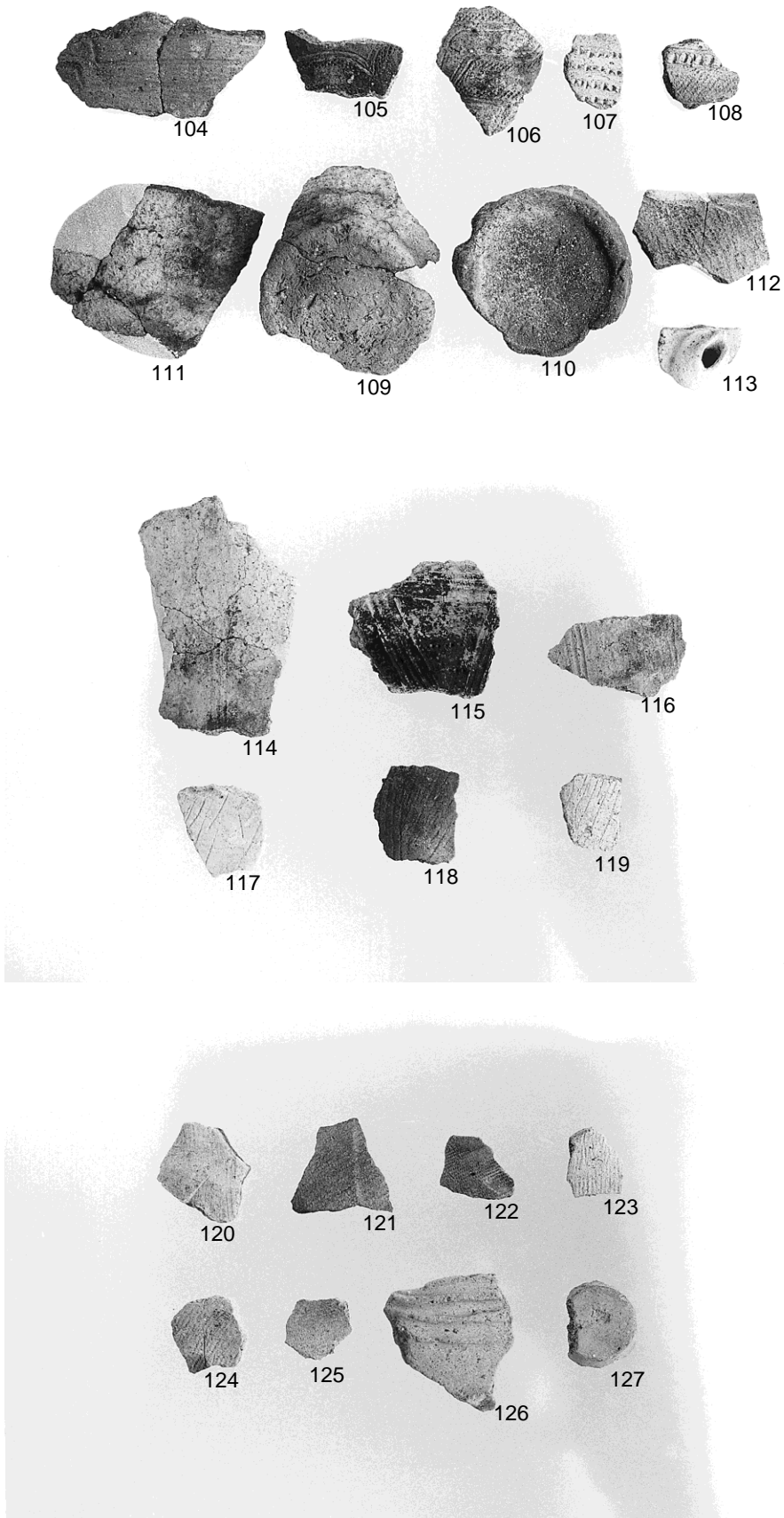
4、SI310遺構内出土土器



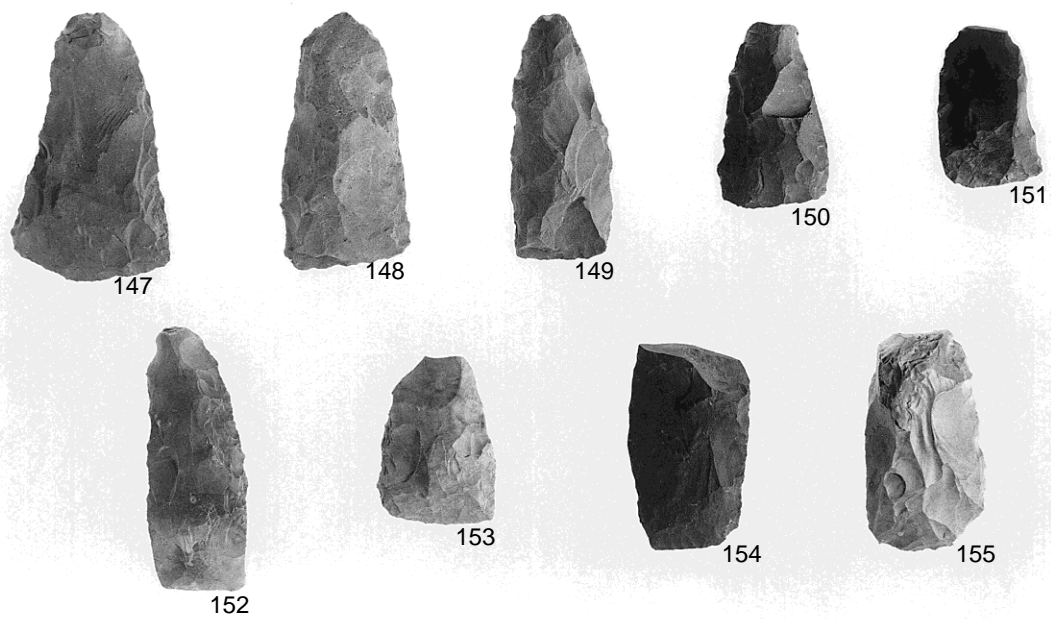
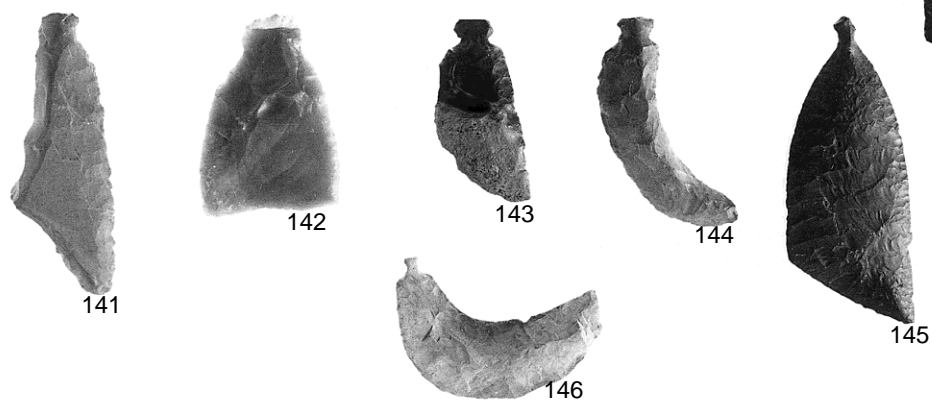
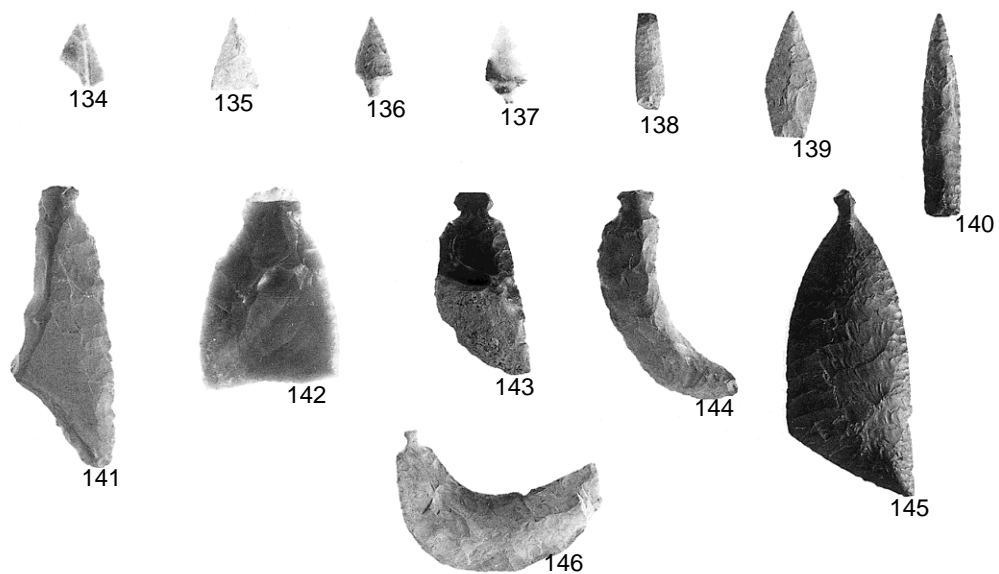
1、遺構外出土土器



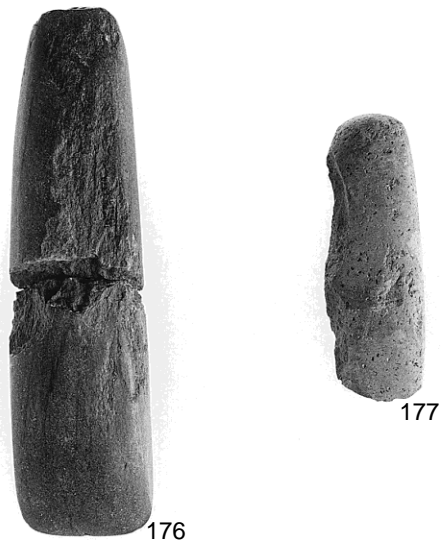
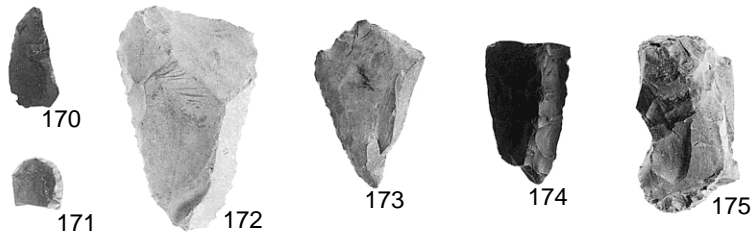
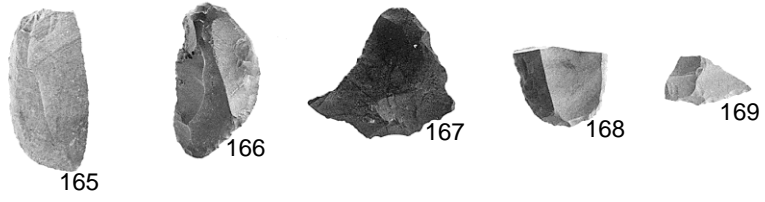
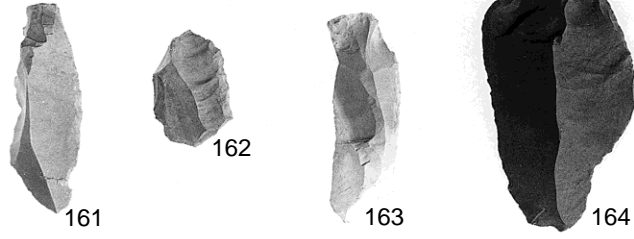
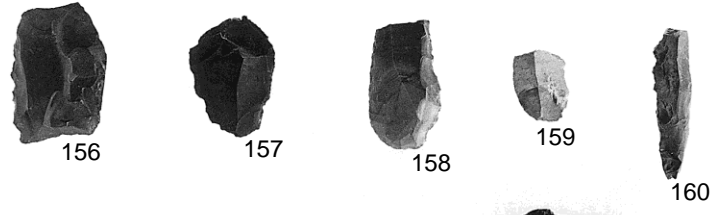
2、遺構外出土土器



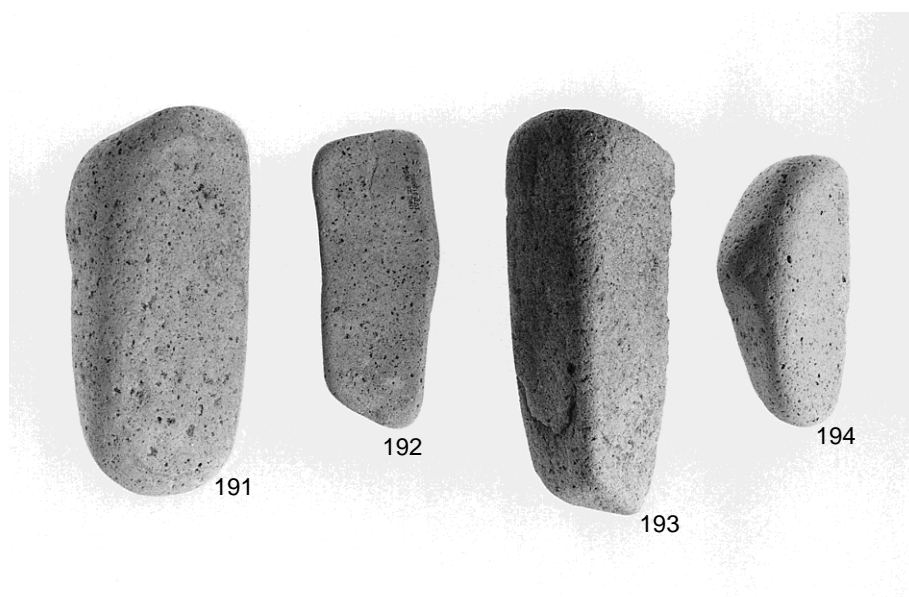
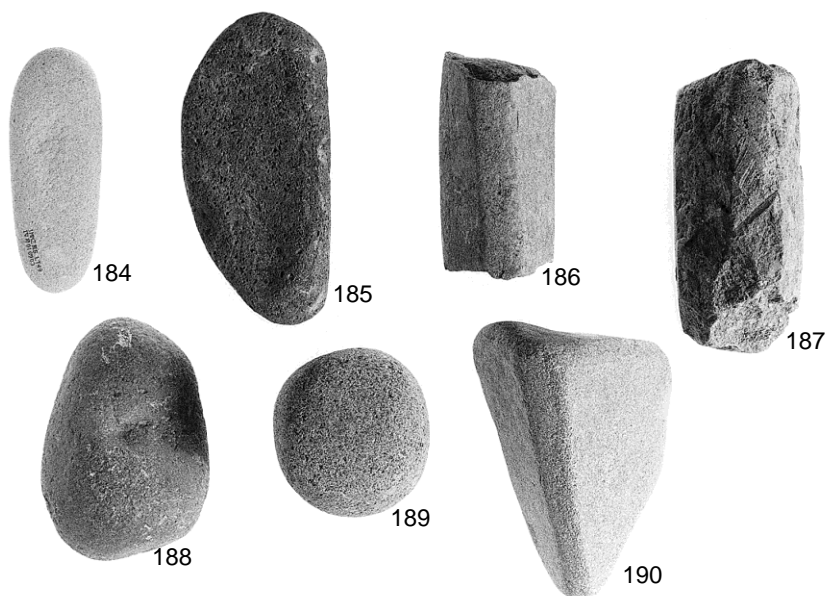
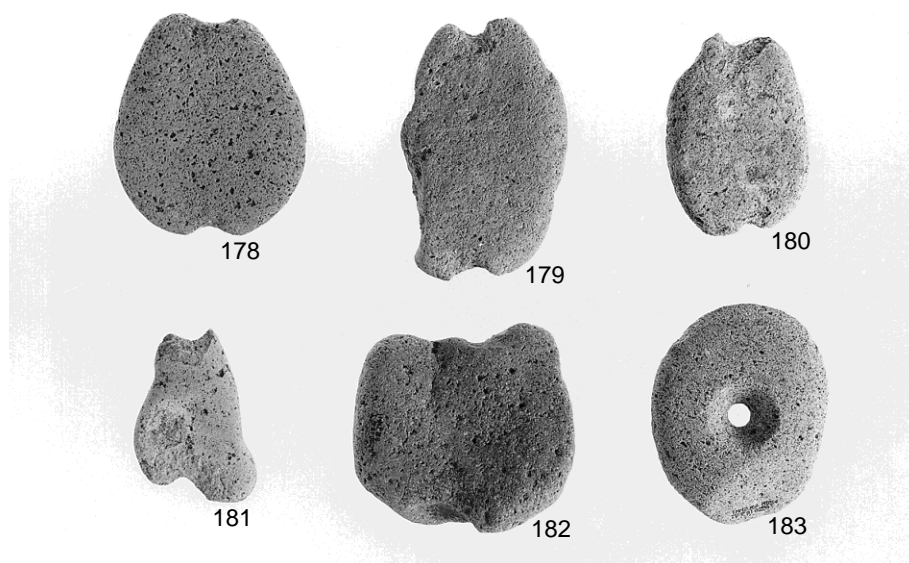
3、遺構外出土土器



4、遺構外出土石器

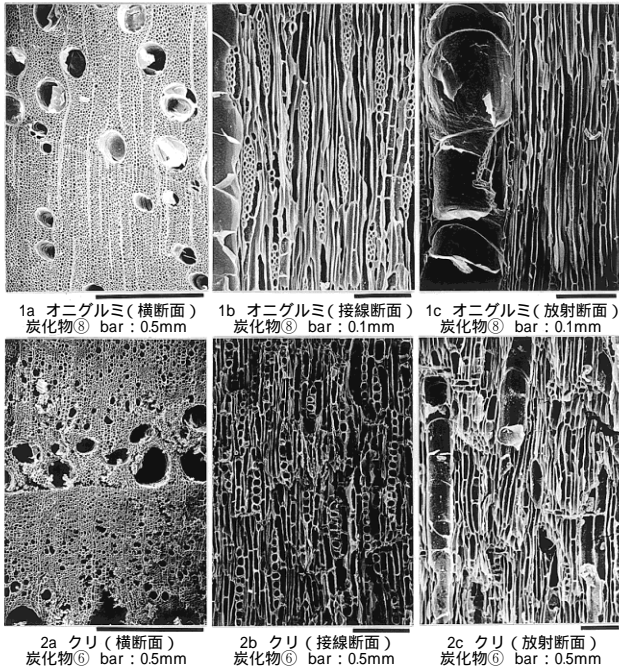


5、遺構外出土石器

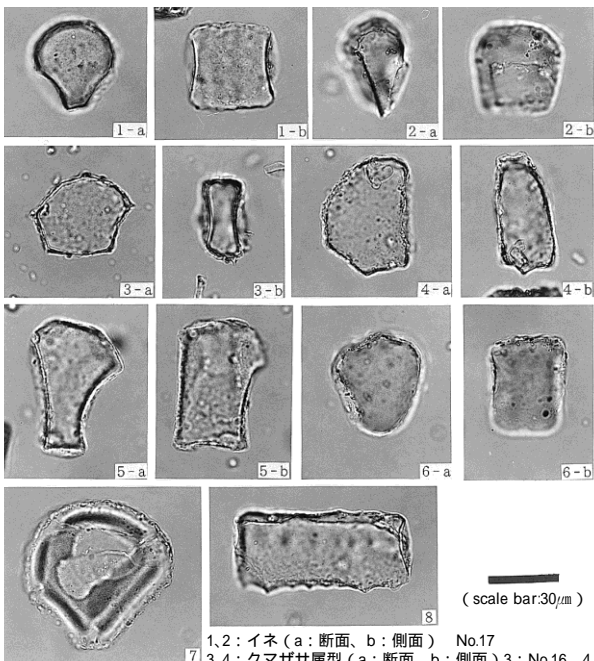


6、遺構外出土石器

図版14 - 1 炭化材樹種

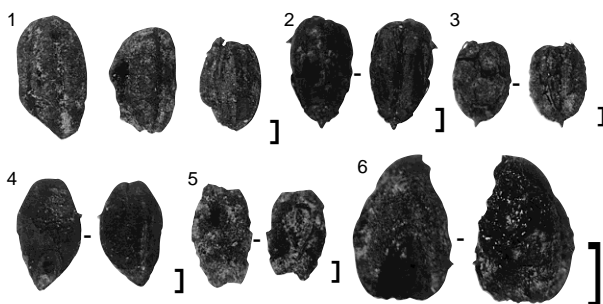


図版14 - 3 植物珪酸体



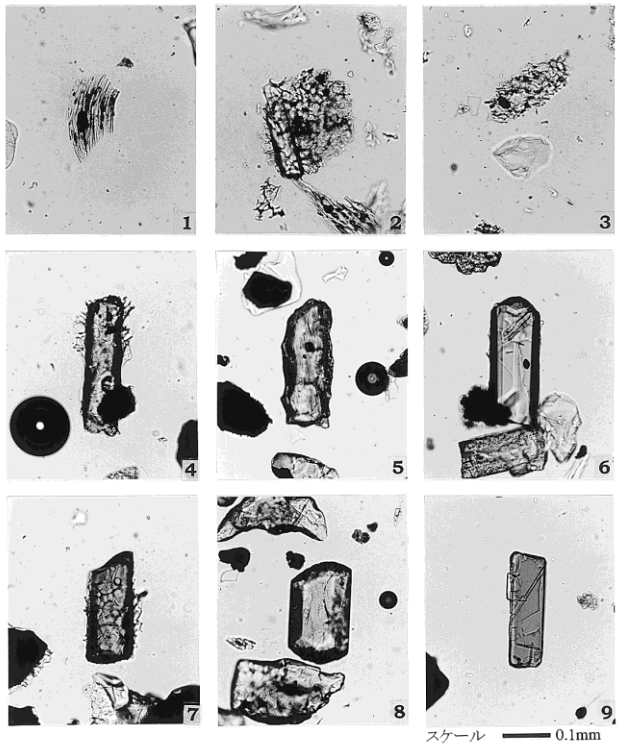
1,2: イネ (a: 断面、b: 側面) No.17
3,4: クマザサ属型 (a: 断面、b: 側面) 3: No.16 4: No.15
5,6: ウシクサ族 (a: 断面、b: 側面) 5: No.16 6: No.15
7: ヨシ属 (断面) No.15 8: キビ属 (側面) No.15

図版14 - 5 試料22(SI303カマド周辺付近)から出土した炭化種実 (スケールは1mm)



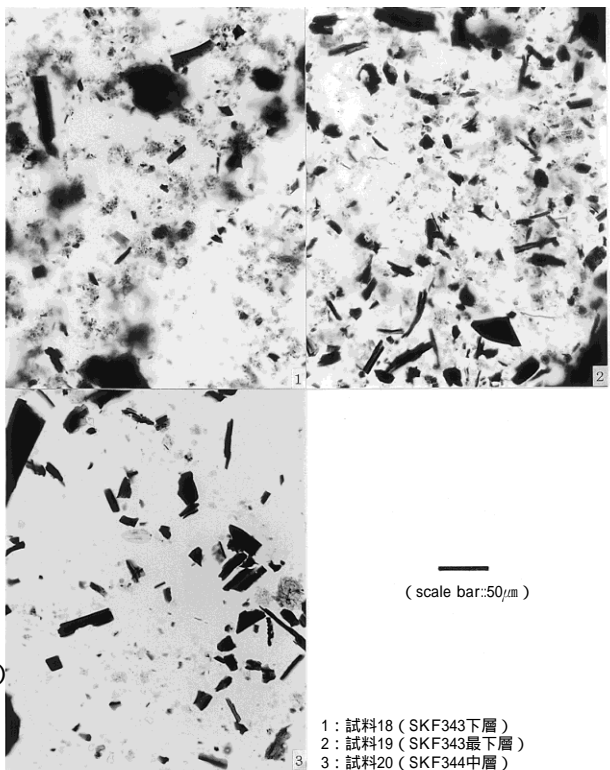
1: イネ、炭化胚乳 2, 3: コムギ、炭化胚乳 4, 5: オオムギ、炭化胚乳
6-8: キビ、炭化胚乳 9, 10: アウ近似種、炭化胚乳

図版14 - 2 堆積物中の鉱物類



1: 軽石型繊維状火山ガラス(試料1) 2,3: 軽石型スポンジ状火山ガラス(試料1)
4,5: 単斜輝石(試料5) 6-8: 斜方輝石(試料5) 9: 角閃石(試料4)

図版14 - 4 花粉化石群集 プレパラート状況



1: 試料18 (SKF343下層)
2: 試料19 (SKF343最下層)
3: 試料20 (SKF344中層)

報告書抄録

ふりがな	ものみぞかさんいせき							
書名	物見坂Ⅲ遺跡							
副書名	国道282号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第354集							
編著者名	藤澤一史							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL0187-69-3331							
発行年月日	西暦2003年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ものみぞかさんいせき 物見坂Ⅲ遺跡	あきなけんかづのし 秋田県鹿角市 とわだにきぎあざ 十和田錦木字 しもの 下野2-2外	05209		40°	140°	20010517	6,500m ²	国道282号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
				14'	46'	~		
				97"	80"	20011206		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
物見坂Ⅲ遺跡	墓域 狩猟場	縄文時代	土坑(墓) 陥し穴 フラスコ状土坑		縄文土器 石器			
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 その他 柱穴など		土師器			

秋田県文化財調査報告書第354集

物見坂Ⅲ遺跡

—国道282号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行	平成15年 3月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町弘田字牛嶋20番地 電話 0187 (69) 3331 FAX 0187 (69) 3330
発 行	秋田県教育委員会 〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号 電話 018 (860) 5193 FAX 018 (860) 5886
印 刷	秋田活版印刷(株)

